祝祭日の説教集

始

特231
587

祝祭日の説教集

待降節

(一) 待降節の心得

いよ〳〵待降節となりました。待降節とは主の御降誕を待つと云ふ意味で、舊約時代の人々が大凡四千年の間（ヘブレイ文に從ひ）救主を待つたと云ふ所から、今も毎年四週間づゝ、御降誕前の準備をする事に定めてあります。昔洗者ヨハネが主の先驅となつて人々に悔悛を勸めた時、人々は深い夢から醒めたかの樣な心持になつて、今更の如く我身の罪を恐ろしく感じ、「何を爲たら可いのでせう」と口を揃へて尋ねました。我々も御降誕が眼前にさし迫つて來るに隨ひ、イエズス樣の施し給ふ聖寵を戴くが爲「何をしませう、何うしたら可いでせうか」と我と我心に尋ねて見なければなりません。その爲には

(1)舊約時代の豫言者等の如く眠を醒し、(2)聖母マリアの如く心を清淨にし、(3)洗者ヨハネの如く主の先驅を務める必要があるのであります。

(1) 眠を醒せ

眠を醒す！何處を見廻はしても人は皆孜々矻々と立働いて居る、朝は星を戴いて家を出で、晩は月の光を踏まなければ歸宅せぬと云ふほどに、毎日々々働いて居る、それに持つて來て「眠を醒せ」と云ふのは如何にも不思議のやうであります。然し聖會が待降節の第一主日のミサ文中に「兄弟等よ、眠より起くべき時は既に來れり」と云ふ聖パウロの御言を讀み聞かして居るのを以て見ると、世の中には隨分眠を貪つて居るものがあると云ふ證據ではありますまいか。實に大概の人は何處にか金の生る樹はあるまいか、福の神が待つて居まいか、と眼を皿にして見廻つて居るが、然し其心の中に分け入つて見ると、全く眠つて居る、「救靈に注意する人でなければ眼を醒して居るのではない」と云ふボスエ司教の言を眞こせば、今の時代ほど人が活潑に働いて居る時、夜の目も合さぬ位に東奔西走して居る時は少いが、また今の時代ほど「眠より醒むべき時は既に來れり」と聲を限りに叫ばなければならぬ時代はありますまい。

實に當代の人は其智慧を充分に働かして、色々と學問の研究に沒頭して居るが、たゞ最も大切な救靈の學問だけには全く眠つて居る。其體を働かして樣々の職業に有らん限りの力を傾け盡して居るが信者の勤を果すと云ふ點に就ては全く眠つて居る。心を上げて天を眺めることがないものだから、愈々下へ〳〵と落ち込んで行き、聖パウロの所謂「肉的人物」、即ち靈魂を有たない禽獸同樣の人間になつて了ふ。禽獸同樣に其の眼は地上にのみ注がれ、其望は現世だけに限られ、たゞ食べるが爲、飲むが爲、着るが爲、身を樂ませるが爲にだけ働いて居る、そして飽まで食べ、飽くまで飲み、望み通りに着、望み通りに樂まれたら、もう全く滿足し終つて、ゴウ〳〵と高鼾をかき、心地よき熟睡に入り、些しも靈魂の事を思はない、行末のことを慮らない、天主樣に就ても、醒めてから直ぐ差出さねばならぬ一生涯の總計算書に就ても、全く無關心で、一度でも考へたことすらないと云ふ位であります。

斯う云ふ鹽梅に眠つて居る人も、今こそ目を醒さねばならぬ時となりました。頭を擡げて自分の行末を考へねばならぬ時となりました。

皆さんはカトリック信者である、熱心なカトリック信者である、夫れは疑ひを容れざる所ですが、然しこの世智幸い浮世を渡るにつけ、毎日〳〵せつせと働かなければ食べられぬと云ふ有樣である所から、自然現世の事にばかり氣を奪はれて、後の世の方をお留守になし、體の眼が明き過ぎて、靈魂の眼が眠つて了ふと云ふことになつては居ませんでせうか、「兄弟等よ、眠より起くべき時は既に來れり」

皆さんはカトリック信者である、天主樣の存在を固く信じ、毎日々々使徒信經を誦へて居られる、然し實際の行爲に立入つて見ると、天主樣は皆さんの爲に全くのエトランゼー（外國人）、否な厄介な代物の如く扱はれ給ふのではないでせうか。なるほど毎日天主樣の爲に幾らかの時間を割いて居られる

でせうが、然しその時間を成るべく少く、ぎり〳〵にして、漸く朝夕の祈禱の時間だけに縮めて居られることはありますまいか。その祈禱も何んな風に誦へて居られる？、無駄話をし、無駄遊びをして、一時間も二時間も費しながら、天主様ミ朝夕、御話をする僅か十五分の時間すら惜んで、餘りに長過ぎるミ思ひなさいませんか。仕事片手に、ふら〳〵ミ居眠りながら、その大切な祈禱を誦へなさるのぢやありませんか。ひよつとすれば、犬や猫の如く何の祈禱も誦へないで、そのまゝ寢込んで了ひ、又何の祈禱も誦へないで、其まゝ起きて食べるミ云ふ鹽梅ではございませんか、「兄弟等よ、眠より起くべき時は既に來れり」

皆さんはカトリック信者である、天主様の御攝理を信じて居られませう、慈愛に滿てる眼を始終我々の上に注ぎ、如何なる父親も及ばぬ親切を以て我々の身を護り給ふ天主様、その天主様の御命令なり御許可なりが無くては何一つ我々の上に出來するものでない、しかもその御命令になるこミ、御許可になるこミは、皆我々の爲を思ひ給へばこそ、ミ固く信じて居られるに相違ありません。然るに何かの災難に遭ふ、病に罹る、悲しい目を見るミ、忽ち失望する、力を落す、折角祝福を與へたい積りで、自分を打ち給ふ天主様の御手に接吻することはさておき、何ミかして之を排ね返さうミして居るこミはないでせうか。「兄弟等よ、眠より起くべき時は既に來れり」。

日曜日を正しく守るのは靈魂上のみならず、肉體上にも天主様の祝福を戴く所以である、その反對に「惡錢身に着かず」で、日曜日を守らずして働いても、天主様の掟を破つてお金を儲けても、却て貧乏の基だミは、まさかお忘れになつていらつしやるこミもありますまいが、動もするミ許可も受ずず、ミサの代りの祈禱も誦へないで、働く人がある、たゞへ許可を受けて居るにせよ、其許可は日曜日に働かねば食べられぬミか、向ふの都合で日曜日を休む譯には行かぬとか云ふ人の爲に與へられる許可であるにも拘らず、そんな必要もない人までが、矢張り日曜日も平日同樣に働いて居るミ云ふこミはありませんでせうか、「兄弟等よ、眠より起くべき時は既に來れり」

皆さんはカトリック信者である、人生の目的が天主様であり、天國であるこミは飽まで御承知の所でありませう。然るにその天主様を目指し、その天國を目標として進んで居るカトリック信者にして、往々路草を喰ひ、たゞ〳〵お金を溜めよう、名譽を漁らう、身に安樂をさせようミばかり心掛けて居るこミはありませんか。天國に登る旅路の疲勞を休めるが爲にとて、餘りにも輕卒な慰藉を求めようミするこミはありませんか。何んなものでも讀まう、何んなものでも觀よう、何んなものでも知らうミするこミはありませんか。それは未だ假睡に過ぎないかも知れぬが、油斷をするミ、やがては深い熟睡に陷らんとも限りませんよ、「兄弟等よ、眠より起くべき時は既に來れり」

實に今です、今こそ目を醒すべき時、眠より起き上るべき時であります、救主御降誕の福音を忝うしたのは、安い眠を貪つて居たベトレヘム人ではなく、目を醒して居た牧者等でした。彼等は目を

醒して居たお蔭で、賤しい牧者の身を持ちながら、眞先に救主を禮拜することが出來ました。然らば我々も主の御降誕を祝して、その雨降し給ふ聖寵を豊に蒙らんと欲して居る以上、是非とも目を醒さしく眠より起き上らねばならぬじやありませんか。「兄弟等よ、眠より起くべき時は既に來れり」

(2) 聖母の如く清淨であらねばならぬ

清淨と云ふは强ち貞潔の德ばかりを指すのではなく、すべて罪の汚のない、雪の樣に美はしい姿を云つたものであります。聖母に對して惜氣もなく聖寵をお與へになつた天主樣は、我々にばかりそれを吝み給ふ筈がありません。なるほど聖母は特別の御惠によつて、原罪を免かれさせ給うたのに、我々は却つて罪の中にやごされたものであるが、然し洗禮を授かつた時、其罪の汚は綺麗さつぱりと洗ひ落された、惡魔は逃げ失せて了つた、我身は聖靈のお住ひ遊ばす神殿となり、信、望、愛の德を與へられ、聖會の一分子となり、天主樣の愛子、イエズス、キリスト樣の兄弟として、天國の嗣を受くべき權利さへも與へられたのであります。

聖母は天主樣の聖寵に應ひ、いよ〳〵善を修め、德を積まんと欲し、幼少の頃から身も心も天主樣に獻げ、專らその聖意に適ふやうにと努められました。我々も洗禮を授かつた時、頭に白い被布を戴き、罪の汚を洗はれ、靈魂は雪の如く綺麗になつたのだと諭されたのでありますが、さてその聖寵の白衣は今何うなりましたでせうか。手には火を附けた蠟燭を持たされましたでせう、「天主樣の愛の火焰がお前の心に燃えて居る象徴だ……何時迄もその愛の火焰を消してはならぬぞよ」と注意されたのですが、何時迄その焰を消さずに保つて參りましたでせうか。

あゝ我々はマリア樣ほど用心をしなかつたのです。何んでも見る、何んでも聽く、何んでも讀む、どんな人とでも交際するなど云ふやうにして、心は次第に冷かになつて參りました。惡魔に抵抗し、浮世の欺瞞の手を排ね退ける力が弱つて參りました。目を閉ぢねばならぬ時も閉ぢずに眺めました。耳を塞がねばならぬ時にも却つて之を欲て、良からぬ話を入れました。斯くて知らず識らずの中に、滑つて顚んで、深い穴に落ち込んだのではありませんでせうか。ボスエ司教も曰つた如く「罪惡は人が驚いて逃げ出すやうな怖ろしい容姿を有つて居ない」否、却つて人を引付ける美しい化の皮を被つて居るのです。殊に我々は異教者の中に雜居して居ます。所で異教者には罪と云ふ觀念が殆んど無い、警察の厄介になるとか、赤い衣を着せられるとか云ふことでなければ、何を爲たからとて罪ではない位に考へ、平氣で樣々の惡事を物語つて居るのです。それを聽くに連れて、我々までが、罪の觀念を失つて來る、罪は我々を造り給うた神樣に謀叛することだ、我々を子の如く愛し、身を以て我々の救贖となつて下さつた御主に對して一方ならぬ忘恩の沙汰であるのだ、と云ふやうな考へが次第に薄れて了ふ……崖の上の柵を取り除けたら、何うして深い淵に落ち込まずに濟みませうか。皆さんの中にさうして罪の崖へ足を滑らせ、深い淵へ落ち込んだ御方がありますならば、この待降節に當つて何うぞ聖會

のお勸めにお耳を傾けて下さい、「汝等、今日身を潔くせよ、明日は神の光榮を見ん」と云ふ聖會のお勸めに耳を傾けて下さい、「汝等今日身を潔くせよ」、今日、即ち御降誕迄の間に身を潔くせねばならぬ御降誕の際に、マリア樣、ヨゼフ樣は日もとつぷりと暮れて了ふまで、此處彼處とお宿をお探しになつても探し出し得なさらぬ、戸籍の調査をする役人だとか、お金を持つた旅人だとかゞ旅館には滿ち塞つて彼のナザレトの貧しい夫婦の爲には、小舍の片隅さへも貸してくれるものは居ないのでした。實に神の御子に一夜を安かに明かさせて上げようと云ふ親切な人は一人も居なかつたのであります。

今日でも然うじやありませんか。毎年〳〵御降誕の祝日が參りましても、心の門は堅く塞いで、イエズス樣を入れまいとします。イエズス樣はそんな人の方へいらして、トン〳〵と心の門を叩き「開けて下さい、這入らして下さい」とお願ひになります、「あなたは良心の責に惱まされて居るやうぢや、開けて下さい、私は平安を有つて居るのです……あなたは罪を恥かしがつて居るのでせう、私は再生らして上げますよ。あなたは幸福を望んで居るのでせう。私は永遠の喜悅を携へて居るのです。開けて下さい、あなたは美を欲しがつて居るのでせう、私は最上の美ですよ。開けて下さい、あなたは愛を望んで居ますでせう、私は無限の愛ですよ。開けて下さい、あなたは死んでいらつしやるやうです。私は復活ですよ、生命ですよ」御降誕が近づくに隨ひ、斯う云つて、益々強く叩いて下さる。あゝイエズス樣は我々を救ひ上げたいばかりに、光眩き天の玉座を棄て、馬屋の藁の上にお降りになるのじやありませんか。「空間がありません」と何人か敢へて答へ得るものがムいませう？「汝等今日身を潔くせよ」今日は痛悔の日です、復活すべき時です、喜びの時、天主樣の前に平伏して罪の赦しを願ひ、和解をする時です、「汝等今日身を潔くせよ」

嘗て大罪を犯し天主樣に背いたことのない御方にせよ、一應は背いたにしても、早や痛悔して、その罪を赦された御方にせよ、矢張り身を潔くせねばならぬ譯があります。なるほどイエズス樣を戸外に立たせ申しては居ませんでせう、心のお座敷に御招待申上げて居ますでせう、然し其御座敷と云ふは、イエズス樣に相應しいお座敷でせうか。眞暗い洞穴に似て居ないでせうか。藁屑の散らかつた、不潔な、冷い、じめ〳〵したベトレヘムの馬屋のやうではないでせうか。小罪や、不足や、缺點だらけではありませんでせうか。

然らば罪人たると否とを問はず、何人しも心を潔くせねばならぬ、告白場にかけつけて、己が罪を正直に告白し、樣々の罪惡や、不足や、過失やを追出して、其跡にイエズス樣をお迎へ申すことにせねばならぬ。やがてイエズス樣は我々の心の中に這入り、我々を愛する印として、我々の食物とまでおなり下さるのであります。

(3) 洗者ヨハネの如く先驅とならねばならぬ

ヨハネは人々に向つて「汝等の中に汝等の知らざる一個の人立てり」と申しましたが、思つて見る

こ、是れは何うも怖るべきことであります。ヨハネの頃の人はイエズス樣を識らなかつた。でも其時までイエズス樣が奇蹟を行ひなさつた譯ではなし、福音を宣べ給うたのでもなかつたので、識らなくても罪ではないのでした。然し今日ではイエズス樣の御敎を學び、その驚くべき奇蹟を研究して見たならば、イエズス樣が眞の神、人類の贖主にて在すことを悟れぬ筈はない。然るに我國ではそれを悟らない人ばかり、悟つて居る人は僅に十萬足らずであります。で皆さんはカトリック信者として、洗者ヨハネの如く、先驅の務めに當つて、世の人にイエズス樣を識らしめるやう、お務めになる必要があるのであります。

ヨハネは人に痛悔を勸める前に先づ自ら苦行をいたしました。荒野に引籠り、口には蝗、野蜜を食ひ、身には荒つぽい駱駝の毛衣を着けて苦行をなし、善を修め、德を積み、然る後口を開いて敎を說かれたのですから、人々は群をなして其足下に集まりました。皆さんも世の人にイエズス樣をお識らせなさらねばならぬが、其爲には第一に皆さんの言行が世の人の模範こ仰がれ、流石にカトリック信者は感心なものよこ、平素御敎を嫌つて居る人迄が感服するこ云ふ程であらねばなりません。もしや其反對に出でゝ信仰は冷淡に、行は亂れ、異敎者のそれと格別異る所がないこ云ふ人、人目を憚り恐れて、自分の信仰を包み隱さうこする人、甚だしきに至つては、罪とイエズス樣こを一緒に繫ぎ合はせようこし、朝には祈禱を誦へ、ミサに與り、信仰の務めに從事するが、夕には夫婦相罵り、人を惡言讒謗し、良からぬ遊興に耽るこ云ふやうな人は、カトリック信者の名を汚して居る、聖會の顏に泥を塗つて居る。それでは主の先驅こなるよりか、寧ろ主に反對する、主の大敵こなると謂ふより外はありますまい。「汝等の爲に、我名は異邦人の間に瀆さる」と天主樣が仰しやつたのも、實に無理からぬ次第ではありませんか。

敎を說く前にヨハネは聖書を研究せられた。天主樣から御命令の下る迄は、荒野に籠つて救主に關する豫言を調べて準備をなさつたに相違ありません。皆さんも敎理を研究なさい。夫は第一、我爲でカトリック信者の信仰は盲信仰では駄目です。譯の分つた信仰であらねばならぬ。其上人に攻擊を浴せられた時、之に反駁の矢を射返す位は知つて居なければならぬ。次に人の爲で、眞の道を知らず、暗黑裡に彷徨つて居る人に、敎の話を一口でもして、その目を開けて上げたら、水に溺れ、火に燒けつゝあるのを救ひ出して上げるよりも、其人に取つては有難いこではありませんか……その爲には、善く說敎を聽き、公敎要理に出席し、敎書を熱心に讀み、自ら大に悟る所があらねばなりません。

敎の旨を分つた上では、人に話をします。何人に向つてそんな話をしますか。それは各自の境遇、知識の程度に由ることで、一概には申されませんが、第一自宅に於て親は子供に、兄姉は弟妹に、夫は婦に、婦は夫に話すことが出來ませんか。隣近所にも敎を知らない、祈も知らない子供が居ませんか。之に祈の一口でも、敎理の一條でも敎へられないでせうか。冬の長夜には、そんなことをする餘裕

が十分あります。平生往來して居る異教者と談笑をする間に、一寸宗教談を挿むことも出來ないことはありますまい。

要するに我々は昔の豫言者等の如く、舊約の聖人等の如く、熱い信仰を以てイエズス様を熱望し、聖母マリアの如く、心を潔くして、イエズス様の爲に御座敷を用意し、洗者ヨハネの如く、イエズス様を人に識らしむべく決心せねばなりません。もう幾日かの後に天使等は、「天に於ては神に光榮」とお歌ひになります。御父の永遠の御子なるイエズス様、無限の愛、底知れぬ哀憐のイエズス様、我々の兄弟、我々の友なるイエズス様はこの塵の世にお降りになります。何うぞ皆さん、胸は喜びに躍りつゝお待ち申しませう。心の門を大きく開いて、この大王を歡迎し奉ることに致さうではありませんか。

(二) 三つの御降來

待降節は、イエズス・キリストの御降誕をそれ相當に祝する爲の準備を、信者になさしめんとて定められたもので、確に祈禱と苦行の時であります。四旬節が御復活を迎ふべく、準備する爲の時期であるが如く、又、舊世界の四千年が救主を迎へる爲の準備期であつた如く、待降節も御降誕祭に備へる爲の時期なのであります。

この待降節中に聖會は、救主の三つの御降來を眼中に置いて居るのでありますから、それに就て一寸考へて見る必要があらうかと思はれます。

イエズス様が千九百幾十年の昔、人の肉を着け、人の虚弱を纒つてこの塵の世にお降りになりましたのが第一の御降來で、毎日〳〵聖寵を以て我々の心にお降りになりますのが第二の御降來、第三の御降來は世の終に當つて、すべての人を裁かん爲めに、光眩き御威光を輝かして、お降り遊ばすのを云ふのであります。第一の御降來は如何にも隱れた、謙遜さはまるものでした。第二の御降來は神秘的で、肉眼には觸れないが、然し溫い愛に充ちたものであります。第三の御降來は威勢赫々として惡人には非常に恐ろしく、善人には如何にも芽出度いものであります。

(1) **第一の御降來——神の御子は地の面を一新せんが爲にお生れ遊ばした——** 聖會は近々第一の御降來を記念せんとするのであります。神の御言が人となり、我々の中に住み給ふに至つたのは、人間の罪を償ひ、サタンの國を滅して、神の御國を再興し……且つは我々に敎へ、天の道を示さんが爲でした。實にこの第一の御降來は、地上に光と平和と救靈とを齎したのでございます。試に御降誕前の世界が如何に憫然きはまる狀態を呈したものであつたかを思ひなさい……その憫然きはまる世界も御降誕後には、眞個なアブラハムの子供が熱心に待ち焦れて居た御降誕後には、如何に大なる變化を來し、如何に深い〳〵みじめさのドン底から救ひ上げられたで御座いませうか。我々の運命を、キリスト信者たる我々の運命を、舊約時代にあつて最も豊かな天恩に浴せし人々の夫れに比べて御覽なさい。彼等が四千年の間、天に向ひ、雲に向ひ、地に向ひ、懇願して止まなかつたその救主は、「我等と共に在す

神」とおなり下さいました。太祖、豫言者等が、待ちに待つて待ち望んで居たその大なる幸福をば、我々は早や我有として居るのでございます。我々は夫れに就いて天主様の御攝理を熱く感謝してゐますか。天主様が我々に生命を與へ、現世に生れ出さしめるにつけて、その時期を救主の御降誕後にお定め下さいましたことを心から感謝して居ますでせうか。世にはこの測り知られぬ御惠を考へる人が幾何あるでございませうか。異教者の如きは、この御惠の何であるかと云ふことすら思はずして、この世を渡り其日〳〵を送つて居るではありませんか。彼等の爲に祈り、又及ぶ限り活動もして、彼等を改心に導き、折角主が齎し下さつた救世の御惠に與らしむべく務めるこそ我々信者の義務ではないでせうか。

(2) **第二の御降來——主は今日一人づゝの靈魂に神秘的にお生れ下さる**——神の御子は廿世紀前にその深い御憐の上より現世にお降りになり、我々人類をお見舞ひ下さつたけれども、若し夫れだけに止つて、その以後も絶えず我々一人づゝに來り、その貯藏へ置き給へる泉源より盛に聖寵を流し、以て我々に超自然的生命を與へ、之を養ひ、之を完成さして下さらないならば、折角の御見舞も全く徒勞に歸するのみでございませう。

斯うして主が始終我々を訪れ、聖寵を施して下さいますのは、實にすべての人の心を感動せしむるに餘りある程の一大玄義ではありませんでせうか。この慈愛限りまさぬ救主は、我々が御自分の御姿を、御父の意によく適ひ給へる御自分の御姿を我身に表現す樣にならなければ、決して御父に喜ばれるもので無いことを御存知あそばして、如何いたされましたか。自ら我々に來りて、我々を御自分の如くに一變させ、我々が早や我々自身の生命でなしに、御自分の生命を以て生き、「我は活くと雖も最早や我に非ず、キリストこそ我に於て活き給ふなれ」と言ひ得る樣、御父が我々を御覽になつた時「あゝ是れこそ我が意に適ふ我愛子である」と仰しやつて下さいます樣、お計らひになりました。斯くて人は原罪によつて墮落した以上に引擧げられ、全く超自然化され、神聖化されたのであります。人を神聖化する、是こそ聖會に委托された崇高な任務であつて、聖會は司祭の力を藉りて、夜も晝もその任務を遂行して止まないのであります。

待降節特有の聖寵とも謂ふべきは、この四週間内にイエズス樣が殊更ら頻繁に我々の心の戸を叩いて下さることであります。心の中に場所が見付つたら、這入つてこゝにお生れになる思召からさうして下さる、義人にはその靈的生命を長養し、罪人は死の蔭より之を引起して、聖寵の氣息を吹き返させたい思召から然うして下さる、「罪人の死を望まず、立歸つて活きるのを連りに望んで」然うして下さるのであります。

我々は幸ひキリスト信者であるが、たゞ自分一人その救ひの御惠を忝うした許りでは足りない。また主を助けてこの有難い御計畫を實現させ奉つらねばならぬ。主が靈魂に入らせ給ふべき道を備へませう。その徑を直しませう。傲慢の山を切り下げ、落膽、小心の谷を埋めませう。あらゆる障碍

物を取り去りませう。固より我々は弱い。然し天主様が我々と共に在して、その御力を添へ給うたら何一つ出來ないことはありません。先づ我々自身がそのありがたい御見舞を辱うすべく用意しませう……して我々に奮發心を振り起させ、之を持續させる爲には、希望ばかりか、更に恐怖までが手傳つてくれるのであります。

(3) **第三の御降來——神の御子が、世の終に總ての人を裁かん爲に來り給ふこと**——御降誕の間近になつても、多くの人がベトレヘム人の面白からぬ無關心に倣ひ、自分等の間にお生れ下さる救主を知らぬ顔で、お接け申さうともしないのを見て、聖會は痛嘆に堪へない。「その領民は彼を受けざりき……彼等に所あらざりき」と云ふ言が今も實現されるのを見ては泣き出したく思ふのであります。よつて我々を激勵し、出來るだけ救主をお接け申す氣になすが爲め、百方手を盡して止みません。その典禮中にも、嘆願の聲や、痛悔の叫びばかりを聞かして居ます。大使徒聖パウロの叫び、イザヤ豫言者の叫び、ヨルダン河畔に於ける洗者ヨハネの獅子吼、救主御自身の御叫びをも說敎師の聲に合せて響かせ、以て人々に惰眠を醒させようとして「眠より起くべき時は既に來れり」と呼はります。眞面目に罪を痛悔し、之を償はしめんとて「痛悔に適はしき實を結べ」と勸めます。終には惡にこびりついた心を引起すが爲、恐ろしい公審判の話をして斯う申します。「哀憐か正義か、罪を取除けて之を救ふが爲に來り給ふ溫和なる羔か、嚴しい罰を降すが爲に來り給ふ恐るべき獅子か、二つに一つを選びなさい。只今如何にも感心な愛らしい姿をして、馬槽の中にお生れ下さる救主をば、愛を以て受け奉るならば、後日生ける人と死せる人とを裁かん爲に來り給ふ時、何の恐れる所もありますまい。却つてその凱旋の光榮を共にすることも出來ませう。然し今その御見舞の時を知らず、之を利用することを怠つた人はホントウに可哀相です。自分の爲に馬屋に於て泣いて下さつた愛らしい御子をば、心の門を塞いで受け容れなかつた罰として〃山よ、我等の上に落ちよ、丘よ、我等を蔽うてよ〃と失望の叫びを擧げる時が參りますよ」と注意を促すのであります。

皆さんは是等の恐ろしい眞理を耳にするだけに止めて、我身に之を引當てないでは足りません。主の豐な御惠に浴して居る基督信者の爲に、公審判は特に大なる光榮を來すか、或は堪へ難い恥を與へるか、二つに一つであります。何うぞ皆さん、この待降節の始に當つて、聖會の思召に從ひ、己が靈魂の必要を顧み、次に他人の救靈をも計るべく適當な決心をお立てになります樣、私は偏にお願ひいたす次第であります。

(三) 眠より起くべき時は既に來れり（ロ一三ノ一一以下）

待降節の第一主日に聖會は聖パウロの言を借りて、我等に「眠を醒せ」、と警告します。

(1)—「**眠より起くべき時は既に來れり**」—— 人は眠つて居る間は死人も同樣で、自分は如何なる義務を

眠より起くべき時は既に來れり

負はされて居るか、如何なる危險に出遭して居るかと云ふことすら全く分りません、たゞもう面白い夢でも見て居るか、怖ろしいものにでも襲はれて居るかであります。心が眠つて了つた時もやはり夫れと同じで、我と我身の上がさつぱり分りません、自分の義務は如何、責任は如何、自分の靈魂は今どんな危難にさし掛つて居るか、後日如何なる運命に見舞はるべきであるか、そんなことは少しも氣にしない、平氣で地獄の口に寢返りを打つて居ると云ふやうな鹽梅でムいます。皆さんの中には眞逆そんな御方はムいますまいが、若しか一人でもそんなお方がムいましたら、何うぞ早く目を醒して下さい。「眠より起くべき時は既に來れり」、何時までも高鼾をかいて居て、地獄に落ちてから、やつと目を醒しては、もう餘りに遲過ぎまして、何を何うすることも出來るものではありますまい。

なぜ早く目を醒さねばなりませんか、「蓋し信仰せし時よりも我等の救靈は今や近きにあり」と聖パウロは申されました。即ち天主樣の敎を信じてから、洗禮を授つてから、心を改めてから、毎日〳〵救靈に近づいて居る、最後の到着點に向つて進んで居る、我々を裁き給ふ天主樣は直ぐ近くに待ち構へていらつしやる、我々の爲して居る善業、忍んで居る艱難苦勞、流して居る涙に對して十分の報酬を與へんものと俟ち構へていらつしやるのですから、何時までも眠つて居てはならぬ、早く眼を醒して ます〳〵善を勵み、いよ〳〵德を積んで、其時の爲に備へなければならぬのであります。イエズス樣は今こそ救主として御生れ遊ばすのですが、また世の終りには我々を裁かん爲に、大なる御威光を輝かしてお降りになるでムいませう。其時こそ善人は、一生の間に行つた善業の報を得て、終なき福樂に入るのですが、罪惡の中に眠り込んで、待降節になりましても、目を醒さうとはせず、折角の御降誕、その御降誕の御惠をも無駄にして、顧みないやうな惡人は如何な罰を蒙るべきでムいませうか。善人の爲には日に增し救靈が近づくのですが、惡人の爲には日に增し滅亡が近づくのであります。油斷をしてはなりません。

「夜は更けたり、日は近づけり」、イエズス樣の御降誕あそばす迄と云ふものは世界は全く夜でした。人は眞の神を知らず、眞の道を悟らず、それこそ眞暗黑の中に彷徨つて居たものであります。所でキリスト樣は眞理の源、正義の太陽に在して、この太陽が一たび東の山の端にさし昇りますと、夜が明けて美しい晝となつたのであります。

夜になると人は出て働くことが出來ませんので、皆眠つて了ひます。たゞ狐狸の如き害物、盜賊の如き惡漢だけが夜の暗を幸にして這ひ廻るのであります。然し一たび東の空が白み渡つて參りますと、狐狸は穴に引込み、盜賊は隱家に潛み、眠つて居たものは眼を醒まし、外に出て働くやうになります。靈魂上にもその通りで、心に罪惡の暗が立ち罩めると、人は何時の間にか深い熟睡に陷つて、自分の義務を怠り、救靈の大切なことも思はぬやうになつて了ふ。のみならず、そんな人の心には情慾だの、惡魔だの、世間だのが勝手に這ひ廻つて、恐ろしい害を加へるのであります。若し我々が今

日まで然うでもあつたこするならば、もう待降節になり、救主の御降誕も間近になりまして、東の空には、曙の光がそろ〳〵漂うて來たのですから、之を機會こして、早く眠を醒さねばなりません。早く情慾を壓伏へ、惡魔を追ひ退け、世間こ手を切つて、此等の害物を引込まして了はなければなりません。「されば我等は暗の業を棄て光の鎧を着るべし」、昔は鎧を着けて戰爭をして居ましたが、御存じの通り、此世は戰の場、我々信者は皆キリスト様の兵士でムいますから、信、望、愛や其他キリスト信者の行ふべき德を身に鎧ひまして、情慾に向ひ、惡魔に向ひ、世間に向つて始終戰はねばなりません。此等の敵が我々の心に割據つて居ましては、迚もキリスト様が入らして下さる譯には參らぬのですから、待降節には是非こも光の鎧を身に着けて、勇敢に奮ひ戰ひ、暗の業たる罪、その罪の原因たる惡魔、世間、情慾を叩き伏せて了はなければなりません。「日中の如く正しく歩むべくして饗食と醉酗、密通こ淫亂、爭鬪と嫉妬とに歩むべからず」、惡事を働らくものは光を避けて暗い所に潜り込みます。晝は人目もある、耻しい、然れども夜は誰も見て居ない、憚る所がないこ云ふもので、醉酗もすれば、饗食もする、邪淫も犯せば、爭鬪もやるのであります。我々も異敎の暗に閉されて居た頃は、天主様の聖寵に十分照らされない頃は、そんなこを行つて居たにせよ、今はもう聖寵の眩しい光を浴びて居る。早や我々には夜の暗はない、何時も晝ばかりです。何時も天主様が煌々たる光を輝かして居られるのですから、たとへ獨り居る時でも、暗い室内でも、遠い旅の空でも、天主様こ共に居る、人が見て居ないでも天主様が見ていらつしやる、我々の言を聽き、我々の行を見、我々の心の底までも見通して一々記憶に止めていらつしやる、一つでも見落したり、忘れたりし給ふやうなこはないのだこ思ひ、それだけ身を愼み、行ひを戒めねばなりません。

昔一人の淫奔な婦人がエフレム聖人を罪に誘ひました。聖人は聲を荒げて叱り飛ばしなさるかと思へば、然うでもない、「よし〳〵貴方の仰有る通りに致しませう。然し夫れは町の眞中で、一番人通りの多い所でするのですよ」こお答へになりました。流石の婦人も夫れには參りまして、「そんな人通りの多い所で、耻しくて爲れますか」と申しますから、聖人は茲ぞこ「貴方は人目が耻しいと云ふ位ならば、何うして天主様の御目が耻しくないのですか、天主様は何處にでも在して何んでも見ていらつしやるじやありませんか」こ云つて、その婦人の不心得を篤とお戒めになつた、こ云ふ話であります。

我々もその通りに天主様から見られて居る、聞かれて居る、識られて居るのですが、是迄は一向夫れを思はないで居たものでした。然し御降誕が間近になるに付けて、此道理を思ひ出し、人の見て居る居ないに拘らず、人の前に耻かしいと思ふやうなこは斷じてしない、殊に飲食に耽るとか、放蕩をやらかすとか、喧嘩口論をするこか、遺恨を含むとか、そんな耻しいこはきつぱりと止めて了ふと決心せねばなりません。「却つて主イエズス、キリストを着よ、且つ惡慾起るべき肉の慮りを爲すここと勿れ」、御降誕になると夜が明けるのである。汚らはしい暗の業はスツカリ止めて了ひ、却つてイエズ

眠より起くべき時は既に來れり

ス様を身に纏ひ、イエズス様の如く思ひ、イエズス様の如く言ひ、イエズス様の如く行ひ、ちやうどイエズス様を身に着て居るかの様、何處から見ても、イエズス様そつくりと云はれる様にならなければならぬ。さうなつてこそ始めて御降誕の準備が立派に出來る譯であります。

(四) 御托身

(1)—神の御子が御托身あそばすまでと云ふものは、人類は如何に憫然極まる狀態にあつたかを思ひなさい。極少數の信仰者を除けば、他は悉く人生の目的を忘れて居ました。惡魔は到る所に神と祭られ、傲慢や快樂や金錢や、そんな邪慾がすべての人の心を我物顏に占領し、神と云ふ觀念は日に增し人々の頭から消え失せるのでありました。「神を畏る、人は絕え、誠ある者は人の子の中より消失するなり」(詩一ノ二)とダウィドも嘆いて居ます。ユデア人ですら多くは神に遠ざかり、救の道を踏み外して、異邦人と大した違ひは無い位になつて居ました。洗者ヨハネが彼等を咎めて、「蝮の裔よ、來るべき怒を逃るゝことを誰か汝等に誨しぞ」(マチオ三ノ七)と曰ひ、キリスト様も「汝等は惡魔なる父より出で、敢て己が父の望を行ふ」(ヨハネ八ノ四四)と宣うたのを以て見ても知られるでございませう。一口に申しますると、天主様は殆ど何處にも認められず、愛されず、仕へられ給はず、日々地獄へ墮落する者は數へるに遑ない程でありました。

人間は斯んなに墮落し、腐敗し終つたのですのに、天主様は何うして之に情を掛け、之を救ひ上げようと思召し下さつたのでムいませうか。何と申しましても、至聖、至義に在して、「不信仰者も、その不信仰も神は憎み給ふ」(箴言一四ノ九)だの、「主の目は淸くして惡を見給はず、敢て不義を顧みること能はず」(ハバクク一ノ一三)だのと聖書にも記してある位ですから、もう全く人類より御眼を背向け、叛逆を謀つた天使も同樣に之を處分して、嚴しい罰を加へ、少しも容赦し給はぬが當然ではなかつたでせうか。

天主様は限りなく偉大に在すのですから、恩を恩ともしない、御憐みを蒙りながら、却つて無闇心である、却つて侮辱する、却つて反抗する、心は惡にしがみ着いて離れようともしない樣な忘恩者だと見給うては、之に情をお掛にならぬのが、その御光榮を計り給ふ所以ではなかつたでせうか。然しながら若し天主様が御自分の偉大さ、御自分の正義ばかりを思つて下さいましたら、人類は如何なりましたでせう。我々は今何處に居なければならなかつたでせう……天主様の御憐みの限りも涯しもないことを思ひ、我々を罪惡の中にお見捨て下さらなかつたことを篤く〳〵感謝しなければなりません。

(2)—御子が御托身あそばすに當つて、何を目的とし給ふのでありましたでせう。我々に天主様を認めさせ、愛させ、之に仕へさして、人生の目的を貫かしめ、因つて以て天主様の御光榮を揚げ奉ると云ふのが、御托身の目的ではなかつたでせうか。

（イ）―御子は人となつて我々に天主様を認めさして下さいました。實に御托身は天主様の御德を手に取る如く明白にしたものであります。神にして人たる御身を以てしなければ、相當に禮拜することを出來ないのを以て見ますと、天主様の偉大さが明かに讀まれるでございませう。人性と神性とを一致さして、御自分の御光榮を揚げ、人間の救靈を計るべき方法を御發明になつたその御智慧、是も感ずべきの至りではございませんか。その加へられ給うた侮辱は、天主様に由つてゞなければ償はれないと云ふことを思はゞ、その正義がはつきりと見えるでございませう。罪深い人間をそのまゝ、永遠に擯斥け給はないで、之を憐み、之をお救ひ下さいました御憐みも亦感ずるに餘りあるではございませんか。終にその愛の程を思ひなさい。たゞ我々に天地萬物をお與へ下さつたのみならず、己自らをも救主としてお與へ下さつたとは、實に何と云ふ驚くべき愛でございませうか。

（ロ）―御子は人となりて、我々に天主様を愛さして下さいました。被造物は人を天主様の方へ案内せねばならぬ筈なのに、却つて人の心を殘らず自分に奪ひ取つて、天主様から遠ざけて了ひました。で御子は自ら人の心を占領して、之を愛の支配に屬せしめんが爲め何をなさいましたか。人間は五官の奴隷となり、感覺に支配されるものですから、五官に觸れ易い肉體を着けて、現世にお顯はれになりました。人間が被造物の愛に曳かれるよと見て、御自分も一個の被造物となり、人間の一人となられました。いよ〳〵人間の心を奪ふが爲、自ら愛の敎を垂れ、御鑑をお示しになりました。大なる愛の掟を授けて、「汝心を盡し精神を盡し、靈を盡し、力を盡して主なる汝の神を愛せよ」（マテ三二ノ三七）と繰返し〳〵お命じになりました。御降誕から御死去に至るまで、その御一生涯を思ひなさい。我々を救はんが爲、その總ての思ひを、そのすべての愛情を、そのすべての事業を、その人性も神性も殘らず投出して下さいました事を思ひなさい。人間に對して愛の掟を十分にお守りになり、斯くして天主様を愛する氣になして下さつたのぢやありませんでしたか。

（ハ）―御子は人となりて、天主様に仕へ奉る道をお示し下さいました。掟は幾ら立派でも、夫ればかりでは如何に天主様に仕へ奉るべきかを悟らせるには足りません。よつて御子はたゞ言葉を盡して夫れを敎へ給うたのみならず、また自ら模範をお示しになりました。その御生涯と云ふものは、身を抛つて御父に奉仕されし活きた御鑑でした。もう聖母の御胎に御やどりになられた其時から、一身を御父に献げ「主よ、犧牲と献物とを否みて肉體を我に備へ給へり…我言へらく、看給へ、神よ、我は御旨を行はん爲に來れり」（ヘブレア書一〇ノ七）と、斯う曰うて、主は初から我身を献げ、專ら天主様の御旨を行ひ、我々にも御掟をすべて忠實に守り、心から之に仕へ奉らねばならぬとお諭し下さいました。身を以て犧牲となり、有ゆる苦痛をおし堪へ、十字架にまで磔けられて御死去あそばしたのも、幾ら辛からうと、苦しからうと、飽まで天主様に仕へて渝る所があつてはならぬと、實物敎示をして下さつたのであります。何力もイエズス様が御托身あそばすに付けて、抱いて居られました美しい御志の程を

注意深く打眺め、その感ずべき御志に則る爲の聖寵をお祈りなさらねばなりません。

（五）聖フランシスコ、ザベリオ（十二月三日）

(1)—天に輝ける無數の聖人の中にも、我々日本人が特に尊敬せねばならぬのは、聖フランシスコ、ザベリオでムいませう。聖人は千五百六年、西班牙の貴族に生れ、長じて佛國のパリー大學に學び、卒業の後、同大學の講師となられたのですが、固より學は深く、才智は百人に勝れて居られましたので、非常な評判となり、行く〳〵は名聲を世界に轟かし、高い地位にも在りつかんものと、只管それば かりを夢ておられました。然るに其頃、同じパリー大學に勉強中なりし聖イグナチオは、神の光榮を揚げ、人の救靈を謀るが爲め、一個の修道會を創設しようと思ひ立つて居られました。が窃に聖フランシスコの人ゝ爲りを見るに、學問ゝ云ひ、才智ゝ云ひ、その氣象の勇壯さと云ひ、少しの申分もないので、もしこの人が一身を抛つて主の爲に盡す氣になつたら、どんな偉い働きを爲し得るだらうかゝ思ひ、次第に之に近き、折を見て救靈の大切なることを說き、「人全世界を儲くゝも、若しその靈魂を失はゞ何の益かあらん」（マテオ一六ノ二六）ゝ云ふ主の御言葉を繰り返しなさるのでありました。フランシスコも初は左程でもありませんでしたが、幾度も〳〵その御言葉を聞くに隨ひ、次第にその眞意が分り、浮世の儚い特むに足りないことを悟り、殊に聖イグナチオの勸めに應じて、一ケ月間心靈修行をなさつてからと云ふものは、全く生れ變つて、別人の如くなり、もう浮世の名譽や快樂やを戀ひ慕ふことはさて措き、深く謙遜して、他人に使役はれるのを樂みとし、病院に入つて患者の寢床を整へたり、腫物を繃帶したり、時としては臭い臭い膿汁を流して居る患者を抱いて、その膿汁を吸ひ出してやつたりするまでに至られました。後印度傳道にお出掛けの節、鄕里のザベリオをお通りになりました。時に聖人は鄕里を出られてから早や十七年になつて居たのですけれども、我家に立ち寄つたら、親兄弟の愛に曳かれて、主に對する愛が薄らいではならぬゝ氣遣ひ、僅か二三十歩の道を抂げて、未だ御存命中の母親に暇乞をしようゝもなさいませんでした。

(2)—皆さん、聖フランシスコの改心の如何に完全であつたかを思ひなさい。我々は親兄弟を棄てねばならぬゝか、病院に入つて患者の附添をせねばならぬゝか云ふことがないにせよ、然し聖人の如く心を改める必要がありませんでせうか。浮世の財寶なり、快樂なり、名譽なりに魂を打込んで、天主樣を忘れて居ませんか。靈魂を等閑にして居ませんか。たとへ全世界を儲け得ゝも、靈魂を失はゞ何の益がありますでせう。今は待降節である。我々に救靈の道を敎へんとて、態々光眩き天の玉座より汚はしき馬屋にお降りになるイエズス樣をお迎へ申す準備をなすべき時であります。して救靈に最も障碍となるのは、浮世の財寶、身の快樂、空しい名譽で、そんなものに餘り心を奪はれてはならぬぞよゝ我々に諭さんが爲め、イエズス樣はあんな貧困の中に、あんな淺間しい態をして生れ、「たとへ全世

界を儲くこも靈魂を失はゞ何の益かあらん」こ云ふこをしみ〳〵悟らせようとして下さるのであります。でございますから何方も聖フランシスコに倣ひ、魂の救を第一に心掛ける樣、お務め下さらねばなりません。

(3)—次に聖フランシスコは幾度も〳〵、イエズス樣の御言葉を聽いて次第に悟を開き、改心なさいました。我々も之を鑑こせねばならぬ、「信仰は聞くより起る」(ローマ書一〇—一七)こ聖パウロも言はれて居ます。たこへ知つて〳〵知りぬいて居ることでも、人から聞くか、書で讀むかするこ、意外に感じる所があります「水落而穿石」こ云ふ諺もありませう。雨滴が石の上に落ちる、堅い石の上に落ちるのですから、初めは何のこもありませんが、幾度も〳〵落て居るこ、お終にはその堅い石も穿んで來る、穴を穿つに至るものであります。我々の心もそれと同じで、たとへ惡に固つて石の如くなり、容易に善の方へ向き直ることが出來なくなつて居るにせよ、幾度も〳〵善いことを聞いて居るこ、次第に堅い所は柔くなり、初めはどうしてそんなことが出來るものか、こ思つて居たこでも、難なく行へる樣になるものであります。隨つて說教を聽いたり、公教要理を學んだり、宗教書を讀んだりするのは、救靈に極めて必要である、「信仰は聞くより起る」、幸ひ皆さんはよくお聽きになる樣でムいますが、然し御自分でお聽きになるばかりでは足りません。子供さんにも、お父さん、お母さんにも、奥さんや御主人にも、聽きたくない方には强ひても勸めて、聽かして上げる樣に致しなさらねばなりません。

(4)—聖フランシスコは印度に渡られてから八年ばかりの間こ云ふものは、山を跋へ海を渉り、町であらうこ、田舍であらうこ、離島であらうと、些も厭はずに、夜こなく晝こなく布教に奔走されました。終には我國にも御教を傳へたいこ思ひ立たれ、支那の海賊船に便乘し、非常な危險を冒して、千五百四十九年八月十五日、聖母マリアの被昇天の祝日に、鹿兒島へ御上陸になりました。鹿兒島に一ケ年ばかり留られたけれども、餘り澤山の信者は出來ませんでした。それから平戸へお越しになり、僅か二十日ばかりの間に、鹿兒島で一ケ年かゝつた位の好成績を擧げられました。然し京都へ上つて天皇陛下より布教の許可を得たらば、餘程便宜だらうと思はれて、平戸から周防の山口を經て、京都へお上りになりました。今日の如く汽車や自動車や馬車の便があるではなし、戰爭ばかり續いて居た當時のことゝて、往來も自由でありません。固より案內者が居る譯ではなし、路銀もなしに、百里餘からの遠路を、而も外國人の身を以て旅行するこ云ふは、それこそ非常な困難であつたに相違ありません。

或時の如きは、山の中に迷ひ込んで路を失ひ、途方に暮れて居られると、幸ひ馬から京都へ往く武士に出逢ひなさいましたから、請うてその荷物を擔ぎ、徒步で、荊棘や石ころに足を傷け、血塗こなつても構はず、馬のあこを追つて走られました。斯うして千難萬苦を凌いで漸く京都へ辿り着かれましたが、時に京都は戰爭の巷こなり、皇室も衰微の極に達し、將軍こても有名無實こなつて居たの

で、全く何うすることも出來ません、已を得ず山口へ引返して、此に布教を試みられるこ、暫くの間に二千人以上の信者を得られました。それから豐後へ下り、大友宗麟の許に暫く足を止め、鹿兒島上陸後、二ヶ年と四ヶ月目に再び印度へお歸りになつたのであります。

(二)—印度へ歸り、要件も片付きましたから、今度は支那へ布教を試みたいと思ひ、葡萄牙船に乘りて、廣東を距る僅か六里、上川島と云ふ小島に入國の機を待つて居られる中、病を得て、その島の上で終に御永眠になられました。遺骸は早く腐らし、骨ばかりになして持ち歸らうと、ポルトガル人が二回までも生石灰の中に漬けましたけれども、少しも腐りませんで、唯今も印度のゴアに其儘安置されてあります。

時に聖人は御年僅に四十六才、布教に着手されてから十年餘り、其間に奔走された道程は、世界を三周するほどでありましたとか。實におどろくべき活動振ではございませんか。何うして斯る活動がそんな短日月の間に出來たのでせう。それは固より天主様の聖寵にもよることですが、然しまた聖人が深く天主様を愛し、人をも愛して居られた結果に由るのであります。聖人は天主様を深く愛して居られたから、自分が天主様を認め愛したばかりでは足りない、人にも認めさせ、愛させたいと努められました。人をも愛して居られたから、自分ばかりが救靈を得ても、それに滿足されない、是非人にも救靈を得させたいものこ、大に御奮發なさつたのであります。

皆さんもこれを鑑と致しなさい。よし聖人の如く布教に奔走することは出來ないにせよ、やはり天主様を心より愛し、又天主様の爲に人をもお愛しなさらねばならぬ。自分一人が天主様を認め、自分一人が救靈の道を歩いて居るからとて、夫れに滿足して居られません、聖フランシスコは一人でも天主様を愛する者があるこ見るや、それを何よりも喜ばれ、何人が天主様に背き罪を犯したものがあると聞くや、それを如何なる禍よりも悲まれたと云ふことである。皆さんも是非然うこそあつて欲しいものであります。自分が先づ立派に天主様の御誡を守り、罪を避け、善を行ふべく務めた上で、家族一同にも、天主様を愛させ、罪に遠からせ、それから次第に隣近所に及ぼし、自分の立派な手本を以て御教の有難味をしみ〴〵こ悟らせ、病人などある時は、何とかして洗禮の恵を蒙らしめる樣に力を盡さねばなりません。「異教人の感化を求むる祈」は、聖フランシスコがお作りになつたのですから之を誦へる時は、上の空でなく、注意深く、熱心に誦へなさい。なほ聖フランシスコは朝から晩まで布教の爲めに働き、夜になるこ長く長く聖體の御前に平伏して祈られるのでありました。皆さんも聖體を愛し尊ぶ樣になられましたら、天主様に對し、人に對する愛の火が自づと燃え立つて來るに相違ありません。

(6)—兎に角、聖フランシスコは、我日本の使徒、言語に盡し難い艱難辛苦の中に、御教の種子を蒔いて下さいました。隨つて今日こ雖も、我日本のことをお忘れにならない。我々日本人を熱く愛して

ねられる筈ですから、何方もこの聖人の御傳達によつて、天主様の聖寵を祈り、立派な信者となるべく務めると共に、未だ暗黑の中に彷徨つて居る異教者が、一日も早く眞理の光を仰ぐに至りますやう、祈りもし、努力もして下さらねばなりません。

（六）聖母無原罪の御やどり（十二月八日）

(1)—人祖が一たび天主様の御命令に背き、罪を犯して以來、子孫たるものは皆原罪に汚れて生れ出なければならぬことになりました。原罪に汚れて生れるとは、つまり聖寵を有たずに生れることなので、聖寵を有たなければ天主様の愛子でもなく、イエズス様の兄弟でもない。隨つて天國を相續する權利がない。天國に入るべき善業を一つも行ふことが出來ない、何が可哀相と云つても、是より可哀相なものがありますでせうか。よつて天主様はこの可哀相な人間の身の上に同情を寄せられ、躬ら人となつて現世に生れ、以て彼等を救ひ上げようと思召しになりました。然し人となつて生れるには母の胎内を借らなければならぬ。で初めから原罪の汚れに染まない上に、あらゆる聖寵に飾られたマリア様を御母と選み、其胎内におやどり遊したのであります。

アダムの子孫たる者は何人しも原罪に汚れて生れ出るのに、獨りマリア様だけがそれを免れなさつたのは何うした譯でせうか。それこそマリア様が御父の姫君、御子の御母、聖靈の淨配ともなるべき御方であらせられたからであります。親にせよ、子にせよ、夫にせよ、その娘なり、母なり、妻なりが、出來れば容姿は美しく、心情は高尚く、勝れて立派なのを望まない者はありますまい。今御父でも、御子でも、聖靈でも、全能全知の天主様で、望みさへすれば、どんなに清い娘でも、美しい母でも、汚れなき淨配でも得られるのに、之をわざ〳〵原罪に汚れた、醜い、惡魔の奴隷たらしめ給ふはずがありますでせうか。天主様は惡魔の上に罰を宣告して「彼女は他日汝の頭を踏み碎くべし」と仰せられました。所で若し聖母が原罪に汚れて母胎にやどされなさいましたら、それこそ惡魔に御頭を踏み碎かれなさつたので、天主様の御言葉は成就されない譯になりませう……斯の如く、聖書に訴へても、道理を推して考へて見ましても、マリア様は原罪の汚れに染み給ふべきでなかつたことが明かでございませう。

(2)—聖母は既に原罪の汚なくやどされなさいました。隨つて原罪の結果たる肉慾をも知り給はず、身は全く聖寵に固定され、惡に傾く心すらなく、惡いものを見よう、惡いことを云はう、惡いものに觸れよう、良からぬ快樂を味はうなんて、そんな傾きは藥にしたくても見當らない、何んな危い所へ行つても、汚される氣遣ひもなければ、何んな惡いものを眺めても、心に惡念の萌すべき憂はない。罪の機會を恐れるにも及ばねば、浮世の事物に曳かれる心配もない。況んや惡魔の筆に落ち込む氣遣ひなんか全くなかつたはずである。ですから聖母は少しも御用心なさることもいらねば、注意して罪の

機會に遠ざかりなさる必要もなかつた筈であります。夫れにも拘らず、聖母は非常に用心深く在した。驚くほど注意に注意を加へてゐられた。我々も同樣に、弱い身、惡に傾き易い心の持主でもあるかの如く、警戒を怠りなさらぬのでした。聖會がマリア樣を讃めて「最愼み深き童貞」と申上るのは斯う云ふ譯があるからであります。

(3)—考へて見ますと、我々はマリア樣とは違ひ、原罪の汚れに染つて生れ出た者であります。なるほど洗禮によつてその原罪は洗ひ落された、聖寵の美しい白衣も與へられましたが、然し原罪の結果まで取り去られて居る譯ではありません。やはり肉慾を背負つて居る、やはり惡に傾き易い、智慧は暗く、物事を辨へるには大變骨が折れる、動もすれば誤謬の方へ滑り落ちる、頭には馬鹿〳〵しい想像がよく浮んで來る。夏の靑蠅見た樣に、追へども〳〵復直ぐやつて來る。意志も善の方へは行かないで、惡の方へばかり走り出さうとする、耳や目や鼻や口やは心の命令を聽かないで、自分〳〵の慾をほしいまゝにしようとばかり働いて居る。洗禮の時に戴いた聖寵の寶は、斯うした、如何にも脆い、弱い身の中に携へて居るのであります。搗て加へて外からは、惡魔だの浮世だのが力を合せて、この貴重な寶を奪ひ取らうと狙らつて居る。夫れに持つて來て、我々は如何に用心して居ますでせう。罪の機會に近づかない樣、危いものを見ない樣、十分注意して居ますか。反對に自分には危いものがなく、氣遣ひすべきものもないかの如く、何でも讀み、何でも聽き、どんな人とでも交り、何んな危險な所へでも足を踏み入れる、と云ふやうな塩梅ではムいませんか。マリア樣は御托身の玄義を告げられ給うた時、ガブリエル大天使を見てすら驚きなさいました。然るに我々は如何でせう？天使どころか、惡魔の樣な男なり女なりに行き遭つた時、目を外らして見ない樣に、怪しい談話が聞える時、直ぐ耳を塞ぐ樣に務めて居ますでせうか。

(4)—天主樣が人に聖寵を施しなさいます時は、必ず何か目的とし給ふ所がある。聖母マリアを原罪に染ませずして、初めから數々の聖寵を之に施しなさつたのは、他日御自分の母になさうと云ふお考へがあつたからである。して聖母はたゞ用心の上にも用心をして、その與へられた聖寵を失はない樣に努められたのみならず、亦大に之を利殖されました……今日は昨日より、明日は今日より益々善に進み、德を積んで、自分では神の御母たるべく擇ばれて居るとは夢にも御存知なかつたでせうけれども、然し天主樣が自分に是程の聖寵を惠み給うたからは、必ず何かの目的を抱いて居られるに相違なと思ひ、その目的に釣合ふだけの人物にならうと努め給ふのでありました。

今我々にも天主樣は聖寵をお惠み下さいました。司祭となる樣に、修道者、修道女となる樣に、一家を治め、子女を敎育して行く樣に、深く學問を修め、博く物事を知ること、金滿家になるとか、貧困な家に生れるとか、何かの御考の上から夫々に身分職業をお與へ下さつたのである。靈魂上から云へば、洗禮のお惠みの外にも、各自が天主樣より戴いた聖寵は莫大なものであります。それには必

ず天主様の御目的があるはずですから、マリア様に倣つて、その聖寵を善く利用し、毎日〳〵善より善へ、德より德へと進んで、天主様の御目的に副ひ奉るだけの人物にならなければならぬ。然るに我々は果してその戴いた聖寵を善く利用して居ますでせうか。タレントの喩話によつて見ても明かなるが如く、多く與へられた者は多く請求される、我々は皆多く與へられて居る。洗禮の惠だけでも、原罪を消されたと云ふだけでも、實に大したお惠ぢやありませんか。夫に今日まで是等のお惠、是等の數知れぬ聖寵をばどんなに利殖して居ますでせうか。

今迄の怠慢を顧みて深く恥ぢ入り、謙つて天主様にお赦を請ひ、是からは聖母マリアの御鑑に則り、身も心も清淨に保ち、天主様に忝うした聖寵は、力に應じて之を利殖すべく務めると決心し、その爲に必要な御援助を、聖母の御傳達によつて祈りませう。

御降誕

（一）神の御子は人となり給へり

「我れ地上に火を放たんとて來れり」（ルカ一二ノ四九）

(1)—イエズス様は人々の心に愛の火を燃さんが爲、現世に降り、嬰兒となつてお生れになつたのであります。それまでと云ふものは何處に天主様を心から愛するものが居ましたでせう。僅か世界の片隅のユデアに於て識られ給ふばかり、其ユデアですら、天主様を心から愛するものは極少數でした。況して他の國々では、日を拜み、月を拜み、犬や猫や狐狸や木石や、拙らない、卑しい、汚らはしいものを神に祭り上げ、之を拜んで居ると云ふ塩梅でございました。然るに一たびイエズス様が御降誕になりますと、世の中の姿はがらりと一變しまして、到る處に眞の神を識り、之を拜み、之を愛する者が日を追つて多くなり、人の心は忽ち天主様の愛に燃え立つて參りました。僅か數十年經つか經たぬ間に、世の始より幾千年の間に愛され給うた以上に愛するに至りました。

歐米諸國では、御降誕の際に信者は各自分の家に馬屋を作つて、御降誕の有樣を偲ぶさうでありますが、必ずしも然うする必要はありません。むしろ我々の心にイエズス様が御降誕になり、御安息み下さいますやう準備を急ぎませう。さすれば、イエズス様の御降誕と共に、充分その愛の火に燃え立つことが出來、現世では至極安心して月日を送り、後、天國に於ては、窮りなき幸福を樂むことも出來るでムいませう。で、今席は先づ、神の御子が人となりて生れ給うたのは何の爲であるか、こ云ふことをお話し致す考へであります。

(2)—人祖アダムは罪を犯しました。天主様の御惠を數知れず戴いて居ながら、その御惠に背き、御誡を破り、禁斷の樹果を食べました。爲に樂園より逐ひ出され、自分を始め、子々孫々に至るまで、

神の御子は人となり給へり

現世に暫く生存へた後、永遠窮りなく樂しむべきであつた天國、その天國へ這入ることが出來なくなつてしまひました。

斯の如くして、生きては色々と艱難苦勞を嘗め、揚句の端は天國へも這入れないと云ふ哀れな身の上となつたのであります。然し天主樣は其儘にして人類を捨て置くに忍び給はず、何とかしてアダムを救ひ上げねばならぬと思召されました。御哀憐限りなき天主樣ですから、アダムにして救を蒙らないことあつては、その御哀憐が見はれないので、何うしても放つたらかして置かれません。然し一方からはまた正義限りなき御方で、罪あるアダムを罰しなくては正義の德が立たなくなる。そこで正義にも哀憐にも傷を付けないで、アダムを救ひ上げなければならないが、其爲には罪一つなきものが、罪ある人間に代つて、謝罪をするより外はムいません。

然るに地上を眺めても、罪一つないものと云ふは誰とて見當らない。人間は皆罪に汚れて居る。隨つて天主樣の正義を宥め得るものと云ふは人間の中に居よう筈がない。どうせ誰かゞ天から降つて人類を贖はねばならぬ。然し天使にせよ、大天使にせよ、ケルビン、セラフィンにせよ、皆造られたもの、有限物である以上、その献げる謝罪は皆限りある謝罪である、限りある謝罪を献げても、限りなき罪に當るには足りない。そこで天主の第二位が自分でその大事業を引受けよう、と云ひ出しなさいました。

被造物は、天使にせよ、大天使にせよ、到底充分の謝罪を献げることは出來ない。たとへ天主樣が彼等の献げる不十分な謝罪に滿足して、之をお受け取り下さるにしても、それでは人間がその有難さを悟らない。然うでせう。今日まで人間は幾れほどの恩惠を施されても、幾れほど澤山な福樂を約束されても、幾れほど恐ろしい罰を威嚇されても、それで天主樣を愛する氣になりませんでした。それと云ふのは、天主樣が如何ほど自分等を愛し給ふかと云ふことを、善く悟らない爲である。然し天主樣が御自ら人類救贖の大事業を引受け、下界に降つて人となり、彼等の罪に代つて御死去遊ばすやうなことになると、天主樣の正義にも十分の償ひが拂はれるし、人間も亦天主樣の測り知られぬ愛の程を悟ることが出來る譯になるので、さう決行しよう、と御子は云ひ出しなさつたのであります。

固よりさうする日になると、牛馬の住む汚い小屋に生れ、生れると間もなく、その救ひ上げようと云ふ人々から生命を取られるやうな目に遭つて、遠い外國へ逃げなければならぬ。故鄕へ歸つてからも、三十年と云ふ長い間、貧乏な職人の徒弟となり、極めて賤しく困難な生活をなし、いよ〳〵公に世の中へ出て、敎を說き擴めようとしても、弟子となつて心からその敎に耳を傾けるものは極めて少く、多くは之を輕んじ、欺瞞者だ、魔法遣ひだ、狂人だ、サマリア人だと嘲り、その揚句は捕へて十字架に磔け、ありとあらゆる輕侮凌辱を浴せて、殺すであらうことは飽まで承知しながら、なほこの大事業をお引受け下さつたのであります。

神の御子は人となり給へり

(3)—斯うして天主の御子がこの世に降り、人間を救ひ上げ下さることになりましたから、ガブリエル大天使はマリア様の許へ遣はされ、マリア様の方でも、天主の御母となることを御承諾になり、御子は終にその御胎にやどりて、人となり給うた。して聖パウロも曰つて居る如く、御やどりのその始より、主は深く〳〵謙遜して一身を御父に献げ、「主よ、犠牲と献物とを否みて肉體を我に備へ給へり……看給へ、我は御旨を行はん爲に來れり」(ヘブレア一〇ノ七)と宣うたのであります。

實に天主様が人となり下さいましたのは、我々人間の爲、この卑しい人間を贖はんが爲でした。故に聖會は、「我等人間の爲に、我等を救はんが爲に天より降りて人となり給へり」(信經)と曰つて居ます。而もそんなにして人を救ひ上げ、以て人に愛されたいと思召させ給うたのであります。

アレキサンデル大王はペルシア王ダリウスを打破つて、ペルシア人を懐けて其人氣を博するが爲め、ペルシア風の服裝をしたと云ふことであります。天主様も我々の心を懐けんが爲め、同じ様に致しなさいました。即ち我々同様の姿になり、我々のやうな肉を着て世に生れ出で、何處まで我々を愛して居るかと云ふことをお表はしになりました……天主様は無形であり、靈にて在すから、肉眼で見ることは出來ない、如何ほど愛すべく在すか、我々には善く悟れません。よつて目に見え、耳に聽き、手に觸れ、共に親しく言葉を交すことも出來る様な人間に生れて、御自分の愛を表はし、我々にも愛されたいものと思召しになつたのであります。

「窮りなき愛もて汝を愛せり」、實に天主様の人を愛し給ふ愛は窮りないのですが、然し是迄は充分に夫れが表はれて居ません。たゞ御子が人となつて馬屋に生れ、少しの藁の上に寢かされ給ふに至つて、其愛が始めて明白になりました。天主様は無より天地を造つて、其全能を表はし、見事に萬物を支配して、其全知を表はしなさいましたが、人と生れ給うて、始めてその御慈愛の限りも涯しもないことをお證しになつたのであります。されば御子が御托身なさらない間は、人は天主様の御慈愛のほどを充分に悟ること出來ないのでしたが、然し今や人と生れて、その感ずべく驚くべき愛をお證しになつたのですから、もう露ばかりも疑ひを挾むこと出來ないのであります。

抑も人は天主様を侮り輕んじて、之に突離れて了つたのでした。そして一旦突離れてからは、自分の力で天主様の方へ立戻ることが出來ない。よつて天主様は御自ら人間を探して、この世にお降りになりました。謂はゞ罪惡の大病に罹つて、自分からは醫師を頼みに行くことも出來なくなつたから、醫師の方から病人をお捜し下さつた様なものであります。

(4)—人間と云ふものは愛に引かれたがるものである。何人かゞ自分を愛してくれると分れば、心は愛情の綱にでも縛られたかの様、何うしても其人を愛せずに居られなくなります。況して天地萬物の御主にて在す神の御子が、自分の爲に人間こまでお成り下さつたかと思つては、何うして其の深い〳〵愛情に心を縛られずに居られませう。

神の御子は人となり給へり

昔聖フランシスコ會の修道士にフランシスコと云ふ熱心な司祭が居ました。幼きイエズス様がそれは〳〵綺麗な姿をして幾度もお顯れになりますけれども、自分の傍へお引留め申さうとすれば、直ぐ逃げ出して了ひなさるので、司祭はそれを甚く遺憾に思つて居ました。所で或日イエズス様は手に金の綱を持つてお顯はれになり、是れで司祭を縛り附けよう、又司祭にも縛り付けられて、互に離れまいと云ふ意をお示しになりました。よつて司祭は其綱を取つてイエズス様の兩足に廻し、自分の胸の邊にしつかり括り附けました。其時からと云ふものは、イエズス様を胸に抱いてゐる樣にばかり覺えた、と云ふことであります。イエズス様はこのフランシスコ司祭に對して爲し給うたことを、御托身の折には我々に對して致しなさいました。即ち御托身によつて、我々の捕虜となり、我々の心に繫ぎ留められると共に、又我々の心をも、愛の綱もて御自分に縛り付けようとして下さつたのであります。

「聖靈によつてやどり」といつて、御托身を聖靈の働きとするのは何うした譯でせうか。天主樣が外界に對して致しなさる御業は三位とも共同で致しなさるので、御父なり、御子なり、聖靈なりだけに當るといふ譯ではない。それにも拘らず御托身を聖靈の働きとなすのはどうした譯でせうか。外ではない、聖靈は御父と御子との愛に在すので、愛の御業はすべて聖靈の働きとするからであります。所で御子が世を救はんがために人となり給うたといふのは、愛の業の中にも特にすぐれて大なる愛の業ですから、之を聖靈に當てるのは尤もな次第でムいませう。實に天主樣が人とお生れになりました時ほど、その愛が著しく顯はれたことはなかつたのであります。

殊に驚くべきは、人が天主樣の前を逃げつ隱れつしてゐる時に、御子が人となつて之をお捜し下さつたことであります。御子は人となつて、この恩知らぬ人間の後を追ひ廻し、「人よ、なぜ逃げるのです。私が幾ほど其方を愛して居るかを見なさい。私はたゞ其方を捜し出すが爲にこそ世に降つたのです。逃げないで、私を愛しなさい。其方を斯くまで愛する私を愛しなさい。」と叫んで下さるのであります。

天主樣は人を愛し、之を御自分に擬へてお造りになりました。けれども其人を贖ふ時には、御自ら人の姿となり、我々同樣の人間とお成り下さいました。我々のやうにアダムの子となり、我々のやうに肉體を着け、我々の樣に苦しむことも死ぬことも出來る身の上となられました。天使の姿となることも叶ひ給うたでせうが、然うは致しなさらぬで、我々と同じくアダムより傳つた肉體をお纏ひになつたのであります。

(5)—天主樣が人となられたとは、實に〳〵何と云ふ驚くべき謙遜でせう。地上のすべての帝王、天に在す諸の天使、聖人、聖母マリア迄が一莖の草、一抹の土塊となられたと云ふよりは、未だ〳〵驚くべき謙遜ではありませんか。草にせよ、土塊にせよ、帝王でも、天使聖人でも、同じ被造物であるが、天主樣から被造物へと云ふ段になると、實に限りなき隔りが出て參ります。實際さうであつた

神の御子は人となり給へり

と、信德によつて敎へられないならば、全能全智の天主様が、この賤しい人間の爲に、かくまで身を謙り給うたこと、誰か信ずること出來ますでせうか。

今道を歩いて居る中に、不圖そこにのたくり廻つて居る一匹の芋虫を踏み殺した人があつたと致しなさい、可哀相に！と後ふりかへつて眺めて居ると、其處を通りかゝつた人があつて、「この芋虫を復活さしたいと思ひますならば、貴方が先づ芋虫となり、貴方の血を絞り、それで血の風呂を拵へ、この芋虫を入れなさい、さうすれば必ず復活しますよ」と云つたら、其人は何と返答しますでせう、「馬鹿〳〵しい、我身が芋虫となり、我命を捨てゝまで、この芋虫を復活さしてやる必要が何處にある？この芋虫が復活しようと復活しまいと、何の關りがあるだらう」と云ふに相違ありますまい。今芋虫の代りに自分に害ばかりして居る蝮でもあつたとするならば、救つてやつても、其恩を忘れ、却つて救つた其人に咬み附くと云ふ蝮でもあつたらば、況してそんな甚い目に遭つてまで、之を救ふ譯もなければ、之を救つたからとて何の益もないでございませう。それにも拘らず、もし其人が、この恩知らぬ蝮を然うして救ひ、之を復活さしたとするならば、人は何と申しますでせうか。もしその救はれた蝮に智慧、分別がありますならば、其救主に對して如何なる感謝を献げたいと思ひますでせうか。然るにイエズス様が我々に對して恰度然うして下さいました。それに持つて來て、我々は恩に報ゆるに仇を以てし、幾度となくこの恩愛極りなき救主を殺さうとしたのじやありませんか。

もしイエズス様が今でも死するを得給ふことするならば、大罪を犯す毎に、畏多くも之を十字架に釘けて殺し奉るのであります。我々の身を天主様に比べた日には、人間を一匹の芋虫や蝮に比べる位のものでせうか。もつと〳〵限りなく卑しいものではありませんか。我々が復活して天國へ昇らうと、罪惡に溺れたまゝ、地獄に終なく罰されようと、天主様が何の痛さ痒さを感じなさいますでせう。それにも拘らず、天主様は我々を愛して愛して、是非とも地獄の罰を遁して、天國の終なき福樂を得させたいと思召され、我々と等しい人間、我々の如く淺ましい人間となり、御血を殘らずしため盡して、我々をお救ひ上げ下さつたのであります。

(6)—斯様な譯ですから、聖トマス博士は御托身の玄義を「奇蹟中の一大奇蹟」と呼ばれました。是こそ實に我々の想像を遙に超越した一大奇蹟で、之には天主様も其愛の力を極度に表はし給うた譯であります。全能の神の貴きを持ちながら、我々を愛して人となり、造主が被造物となり、無上の御主が賤しい奴隷となられた、苦しむこと出來ない御方が、あらゆる苦しみを忍び、死んで了はれたと云ふのは、實に何と云ふ驚くべき愛の奇蹟でムいませうか。

愛するのは愛される爲に愛するのであります。天主様が我々を斯くまで愛し給うたのは、たゞ我々に愛されたいと云ふ思召からでした。されば何人にしても、天主様が自分を非常に愛して、自分のために態々人となり、あらゆる艱難苦勞を堪へ忍んで御死去あそばしたのだと思ひましたならば、自

分の方でも、何とかして聊かの愛なりとも天主様に證據立てるべく、努めねばならぬじやありませんでせうか。

天主様が我々と等しい肉を着け、辛い〳〵生活を營み、慘酷たらしい刑罰にかゝつて御死去になつたのを見ては、何人しも天主様を愛して、愛の火に燃えたゝざるを得ない筈でムいませう。實際御托身後には、多くの人の心に愛の火が熾に燃え上りました。年若い前途有望の身を以つて、高い家柄、古い門閥、時には帝王の貴い身を以つて、其富を顧みず、其位を振棄て、其快樂を抛つて野山に隱れ、修道者となり、貧しい、辛い不自由な生活をしてまで、主に其愛を表はさうと努めた方々は幾程あるでムいませうか。恐ろしい責苦の中に其命を果すのを何よりの幸福と喜ばれた殉教者等は幾程あるでムいませうか。自分の爲に人となり、死んで下さつた天主様に聊かなりとも、その僞りなき愛を表はしたいと思ひ、花も盛りの身を持ちながら、浮世の快樂にすつかり暇を告げて、身も心も潔く主に獻げた處女等も幾程あるでムいませうか。

然し一方から考へると、如何にも悲嘆の情に堪へないところがありませんか。すべての人がそんな心になつてくれると結構ですが、なか〳〵然うは參りません。多くは感謝する所か、かへつて恩に報ゆるに仇を以てして居る。天主様が人となつて私の爲に死んで下さつたよ、と云ふことすら思ひもしない位であります。

でも善く〳〵考へて御覽なさい。イエズス様と雖も、是以上に何を何うすると叶ひ給うたでせうか。御父を救はねばならぬと云つても、人間と生れて己が命を抛棄てる以上のことを爲し得給うたでせうか。これほどまで盡して戴きながら、未だイエズス様を愛しないと云ふならば、もう何とも致し方はないじやムいませんか。

(7)—然らば我々はこの待降節中にイエズス様の愛の限りも涯しもないことを想ひまして、大いにイエズス様を愛しませう。イエズス様を愛するならば、イエズス様のお嫌ひになることを爲てはならぬ。殊にこの待降節には一つの大罪でも犯さないやうに務めると共に、既に犯した罪は之を痛悔して赦を求め、併せてイエズス様のお望みになることは毎日少し宛でも行ふやう、イエズス様を愛する證據として、病人はその病を善く耐へるやう、悲しみに沈める人はその悲しみをよく堪へ忍ぶ樣、お喋をしたい人は、日に一口なりとも愼む、御酒を飲みたい人も、之を幾分でも差控へる、豫て懶け勝ちの人は、せつせと立働いて、その勞働の辛さをイエズス様に献げる、その他、熱心に祈る、平生よりも屢々聖體も拜領すると云ふ樣にして、少しなりともイエズス様を愛すると云ふ赤心を表はさなければなりません。

或る修道士が御降誕の夜、馬に乘りて深山の中を通過してゐると、オギャ〳〵と云ふ赤ン坊の啼き聲が聞えました。この夜中に何うしたのだらうと思ひ、聲を辿つて行つて見ると、生れたばかりの赤

神の御子は人となり給へり

ン坊が雪の中に棄てられて、寒さに慄へて泣いてゐるではありませんか。可哀想にと思ひ、馬から下りて赤ン坊の傍に立ち寄り、「マア可哀想に！誰がお前を雪の中に棄てたのかナ」、と獨言ちますと、不思議にも、その赤ン坊が口を利いて、「何うして泣かずに居られますか、誰からも彼からも見棄てられて、一人でも私を引受けてくれる人もなければ、可哀想にと思つてくれる人さへないのですもの」と曰つて、フツと消え失せました。其赤ン坊こそイエズス樣であつたのです。自分は人間の爲に馬屋にまで生れたのに、人間は一向自分を愛してくれない、思つてもくれない、寒さに凍えようと、啼きに啼いて居ようと、同情すら寄せてくれない、忘恩も亦甚しい、と云ふことをお諭し下さつたのぢやありませんでしたらうか。

（二）無限に大なるものが最と小き ものとなり給へり

「嬰兒我等の爲に生れたり、一人の兒我等に與へられたり」（イザヤ九ノ六）

(1)—「愛は愛を引く」とプラトンは曰ひました。磁石が鐵を引くが如く、愛は必ず愛を引くものである。愛されたいと思はゞ、先づ自ら愛せねばならぬ。人の心を確に自分の方へ引附けて、愛せずに居れなくなすには、先づ自ら其人を愛して、之に自分の愛情を表はすのが一番の捷徑であると云ふことは、洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、誰あつて否定することは出來ない眞理であります。然るにたゞイエズス樣に對してのみ夫れが行はれて居ない。人は誰にでも恩を受けては恩を報い、愛されては愛して返してゐるが、獨りイエズス樣に對してのみ除外例を設けてゐる。イエズス樣は人を愛して、之に已が僞りなき愛情を表はすがために、殆ごその限りなき御力、窮りなき御智を絞り盡し給うた程であるのに果して幾何の人がイエズス樣を愛して居ますか。啻に愛しないのみならず。愛したいと云ふ心にすらなり得ない、却つて之に背いて居る、却つて之を侮つて居る、却つて之を辱めてゐるのであります。

せめて我々なりとも、かう云ふ忘恩者の列に加はりたくないものである。イエズス樣は慈愛深く、親切な、愛すべき天主樣、測ることも、極めることも出來ないと云ふほど大きな天主樣にて在しながら、我々に愛されたいばかりに、小さな赤ン坊とさへなつて下さつたぢやありませんか。

(2)—天主樣が人を愛して人にお生れ下さつた、而も小さな赤ン坊にお生れ下さつたとは、何と云ふ驚くべき愛でムいませうか。それを悟るが爲には、先づ天主樣の偉大さ、その測り知られぬ偉大さを考へて見なければならぬ……然し人間にせよ、天使にせよ、天主樣の偉大さを悟ることが出來ますでせうか。天主樣が天よりも廣い、地上のすべての帝王よりも大きい、すべての天使聖人等よりも勝れさせ給ふと云ふのは、それこそ我々人間が、一本の草よりも、一匹の蚊よりも大きいと云ふのも同樣で、むしろ失禮に亘る言葉ではないでせうか。ごんなに大きなもの、長いもの、廣い、深いものでも、無限に大なるものが最と小きものとなり給へり

天主様の大きさに比べては、限りもなく小さい、有つても無きが如きものではありますまいか。

ダウイドは天主様の廣大なることを想つて見たが、こても測り知ること能はずと悟りまして、「主よ、誰か主に比ぶべき者あらん」(詩三四ノ一〇篇)と言ひ、「主は大にて在せば最も讃むべき哉、その大なることは限りなし」(詩一四四ノ三篇)と言つて居ます。天主様も亦ユデア人に仰せられました。「我は天にも地にも充つるにあらずや」(エレミヤ二三ノ二四)と。この廣大無邊の天主様に比べると、我々人間は何でせう。地上のすべての人、すべての帝王、天上のすべての聖人、すべての天使を一つに集めても、之を天主様の限りなき大きさに比べたら何でせう?それこそ一本の塵を全世界に比べたよりも、まだ〳〵限りなく小さいものではありませんでせうか。イザヤ豫言者が曰つて居る如く「天主様に比べては諸〻の民も壜の緣にかゝれる一雫の水……すべての島々は小さな埃の如く、諸國民もその御前には無きに等しい」(イザヤ四〇ノ一五)のであります。然るに是れほど大きな天主様が小さな赤ン坊となつてお生れになつた。夫れも誰の爲かと言へば、我々の爲である。我々を大ならしめんが爲め、自ら小さくなられた。我々の縛られて居る罪惡の綱を解かんが爲め、自ら布片に卷かれなさつた。我々を天に昇らせるが爲め、自ら地上にお降りになつたのであります。

斯くて無量無邊の天主様が嬰兒となられました。天地も容れ能はぬ御者が粗末な布片に包まれ、狹い、あらくれた馬槽の中に、少しの藁屑の上に寢かされなさいました。萬事を叶はせ給ふ天主様が、身動きすら出來ない程に弱々しくなられました。無限の智を備へさせ給ふ天主様が、物すら云へない赤ン坊となられました。天地を治め司り給ふ御身を持ち乍ら、人の腕に抱へられる身の上となられました。すべての人、すべての禽獸を養ひ給ふ御身にて在しながら、少しの乳を以て養はれ給はねばならぬ樣になり、悲しむもの、慰め、天國の喜悅にて在しながら、泣いて人の慰めを受けねばならぬやうな淺間しい人間となられたのであります。

(3)——人と成り給ふにしても、アダムの如く初めから強い健な大人となつてお降りになることも出來たのであります。それに何故小さな嬰兒にお生れなさつたかと云へば、人に愛されんが爲でした。御存じの通り、嬰兒と云ふものは可愛らしいものであります。その禍よかで、無邪氣な顏を一目見たものなら、何人だつて愛せずには居られません。況して神の御子で、「人の子等に優りて美しく在し給ふ」(詩四四ノ三篇)と豫言者より歌はれ給ふその幼な姿、それこそ如何に美しくも可愛らしく見えさせ給うたでムいませうか。されば天主様が「己を無きもの」(フイリツポ二ノ四)として現世にお降りになつたのは、人を救はんが爲め、又人に愛されんが爲である。その人となり、嬰兒と生れ、下へ〳〵と降り給うた丈け、その御憐みはます〳〵明かに、その御慈愛はいよ〳〵著しく顯はれて來たのである。その愛らしい御顏を一見したばかりで、何うしても愛せずに居られなくなつて來たのであります。

天主様の光眩き御威光を仰ぎ視ると、何人しも恐れ慄かざるを得ない。けれども斯う云ふ愛らし

無限に大なるものが最と小きものとなり給へり

い幼姿を眺めては、如何に荒くれた人でも、自づと心が和いで來る。岩の如く頑な心でも、彼の美しい御顔を見たばかりで、何時しか熔けて流れずに居られません。實際あの御顔には恐ろしいと云ふ所が一つでもありますか。たゞ美しい所ばかり、愛らしい所ばかりではありませんか。若しイエズス様の現世にお降りになつた目的が、人に恐れられる、敬はれると云ふに在つたならば、元氣の張りちぎれんばかりの頑強な躰に、王者の威光を輝かしてお出になつたに相違ありません。が實は然うではなく、たゞ我々の心を引き付けたい、我々に愛されたいと云ふのが目的でしたから、可愛い嬰兒となつてお生れになりました。誰でも遠慮なく近づかれる爲、極く貧困な賤しい嬰兒となり、冷い洞穴に生れ、藁の上に寢かされ、寒い風に吹き曝され、少しの布片に包まれて、わな〳〵慄ひ上つて居られるのであります。

あゝ實に何物がこの御子を、光輝ける天の玉座より、この汚い馬屋に天降らしたのでせう。我々に對し給ふ愛ではなかつたでせうか。誰が御父の懷より引き離して、この賤しい馬槽に伏さし申したのでせう。天の上に統御し給ふ王様を、誰がこの藁の上に伏さし申したのでせう。天使等の中に樂み給ふ御方を、誰が牛馬の仲間に入れ奉つたのでせう。愛ではありませんか。セラヒンを火の如く燃やし給ふ神にて在しながら、寒さに慄へて居られます。天地を支へ給ふ御身にて在しながら、人の腕に抱えられねば動かれない程になられました。生きとし生けるものを養ひ給ふ御身が、僅かの乳を以て養はれねばならぬ、天使聖人等の福榮を仰がれ給ふ御身が、よゝと泣いていらつしやるのです。誰がこゝに至らしめ奉つたのでせう。愛ではありませんか。我々に愛されたいと云ふ心が、斯くまで主を哀れな境遇に生れさせ奉つたのぢやありませんか。

されば皆さん、この愛すべき御子を誰が愛せずに居られませう。大なる天主様、限りなく讃められ給ふべき天主様が、限りなく愛され給ふべき天主様となられました。始めもなく終もなく在して、其大きさは極まりなしですから、限りなく讃められ、尊ばれ、敬はれ給ふべきでありますのに、今は斯う云ふ嬰兒となり、身動きもなし得ない、物も言ひ得ない、寒さに慄へ、泣きに泣いて、人に抱かれたい、懷に入れて温められたい、慰められたい、あやされたいとお求めになるのを見ては、何人が之を愛せずに居られませう、「小さな天主様、限りなく愛すべき天主様よ」、と何人が叫ばずに居られますでせうか。

(4)—「牛は牛連れ、馬は馬連れ」とよく云つたもので、幼兒は幼兒と遊びたがるものです。さればこの嬰兒の御氣に入りたいと思はゞ、自分も嬰兒とならねばなりません。嬰兒は腕に抱えられ、懷に入れられたがるものですから、我々も愛の胸を擴げて、御子を茲に抱き上げませう。イエズス様はどんなに我々をお愛し下さいましたか、我々を捜ねて、わざ〳〵天からお降りになつたのじやありませんか。その御泣き聲は我々を捜し給ふ御聲ではありませんか。「抱いて下さい、温めて下さい、愛の熱無限に大なるものが最と小きものとなり給へり

を以て温めて下さい」と願ひ給ふ御聲ではありませんか。

犬に魚の骨を投げ與へて御覽なさい。連りに尾を振つて感謝の意を表はしませんか。どれほど喜んで我々の命に從ひ、何處までも附いて來ますか。それに我々ばかり、何うして忘恩者となられますでせう。天主樣は御身を殘らずお與へ下さいました。我々を救はんが爲め、天からこの涙の谷にお降りになりました。我々に愛されんが爲、嬰兒こまでお成り下さつたじやありませんか。皆さん、愛しませう、大にイエズス樣を愛しませう。イエズス樣を愛して、イエズス樣を受け奉るだけの準備を急ぎませう。

昔ローマにカタリナと云ふ不品行な婦が居ました。ロザリオに關する聖ドミニコの說教を聽き自分も聖人よりロザリオを受けて之を爪繰りながら、從來の不品行は一向改めようともしません。さうして居る中にイエズス樣のお顯れを忝うしました。最初お顯はれになつた時は青年の姿でしたが、後では可愛らしい幼兒となり、しかも頭には茨の冠を戴き、肩には十字架を擔ひ、兩眼よりはら〳〵と涙を溢し、全身血塗れこなられて居ます。そしてカタリナに向ひ、「もう澤山よ、カタリナさん、罪を犯しては可けません。もう澤山よ。私を苦しめるのは止して下さい。御覽なさい、私は貴方の爲にどんな豪い目を見たのですか。實際私は貴方の爲に幼い時から苦しんで、死ぬまでも止みなしに苦しんだのですよ」と宣うた。カタリナはそれを見、それを聞いて、すつかり改心し、聖ドミニコの所へ馳せゆいて告白をなし、その御指導を乞ひ、財產は殘らず貧民に分配し、自分は獨り薄汚い小屋に引籠りて苦行をなし、聖人でも感嘆されるほど澤山の聖寵を主に蒙り、死ぬ時には聖母マリアの御訪問を受け、安らかに最後の目を瞑つたと云ふことであります。

我々も是までは幼きイエズス樣を心より愛せず、屢々罪を犯して、その御心を悲しませ、その御身を苦しめ奉つたにせよ、本年よりは全く心を改め、一心に主を愛し、その御誡を固く守り、罪とはふつつり手を切つて、新しい生活に入り、幼きイエズスの御心を慰め奉るべく務めようではございませんか。

（三）御降誕を前にして

御降誕が近づきました。聖母マリアと聖ヨゼフとは早やナザレトをお立ちになりました。來る某曜日頃にはベトレヘムへ御到着になるはずである。御到着になると、忽ち世の初めより待ちに待たれし救主はお生れ遊ばすのですから、我々は今から之を受け奉るべき準備を急がねばなりません。兒が初めて生れたと云ふ時、父母の喜びと云つたらありませんが、親戚朋友までが相集つて大に祝つてくれます。近きは態々金品を携へて喜びに來る、遠きは電報を打つやら書面を送るやらして祝意を表します。我々も救主の御降誕に際して心からなる喜悅を表せねばなりません。然らば喜びのしるしに何を献げたものでせうか。金銀を？でも主は天地萬物の君の貴きを以ておさぐろしき厩にお生れ遊ばす位

ですから、そんなものは決してお望みになりません。然らば錦繡や毛皮やを用意して、夫れに御体をくる巻いて上げませうか、でも主は怒々藁の上に臥かされ給ふ程ですから、迚もそんなものをお喜びになるはずがムいません。然らば讃美歌でも歌つてお祝ひ申しませうか。それも悪くはないが、然し我々が幾ら上手に歌つて見た所で、到底天使等の歌には及ぶべくもありますまい。然らば何うしませう、主に我々の心を献げて、これにお受け申すことに致しませう、さすれば馬槽の中よりは頗る居心地が良くて、寒い風にも吹き晒され給はず、さぞかし御満足に思召し給ふぢやありますまいか。

なるほど夫れは結構な思ひ付きですが、然し主に心を献げるこは何を意味するのでせう？たゞ御降誕の夜に厩の前に拜跪き、多少心を動かし、口に二三の祈禱を誦へるだけのことでせうか。夫れならばお易いことです。誰でも主の御前に拜跪いたら、木石でない限り、心を動かさぬものはありますまい。心が動いたら、祈禱は自づと口を突いて漏れ出るはずでせう。夫れだけでは主の御降誕をお祝ひ申すとは云はれません。主の方でもそれだけでは到底御満足に思召されますまい……そも〳〵我々の靈魂は天主様に建てられ、天主様の御光榮の爲に献げられた聖堂でせう。所でこの靈魂の上に注意深い眼をそゝぎ、隅から隅まで調べて見ると、屹つと其中に何かの偶像を見出すに相違ありません。でその偶像を引出して、叩き壞して、之が破片を集めてイエズス様の爲に小さき馬槽を拵へる、御降誕を迎へるのに是れほど適當な準備はあるまいかと思ひます。

然し偶像とは何でせう。我々信者の中に偶像を祭る者が居るでせうか。驚いては可けません。公然と偶像の前に掌を合せるやうな人は居ますまい、各自の心、その心の中央祭壇は全く天主様に献げて、たゞ天主様ばかりを祭つて居るに相違ありません。然し兩側の小さな祭壇は如何でせう、隅つこの淡暗い所には、天主様や聖人等の御像の代りに、偶像を飾り付けて居るやうなことがないでせうか。皆さんの思ひでも、望みでも、行爲でも總て天主様に獻げて居られるでせうか。愛情の乳香はたゞ天主様の尊前だけに獻げて居られませうか。祈禱を誦へる時も、心を散らしてボカンと何かを考へて居られる様ですが、それは天主様の事を思つて恍惚となられた結果でせうか。天主様以外の或人の名を小聲に誦へていらつしやる、窃に天主様以外の畫像に膝を屈めていらしやるのじやないでせうか。皆さんが絶えず眼を睜つて捜して居られるお顔は天主様のそれでせうかっ皆さんが始終お耳に入れたい入れたいと思ひなさるその聲は天主様のそれでせうか。皆さんが魂を打込んで了つて、何時も夫れに就て話し、何時もその事ばかりを思ひ、朝から晩まで忘れ得なさらない所のものは、天主様でもなく、天國でもないと云ふならば、夫れこそ偶像で無くて何でございませう？

打開けて申しますと、皆さんの爲に偶像は衣服を華美にし、身を飾りて人に譽められよう、立つて眺められようと云ふ虚榮心である。貴方はなか〳〵賢い御方です、富豪です、學者です、信心家です、と嚇し立てられたい傲慢心、僅かの事にもクワッとなり、額に青筋を立てる様な怒つぽい性質である。

何時も食べて、飲んで、飲み倒れるまで飲まなければ承知されないと云ふその饗食である。聖ヨハネの所謂、肉の慾、目の慾、生活の誇、すべて皆さんの罪の母となり、多くの過失を湧かす源ともなる惡い傾向、良からぬ癖、是れが即ち偶像であります。主をお迎へ申すには、先づ是等の偶像を取り壞はさなければなりません。主が皆さんに御要求になるのも、たゞ是れのみであります。

昔ならば主も汚はしい厩にお生れなさつたけれども、唯今では我々の心にお生れ下さいます。昔ならば、むさくろしい馬槽もお厭ひにならなかつたが、唯今では汚れた心にはお這入りにならない、偶像を祭つた心には何うしてもお這入り下さらぬ。心の門に立つて連りに之を叩き、「開けて下さい、這入らして下さい」とはお願ひになるが、然し偶像と一緒には何うしてもお止りにならぬのですから、何はさて措き、先づ心から偶像を取除ける、主のお嫌ひ遊ばすと思ふ罪、不足、缺點、良からぬ關係、罪の機會、そんなものを綺麗さつぱりと打壞して、取除けて、然る上に、之をお迎へ申すやうに致さなければなりません。

（四）御降誕を待つ

宗教無頓着に陷つた人が、その眠れる信仰の目を醒して「私も斯うして居てはならぬ」と云ふ氣になり、鈍りかけたキリスト信者の感も再び生々となつて來る日が年中には時としてある。吾主御降誕の祝日の如きは確にそれであります。實にこの喜ばしい記念日、清く美しい感が自然と湧き立ちかへるこの祝日には、自から人の心を引立たせる何物かゞ潜んで居る。平生冷淡に流れ、宗教上のつとめも何も忘れて居る人でも、急に思ひ出して聖堂に參詣する、告白をし、聖體を拜領すると云ふ樣な塩梅で、實にこの祝日ほど我々の心を搖り起し、信仰を溫めてくれるものは少いと謂はなければなりません。

「十二月二十四日の夜、皆さんが思ひ〳〵に火鉢を圍んで四方山の話をしていらつしやる其際、突然喟を破つてゴン〳〵と勇ましく鐘の音が響いて來る。それこそ夜半のミサを告げる聲なのです。それこそベトレヘムの牧者等の前に遣はされて、救主の御降誕を告げた天使の聲を代表するのです。今日救主は御降誕あそばされた、早く聖堂へいらつしやい、その尊前に拜伏しなさい、全能全智の神にて在しながら、皆さんを救はんが爲め、憐れな嬰兒にお生れ下さつた救主を禮拜し、その御恩を感謝しなさい」と勸めてくれるのであります。」

皆さんは屹つとその勸めにお從ひ下さるものと私は信じて疑ひません。イエズス樣は特別の聖寵を、有益な感を、人の心を一變させるに足るだけの有り難い寶を御手に溢して、皆さんが御前に平伏しなさるのを待つていらつしやるのですが、然しその御惠を戴くには相當の準備が必要でございます。どうぞ唯今からその準備にお取掛り下さい、では何如なる準備を致しませうか。

御降誕を前にして

イエズス様が公生活をお始めになる少し前、洗者ヨハネは天主様に遣はされて、救主の御光來を人々に告げ、之を受け奉る準備を致させました。そのヨハネは何んな事を申しましか、「救主の來り給ふ日は近づいた、もう其所にお見えになつて居る。皆さんはその道を備へ、其徑を直くしなさい。罪を痛悔し、心を改めなさい」としきりに勸めました。すると人々はヨハネの勸めに應じ、罪を悔い悛め、其痛悔のしるしに洗禮を受けて、救主を待ち受ける準備を致しました。

今日でも其當時と同じく、イエズス様をお待ち申すには、先づ罪を痛悔告白しなければならぬ。殊に唯今ではイエズス様も昔の如く馬屋に生れないで、聖体を以て我々の心にお生れ下さいます。我々の心の門を叩いて御宿をお求めになるのですから、聖ヨハネの勸めに從ひ、先づ道を拵へねばなりません。是まで天主様にお仕へ申すのを怠り、その命じ給ふ所を破り、その禁じ給ふ所を爲すと云ふ樣にして、ために主の路は塞り、凸凹が出來、流石の主もお歩きが出來がたくなつて居なさいませんでせうか。で先づ〳〵罪を立派に告白して、是等の障碍物を悉く取つて除けねばなりません。

實に此祝日は皆さんが良心の平和、胸中の喜悅を回復しなさる好機會であります。此機會を無にせずして、是非ともイエズス様をお受け申すだけの準備を致しなさい。何處の敎會でも、平生聖堂にさへ寄り附かない人までが告白して聖体を拜領するのですから、皆さんの中には一人として之を怠りなさる樣なお方はあるまいと思つては居ますが、念の爲め繰り返してお願ひ致して置く次第であります。

なるほど喜んで告白場にお出で下さる御方が幸に多數ありますが、然し中には懶惰に向つて、不熱心に向つて、或は惡魔に向つて戰はなければ、告白場へ出られない御方もないではありますまい。何うぞそんな御方は、思ひ切つて、一たびウンと勇氣をお出し下さい。さすれば後は何んでもない。やすく〳〵と濟されます。面倒だ、厭だと思へば思ふほど面倒になる、厭になるものです。思ひ切つて下さい、唯だ一思ひに「告白するよ」と云ふ氣になつて下さい。

お父さん、お母さんは子供さんに、奥さんは御主人に、兄さんや姉さんは弟さんや妹さんに勸めて勸めて、やかましく勸めて告白場に送り出し、そして一同聖體拜領臺に跪くことに致して下さい。是は私の勸めではない、實にイエズス様のお勸めです。イエズス様は皆さんに聖寵を施したい、救靈に要する聖寵を豐に施したいと連りに望んで、その聖寵を施す爲の準備として、罪を告白せよ、心を清めよ、とお勸め下さるのであります。その有難いお志を思つても默つて居られますでせうか、飛び立つて告白場へ駈けつけずに居られますでせうか。

（五）御降誕の前日

(1)—明日はめでたい御降誕の祝日で、我等の主イエズス、キリスト樣は千九百有餘年の昔、ユデア國ベトレヘムに於て御降誕あそばしたのであります。抑もミケア豫言者は何百年前から救主がベトレ

ヘムに生れ給ふべきことを豫言して居たのですが、當時マリア様でも、ヨゼフ様でも、遙か北の方、ナザレトに住んで居られましたから、御子を生み上げ奉るがため、態々ベトレヘムまでお越しになる理由もなかつたのであります。然るに天主様の御攝理は感ずべきの至りで、恰度其頃ローマ皇帝アウグスツクは、領民の戸籍調べを命じました。ユデアはローマの屬國になつて居ましたから、帝の命令通りに戸籍の調べを受けなければならぬ。そしてユデアでは戸籍の原簿が祖先の出身地に保存してありましたので、戸籍の調べには、是非とも其出身地へ歸らなければならぬ。マリア様とヨゼフ様はダウイド王の子孫で、ダウイドはベトレヘムの人でしたから、今度の命令によつて、ベトレヘムへお歸りになることゝなつたのであります。

さて愈ベトレヘムに御到着になり、戸籍の調べも無事に濟みましたから、今から宿に就て、ゆつくり旅の疲れを休めようと思はれたでムいませうけれども、其時は戸籍の調を受ける爲め、四方から澤山の人が入り込んで居まして、空室と云ふが一つもない。無論金でも潤澤にあれば、何とかして室をあけてくれるのでせうけれども、マリア様、ヨゼフ様の貧乏な身裝を見ては、何人とて相手にするものがない。何處へ往つても「空室がムいません、御氣の毒様」と謝絶つて了ひますので、マリア様も、ヨゼフ様も、それには隨分お困りになつたらうかと思はれてなりません。

(2)—「己が方に來りしかど、其族之を承けざりき」(ヨハネ一一)と聖ヨハネ福音書には錄してありますが、實にベトレヘムの人等は、マリア様とヨゼフ様が如何なる御方なるかを知らう筈もありませず、たゞ貧乏な旅人だと思つて、之に一夜の宿も借さなかつたのであります。

精神界に於ても、そんな人は多いものであります。胸には浮世の寶をドツサリ取り込んで置き、色々の拙らぬ物に心を一杯充塞がれて居るので、イエズス様を入れ奉る場所が全く無いのです。さうでせう。大概の人は、金錢を愛して、朝も晩も、寢ては夢み、起きては思ひ、暫くも忘れ得ないのですが、さてイエズス様の聖寵になると、格別何とも思ひません。人によつては、傲慢を、邪淫を、遺恨を大事なお客さんとして心に迎へ入れ、爲に御降誕の大祝日が參りましても、その大事なお客さんに暇を出し得ないで、「空室がムいません、お氣の毒様！」と云つて、イエズス様に門前拂ひを喰はせるのであります。而かもベトレヘムの人等は、マリア様の御胎に在すのが神の御子である、世の救主であるこは夢にも知らなかつたのですから、多少恕すべき所もありますが、我々カトリック信者たるものは、イエズス様の誰なるかをよく存じて居ながら、おことはりするのですから、罪は決して輕いこは思はれません。皆さんの中には、眞逆そんな御方はあるまいと思ひますが、萬一そんな御方がありますならば、何うぞ今の中に、立派な告白をし、我心を空虛になし、イエズス様をお迎へ申すことに致して下さい。

(3)—「之を承けし人々には各神の子となるべき權能を授けたり」(仝)マリア様とヨゼフ様は何の家を

叩いても謝絶られ、仕方なく〳〵もベトレヘムの町を出られますと、幸ひ牛や馬や羊などを繋ぎ置く爲の洞穴が見付かりましたから、其處に入つて一夜を明すことにされました。ちやうど其夜、其洞穴に於て、幾千年の昔から俟ちに俟たれし救主は御降誕遊ばされたのであります。

ベトレヘムの町人に謝絶られて、洞穴にお生れになつたイエズス様は、今も世の人々に受付けられ給はず、拙ない我々の心にお這入り下さるのであります。イエズス様に這入つて戴く、心をその搖籃にして戴くとは何と云ふ幸福でムいませう。聖ヨハネは「己が方に來りしかど、其族之を承けざりき」と云つた上で、「之を承けし人々には各神の子となるべき權能を授けたり」と錄して居られます。抑もイエズス様を承け奉る人とは、何んな人でせう？。イエズス様を承け奉る人とは、謹んで御教を聽き、善く御誡命を守る、聖寵を保つて失はないやうに努める、清い心を以て主の聖體を拜領し、屢〻イエズス様と一致すべく務める人、一口に云へば、自分の心に、惡魔だの、浮世の寶だの、身の樂だのを宿さないで、イエズス様の爲に立派な居間を備へ、之を歡迎し、之と離れない人を云ふのでありまして、そんな人の心には、イエズス様も喜んでお這入り下さるのであります。

(4)—一體我々は天主様に造られたもので、天主様の臣僕たるに過ぎない。其上罪を犯して天主様の敵となり、惡魔の奴隷とまで成り下つたのですから、實は天主様の臣僕として戴くにさへ堪へないのであります。それにも拘らず、イエズス様を承け奉るならば、天主様の養子、イエズス様の兄弟ごなり、共に天國の極りなき福樂を相續する權能までも與へられるのであります。

然らば皆さん、たとへ今迄はイエズス様に御宿をお貸し申さなかつたにせよ、今度こそ云ふ今度は痛悔の鞭を振つて、惡魔でも、浮世の寶でも、身の樂でも殘らず逐出して、其跡にイエズス様を承け奉る用意を致しませう。未だ今日一日あります。告白をして居ない御方は是非今日の中に告白をして、今夜なり、明朝なり、立派にイエズス様を承け奉り、いよ〳〵天主様の養子、イエズス様の兄弟として戴く樣、務めようではありませんか。

要するにベトレヘムの人がイエズス様を承けなかつた如く、今でもイエズス様を承け奉らぬ人は多いものですから、切めて我々なりとも、心の門を推開いて、イエズス様をお迎へ申上げませう。さすればイエズス様の方でも我々を天主様の養子、御自分の兄弟、天國の世嗣として下さる。我々の身に取つて是よりも有難い、是よりも幸福なことがありますでせうか。どうぞ皆さん、この御降誕を機として、是非とも右の幸福に與ることが出來ますやう、お心掛け下さい、偏にお願ひ申し上げます。

(六)　主を承け奉る人の少きこと

(1)—イエズス様がなぜ馬屋に御降誕になつたか、その理由はどなたも御存知の所でムいませう。聖母と聖ヨゼフがベトレヘムへ行き、宿をお求めになりましたけれども、ベトレヘムの人等は「空室が

主を承け奉る人の少きこと

ない」と云つて、宿を貸してくれなかつた。イエズス様は終に町外の洞穴にお生れになりました。天使の告を蒙つて、牧者等は御前に駈けつけ、平伏して拜み、歸つて其事を人々にも告げました。けれども夫れを聞いて拜みに行つた人があつた樣には見えません。其後イエズス樣が御敎を說いて廻られた時も、それを信じて弟子となつたものは、多く貧困者ばかりで、金滿家や、學者や、位ある人は格別從はないのでした。從はないのみならず、寧ろ大敵となり十字架にかけて殺しました。ユデア人のみならず、他國の人々も同じくさうで、始からオイソレと御敎を信じた國は何處にもありません。我國の如きも開國以來はや六十餘年、それに信者の數はと申しますと、まだ十萬にも達して居ない、誠に以て嘆かはしい次第ではムいませんか。

「己が領分に來りしに其領民は彼を接けざりき」、全世界はイエズス樣の領分である。全世界の民はイエズス樣の領民であるから、擧つてイエズス樣を王と戴き、之に從はねばならぬ、殊に信者たるものは、その領民中にも特別寵愛された領民、唯の臣僕ではない、子供として可愛がられて居ながら、やはりイエズス樣を接けない、やはりイエズス樣を容れ奉らないと云ふは、實に情ない次第ではムいませんか。

(2)—是は抑も如何なる理由に基くのであるかと云ふに、ベトレヘム人は、もうお客が一杯詰つて空室がない、と云つて謝絶つたのでした。今日でも同じくさうで、自分の心のお座敷にはお客をちやんと坐らして居るのです。傲慢や、快樂や、金錢の慾や、其等を心のお座敷に坐らして居るのですからイエズス樣のお這入りになる處があらうはずはムいません。

試みに隣近所の異敎者に向ひ、「なぜあなたはカトリックにならないのです？…カトリックの敎に何の惡い所があるのですか」と尋ねて御覽なさい、「そりや惡い所は一つもありません、實に立派な敎ですが、あんまり嚴格ですからな。カトリックになれば身の滿快が許されません。正直に穩和しく世を渡り、仇敵にまで赦さねばなりません。それがどうして私の如きものに出來ますか」と答へるでムいませう。彼等は實に財寶の慾、肉の樂、世の譽、そんなお客に心を占領されて居ますから、イエズス樣のお這入りになる場所が殘らないのであります。

異敎者ばかりではない、信者の中にも、そんな人は多いものである。イエズス樣はその人等の心を叩いて「開けて下さい、這入らして下さい」とお賴みになる。「何人ですか」と尋ねます。「私はイエズスです、貴方の爲に馬屋に生れ、十字架の上に死んだ救主ですよ」、「御用は何でございます？」、「私は貴方がもつと穩和しくなり、謙遜になり、貴方の心より、傲慢や、怒や、憎みや、復讐の念を遠けるやうに勸めたいと思つて、參つたのです」。「それならば歸つて戴きませう。茲には場所がムいません」

其隣に往つてお叩きになります。「何方ですか、何の御用ですか」、「私は貴方が世の儚い財の慾に絡

まれないやう、今少しは窮乏者を憐み助けるやう、他に損害をかけないやうに敎へたいと思つて參つたのです」、「あちらへ行つて下さい。こゝには場所がムいません」。イエズス樣はなほも懲りずまに其隣にいつてトン〳〵お叩きになります、「何の御用です？」、「私は貴方にもつと痛悔を勸めたい、身を懲し、苦をよく忍び、あの汚らはしい快樂と手を切り、あの耻かしい遊びをお止めになるやう、あの良からぬ關係を斷つて了ひなさるやうに、お勸め致したいのです」、「何でムいます？そんな六ケ敷い話が聞かれますか。我々が現世に居るのは愉快をする爲、遊び樂む爲ではありませんか。今日あつて明日は分りもせぬ儚い生命を有つて居ながら、そんなにくよ〳〵言つて居ては、生き甲斐もありますか。行つて下さい、そんな話は聽きたかありませんよ。」

こんな樣にイエズス樣は何人の門をお叩きになつても「さあ、ごうぞお這入り下さい」と、心の門を押開いて、歡び迎へてくれる人は極めて少い。一旦は罪を告白し、聖體までも拜領して、立派にイエズス樣を迎へ入れながら、間もなく以前の罪を招いて、御主を逐ひ出し奉る人、傲慢や、邪淫や、お酒や、不義の金錢やを引込んできて、「さあ出て行つて貰ひませう」と、イエズス樣に迫る樣な人さへ其數を知らぬのであります。

誰しも胸に手を當て考へて見ますと、幾度そんな不埒を働いた經驗がありますでせうか。それにも懲りないで、イエズス樣は今尙叩いて下さいます。說敎の時に、告白の際に、ミサ聖祭の折りに、親兄弟を以て、司祭の口を以て、他人の善き鑑を以て、朋友の身に落ちかゝつた災難を以て、或は聖書を讀んで居る間に、祈禱をして居る中に、幾度我々の心の戸をトン〳〵叩いて下さいますでせう。「自分は外に立つて居る、內へ這入りたい、早く開けて下さい」と泣くが如く、訴へるが如く、折入つて賴むが如く、その切ない御意を打開け給ふのであります。何時までも主を外に立たせ申しては、餘りにも勿體ない、せめて今からでも潔く罪を逐つ拂つて、主を迎へ入れ、一心に尊び愛し奉らねばならぬじやありませんか。

（七）御降誕（其一）

イザヤ豫言者が「一人の嬰兒我等の爲に生れたり」（イザヤ九―六）ミ、七百年も前から豫言して置きましたその嬰兒の御降誕を、今夜我々は記念するのであります。さて、

(1)―その嬰兒こは何んな御方でムいますか？御存じの通り、それこそ神の御子、天地萬物の君、天も地も無より造り出し給うた全能の天主樣、萬物を治め、「司り給ふ全智の天主樣、世の始より俟ちに俟たれし救主、限りなき力、限りなき智慧、限りなき富、限りなき福樂を備へさせ給ふ天主樣であります。

(2)―何處にお生れになりましたか？そんな御方ですと定めし世界の大都にお生れ遊ばしたでムいま

せう？…いえ、ユデアと云ふ格別世にも知られぬ小さな國、その國の都でもない、片田舎はベトレヘムの町外れにお生れになりました。そんな御方ですと、せめては王様の御殿に生れて、金銀の搖籃にでも臥され、全世界の人民は擧つて喜び躍り、均しく聲を揃へて、その御降誕を御祝ひ申し上げたでムいませう……なか〳〵、王様の御殿どころか、汚い馬屋にお生れになりました。金銀の搖籃はおろか、乞食よりも淺ましく、馬槽の藁の上に臥かされ給ふのであります。御降誕になつたことを知るものさへないい。知つたものは僅に牛と馬と、賤しい五六人の牧者だけでした。天上の天使より外にはお祝ひ申すものもありません。ベトレヘム人の如きは、空室がないと云つて、宿さへ貸さなかつた位であります。

(3)—どんな裝をしてお生れになりましたでせう？天地の神、萬民の御主にて在すと云ふのだから、必ずや眩しい程の威勢を示し、赫々たる威光を輝かしてお生れになつたんでせう……なか〳〵以てそんな所の話じやありません。賤しい人間に、貧しいマリア様の子供にお生れになりました。責めてはアダムが始めて造られた時の如く、力の強い、元氣旺盛な大人にでもお生れになつて可ささうに思はれますが、さうも致しなさらぬで、ほんの赤坊にお生れになりました。天地も容れ能はぬ無量無邊の神にて在しながら、小さな馬槽の中に、藁を褥としてお出になります。何一つ思ひのまゝにならざるなしと云ふ全能者にて在しながら、布片に包まれ、身動きさへ出來ないで、自由に人手に扱はれ、抱けば、ジッとして抱かれ、臥かすれば、ジッとして臥ていらつしやいます。生きとし生けるものを養ひ給ふ御方が僅かの乳を以て養はれ、鳥獸にさへ毛や羽の暖き衣物を纏はせ給ふ御者が、冷い風に吹き曝され、暖い一枚の產衣さへ有たないで、寒さに顫ひ上つて居られます。遂に憂ひ悲みに沈める人を慰め給ふ神様、天國に於ては天使聖人等を限りなく喜ばせ、樂ませ給ふ神様でありながら、泣きに泣いて、人に慰めを求めねばならぬ哀れな身の上にお生れ遊ばしたのであります。

(4)—誰の爲めにさう云ふ淺間しい身の上となられましたか？…御父の爲でしたか。或は御自分に何かの利益を求める爲でしたか、否、決してそんなことはありません。御父でも御自分でも、限りなき福、窮りなき樂に溢れさせ給ふ天主様、其上に福を增し、樂を加へる必要は少しもない。その福や、樂は增すことも出來ねば、減すことも出來ないのであります。然らば誰の爲ですか、天使の爲ですか。否、天使にはそんな必要がありません。たゞ我々人間の爲、罪深い我々人間の爲、私の爲、あなたの爲、此人や彼人の爲でムいました。

(5)—何の爲めにそんな淺ましい姿になられました？…外ではない、たゞ我々を福ならしめる爲でした。即ち我々を天に登すが爲め、御自分は悪々天からお降りになりました。我々に罪の赦を蒙らしめんが爲め、御自分は罪人の姿となつて、我々の罪を殘らずお引受け下さいました。我々が惡魔の奴隷となり、罪の綱に縛られて居たのを解いて下さる思召から、御自分は奴隷見たやうになつて、布片に包まれ、身動きさへ自由ならぬ有様となられました。我々に天の限りなき幸福を與へたいばかりに、御

自分は冬の眞夜中に、馬屋に生れて、寒い風に吹き晒され、その柔かい御躰を硬い藁の上に臥されて、云ふに云はれぬ難儀を嘗めさせ給ふのであります。

(6)—思つて是に至れば、我々は如何なる感情を發すべきでムいませうか。もし茲に大國の王樣があつて、一人の乞食を殊の外寵愛し、之を懷けるが爲め、自ら乞食となり、身には乞食の襤褸を纏ひ、口には乞食の食べる不味いものを食べ、乞食の使ふ賤しい言葉を使ふのも厭はないまでに至られたのを見ましたら、皆さんは如何に仰天なさいますでせう。所でイエズス樣がちやうど然うして下さいました。全能の神、天地萬物の大王の貴きを以て、我々見たやうな、賤しい恩知らぬ罪人を愛し、その爲めに淺ましい人間の肉をつけ、而かも汚らはしい馬屋に生れ、人間の食物を食べ、人間の言葉を使ひ、全く人間となつて、哀れな生活をして下さると云ふは、實に幾ら感謝しても足りますことでせうか。幾ら御禮を申し上げても到底萬分の一にも當ることが出來ますでせうか。夫れに我々はどうしました?…難有いと思つたことさへない、御禮を申し上げることすら知らない、却つて罪に罪を重ね、色々と惡事を働いて、この慈愛深き天主樣に有ゆる侮辱を浴せかけ奉つて居るではムいませんか。あの小さな御目に湛へていらつしやる涙の露を御覽なさい。あの物哀しい御泣聲に耳を欹てなさい。あれは他の赤坊の夫れのやうに、決して意味の無い涙でもなければ、意味の無い泣聲でもありません。我々の罪を思つてお流しになる涙です。我々の恩知らずの罪を悲んでお泣き遊ばす泣聲です。

さすれば、どうぞ皆さん、今年よりは、否、今夜よりは全く心を改めて、今迄の過失を繰返さず、却つて彼の天使等の如く、牧者等の如く、聖母マリア、聖ヨゼフの如く、誠意こめて、この御子を尊び敬ひ、慕ひ愛すべく務めようではムいませんか。

(イ)—天使等は何をしましたか…天使等は救主が御降誕になつたことを直ぐ牧者等に告げ、又諸共に聲を揃へて、その御光榮を歌ひました。我々も之に倣ひ、出來れば知らぬ人にも天主樣のこと、救靈のことを知らしめ、殊に神の御子が、罪人を救はんが爲め、態々天よりお降りになつたことに就いて、厚く御禮を申上げねばなりません。その海山たゞならぬ御惠を心から讃美せねばなりません。

(ロ)—牧者等は何をしましたか…彼等は救主の生れ給うたと聞くや、何も彼も打棄てゝ、ベトレヘムの馬屋に駈けつけ、平伏して其嬰兒を拜みました。我々もそれを御手本と致しませう。聖堂へ參詣するやう、ミサを拜聽するやう、告白や聖體を拜領するやうに、罪を避け、御誡命をよく守り、德を修める樣、親兄弟より、司祭や、傳道師より、或は直接に天主樣より聖寵を以て戒められる時、勸められる時、飛び立つて之に從ひ、二つ返事で駈出す、と云ふ樣に致さなければなりません。

(ハ)—終に聖マリア、聖ヨゼフは何を致しなさいましたか…拜伏して御子を拜みなさいました。寒に顫へていらつしやるのを見て、腕に抱き上げ、懷に入れて、暖めなさいました。天主樣が人を愛して、かゝる淺間しき人間とまでお成り下さつたのを見て、自分等も一心に御子を愛しなさいました

た。その愛、その聖母マリア、聖ヨゼフの愛は御子の爲に如何ほど嬉しく、樂しく覺えられましたでせう。たとへベトレヘムの町人よりお宿を貸されないにせよ、たとへ全世界の人々より受け容れられないにせよ、この御兩方より愛されるだけで、十分御滿足に覺えさせ給うたでムいませう。

我々もこの御兩方を鑑とし、今よりは屢々聖體の前なり、馬屋の前なりに跪いて御子を禮拜いたしませう。殊に聖體を拜領する時は、各自の心にイエズス樣から生れて戴く樣なものですから、熱く〳〵お愛し申し上げませう。寒さも冷さもよく堪へ、之を以て御子を暖めて上げる、時には食べたいものを減し、飲みたいものを幾分控へて、それを御乳としてこの御子に獻げるやうに務めませう。そして今迄は幾度も〳〵罪に罪を重ねて、この愛すべき御子を悲ませ、涙を流させ奉つたから、今よりは其反對にこの御子を尊び愛して、少しでもこの御子のお嫌ひになることは斷然之を止める、この御子のお望みになることは、如何に辛くとも苦しくとも、必ずやつて除ける樣に致しませう。さう致しますと、御子も定めし御滿足に思召され、折角生れた甲斐があつたよ、とお喜びになるに相違ございません。

（八）御降誕（其二）

(1)—歷史あつて以來、人の心を最も深く感動させ、其奥底までも動かして止まないのは、吾主御降誕當夜の光景ではありますまいか。

身は天地の君、萬物の御主、たゞ一言もて世界をお造り遊ばしたほどの全能の神にて在しながら、何うして牛馬を繫ぐ洞穴に、淺間しい嬰兒となつてお生れになつたのでせう？斯くまで成り果てなさらなくては、人を救ひ上げることがお出來にならなかつたのでせうか。お出來にならなかつたのではないが、人を救ふのに是が最もよく適當しても居れば、又最も効果が著しいとお認めになつたからであります。實に人は救靈の道を踏み外して、途方もない罪惡の巷に彷徨つて居たものですから、之を正しい道へ引戻さねばならぬ。眞理を失つて、暗い〳〵迷妄の中に陷つて居たのですから、之が前に眞理の光を輝かさねばならぬ。靈魂の生命を失つて、禽獸も同然に成り果てゝ居たのですから、之に眞正な生命を吹き込んでやらねばならぬので厶いました。そこで後日群衆に向つて其道を示し、其眞理を輝かし、其生命をお與へになつたイエズス樣は、既に御降誕當時から、その御手本を以て、「我は道なり、眞理なり、生命なり」とお叫びになつたのであります。

(2)—**我は道なり**—人祖の罪に由つて人は天主樣に遠ざかり、天國の道を踏み外して了ひました。それからこ云ふものは丁度茫々たる太洋に舵を失へる捨小舟も同樣で、たゞ波のまに〳〵漂ふばかり。神を尋ねて、木の、石の、日の、月のこ云ふ樣なものに尋ね當り、夫れを神として禮拜み、幸福を搜して、現世の儚い財寶、煙の樣な名譽、汚らはしい快樂を捉へ、之を何よりの幸福とし、その爲に有

ゆる罪悪に身を持ち崩すに至つたのであります。

斯うした悲むべき狀態に陷つて居た時、約束の救主は御降誕になり、罪の爲に破壞された秩序を回復し、人類を罪悪の巷より引戻して、之に眞の神へ辿り着くべき道を敎へ給うたのであります。でございますから、御降誕當初より我々一人宛に向つて「我は道なり、汝我より進め」と仰しやつて下さいました。抑も天國の道は狹い、嶮しい、荆棘が生えまくつて居るので、之を終まで辿り了すと云ふは、並大抵のことではありません。夫れに持つて來て、例の財寶だとか、名譽だとか、快樂だとか、其他、色々の情慾が道側から出て來て、始終聲を掛けたり、手招いたりするものですから、動もすると、それに欺されて、岐路へ踏み迷はうとしてなりません。でイエズス樣は我々の爲に自ら道となつて、行くべき方角をお示し下さいました。

我々が財寶に眼を眩まされない樣、御自分は天地萬物の御主にて在しながら、極貧の中にお生れになりました。名譽の奴隷とならない樣、身は全能全智の神にて在しながら、牛馬見たやうに馬槽の中に臥かされなさいました。餘り肉體を撫で擦つて快樂を恣にしない樣、御自分はその軟らかい御體を硬い藁の上に横へ、寒い風に遠慮もなく吹き晒されなさいました。自分さへ良ければ、人は何うならうと構はぬと云ふやうに、我々は利己心に驅られ、自分の都合ばかりを考へたがるものですが、イエズス樣は却つて其反對の道をお示しになりました。「私を御覽なさい。私はあなたを愛して、あなたの爲に幼兒と生れたのです。私は總ての人を愛し、總ての人の爲に斯んな姿をして生れました。私を苦めるもの、責殺すもの、爲にでも、矢張り幼兒となつて生れたのですよ」と仰しやつて下さるのであります。

斯の如くイエズス樣は既に御降誕の其初から、天の道を示して、我々を麾いて居られます。「私に從ひなさい。私を鑑となさい。私は天主樣に到る道、眞の幸福に辿り着く門です。財寶や、名譽や、快樂や、其樣なものは決して人を幸福ならしめるものではない。若し其等が果して人を幸福ならしめるものならば、眞先に之を私の尊ぶ御母マリアに、私の敬ふ養父のヨゼフに、私の愛する弟子等に與へたでせう。然るに彼等は一生涯、貧乏をし、辱められ、苦んで世を渡つたものではありませんか」と斯う仰しやつて下さるのです。我々は斯の御聲に應じ、斯の御敎に從ひ、イエズス樣の御跡から、眞の幸福に至るの道を辿ることに致さなければなりません。

(3)― **我は眞理なり**― イエズス樣は其馬槽の中から「我は道なり」と叫び給ふと共に、亦「我は眞理なり、我に從ふ人は暗黑を歩まず」と仰しやつて下さいます。是れまでと云ふものは、人は情慾に眼を眩まされ、盲者も同然になつて居ました。自分は天主樣に造られたのだから、一度は亦天主樣の許へ歸らねばならぬものだ、現世は假の世、旅の空、天主樣の許に歸る準備を爲すための場所たるに過ぎないのだ、肉體は何時しか腐つて土となるのだが、靈魂は何時になつても朽ちることがない。され

ばたとへ全世界を儲け得とも、靈魂を失はゞ何の役にも立つものではない、と云ふことを一向悟り得ないのでした……隨つてたゞ何うしたらば長生をし、榮華を極め、面白く可笑しく世を渡ることが出來ようかと、たゞ夫ればかりを思ひ、夫れを終局の目的と致しまして、その目的を達することさへ出來たらば、如何な罪惡に汚れ果つるとも、差支へない位に考へて居たものであります。

此時に當つてイエズス様が御降誕になりました。冷い、じめ〳〵した馬屋に生れ、硬い荒くれた藁の上に臥かされて、世を輕んじ、其榮華を足下に踏み付けて見せられました。その貧しい馬槽の中から我々に向つてお叫びになりました。「亡せ易き財寶を求め、專ら之に恃み置くのは空しい事だ。名譽を冀ひ、高い地位に上らうとばかり思つたり、肉體を撫で擦り、後で嚴しく罰される樣なことを望んだりするのは空しいことだ。長く生きようとばかり望んで、些しも善く活きようと努めないのは空しい事だ、現世の事ばかり考へて一向來世の事を慮らない、一瞬間に過ぎ去る物を慕ひ愛して、永遠の喜悅の俟つて居る彼の天國へ急がないのは馬鹿げて居る」と。斯んなにお諭し下さいました結果、人々は始めて長夜の眠を醒して、眞理の光を仰ぐやうになりました。是迄と云ふものは世界は眞暗黑で、罪惡は時を得顏に蔓り盛え、道德は壓倒され、有ゆる惡風、汚俗は大手を振つて濶歩いて居たものでした。然るに一たびこの眞理の太陽が東の空に輝き初めるや、罪惡は忽ち跡を晦まして、美風善行が之に代りました。傲慢は隱れて謙遜が顯はれる、邪淫は逃げて清淨が出て來る、貪慾は引込んで慈善が顏出しをする、世界は實に花咲き、鳥歌ふ芽出度い春となつたのであります。

兎に角、主は眞理である、現世に來れる總ての人を照らす光である。之に從ふものは暗黑を歩かない。我々は今まで隨分と暗黑を歩きました。窮りなき天國の幸福と現世の儚い幸福と、汚らはしい肉體の愉快と、清い罪のない靈魂の愉快と、神樣と惡魔とを取違へて、餘程馬鹿を見たのでありました。何うぞ今日よりは一同眼を注いで彼の馬槽を眺めませう。彼の馬槽の中から響き渡る眞理の言に耳を傾けませう。我々の目的は此世にあらずして、天國に在る。眞正な幸福は肉體の上には無くて、靈魂の上に在る。天主樣を愛し、之に仕へ奉ることこの外は、總て空しく、馬鹿〳〵しいことだと悟りまして、專らその眞理を捉ふべく大に努力いたしませう。

(5)―**我は生命なり**―永遠の幸福を得るには、イエズス樣は眞理である、是非之が嶮岨であり、其敎が嚴格に過ぎて、實行し難い樣に思はれても、イエズス樣は眞理に照らされ、岐路に踏み迷はずして、一直線に進みに從はなければならぬ。この道に由り、この眞理に照らされ、岐路に踏み迷はずして、一直線に進みましたら、必ず眞の生命に到着するのですから、イエズス樣は終に「我は生命なり」と曰うた。この「生命」と云ふは、外に見える肉體の生命ではなく、內に隱れて居る靈魂の生命を指したものであります。我々の靈魂が一たびこのイエズス樣の生命を受け、それに活かされた日には、打つて變つて、萬事イエズス樣の如く思ひ、イエズス樣の如く言ひ、イエズス樣の如く行ひ、イエズス樣そつくりとな

つて了ふのであります。イエズス様の御降誕あそばしたのは實に之が爲でした。で今まで深い〳〵墮落の淵に沈み入り、殆ど禽獸の生命を以て活きて居た人々も、一たびイエズス様がベトレヘムの馬屋に生れて、その神聖なる生命を吹き込み下さつてからと云ふものは、すつかり面目を改めて參りました。飲食を以てその生命として居たものが、斷食を以て生命とするほどになり、色事を以て生命として居たものが、今や正當な樂までも拋つて、身も心も潔く神様に獻げ、清い天使の夫れにも劣らぬ生涯を送るやうになりました。盗みを以て生命として居たものが、今や慈善を以て生命となし、自分の所有物までも人に施すと云ふ樣になつたのであります。

あゝこの生命、このイエズス様の生命によつてこそ、我々は始めて眞人間となるのであります。イエズス様も仰しやづたでせう「我は葡萄樹にして汝等は枝なり、我に止り、我が之に止る人は、是れ多くの實を結ぶものなり。蓋し我を離れては汝等何事をも爲す能はず」(ヨハネ一五―五)と。して見ますれば、善を修め、德を積みて、天國の幸福をかち得んが爲には、何うしてもこのイエズス様の生命を有つて居なければならぬ。イエズス様が見るも憐れな馬屋に生れ、有ゆる困難を嘗め盡し給うたのも、たゞ我々にこの生命を得させたいと云ふ有難い思召からでゝいました。

。　。　。　。　。

イエズス様が馬槽の中からその美しい御手本を以て叫び給うた御言はこの通りでゝいます。唯今では其イエズス様も馬屋に生れ給ふのではなく、聖體の秘蹟を以て、我々の心にお生れ下さるのであります。して我々の心の道となつて、進むべき方向を示し、我々の智慧に眞理の太陽と輝いて、情慾に眼を眩まされぬ樣にし、我々の靈魂に生命を與へて、御自分と一致させ、何時までも〳〵離れない樣にして下さるのですから、何方も今夜は熱心に聖體を拜領した上で、イエズス様に向ひ、「何うぞ私の道となつて、岐路に迷はせないで下さい。眞理となつて、私の心を照らし、生命となつて、私を生かし、善德の美しい實を結ばして下さいませ」と祈らなければなりません。

(九) 御降誕 (其三)

世の始より竢ちに竢たれし救主は、今日ベトレヘムの洞穴に御降誕になりました。天地を造り、萬物を主宰り給ふ全能の神様が、勿體なくも宿るべき家さへなく、穢しき馬屋に生れ、馬槽の中に寢かされ給ふのであります。然し不思議にも忽ち一位の天使はこの有難い御降誕を牧者等に告げ、それと共に夥しい天使の群は喜びの聲を揃へて「最と高き處には神に光榮、地にては御好意の人々に平安」と歌ひました。我々も今夜この喜ばしい出來事を記念するに當りまして、天使等と心を合せ、聲を揃へて、神様の光榮を歌ひ、人々の上に平安を呼び求めたいものであります。

(1)―抑も天使等が「最と高き處には神に光榮」と歌つたのは、果して何を意味したものでせう。救主

の御降誕あそばす迄と云ふものは、世は全くの暗黑で、神が如何なる御方なるかと云ふことすら識らなかつた位ですから、況して之を尊び愛するなんて夢にも思はぬのでありました。ユデア一ケ國を除けば、世界到る處、皆哀れにも木だの、石だの、禽獸だのを神として拜んで居ました。實にボスエが申しました如く「何でも彼でも神としながら、たゞ眞の神だけを神としないのでありました」。然るに救主が一たび御降誕になりますや、人々は善く神樣を識り、隨つて善く之を拜み、善く之を尊び、善く之を愛する樣になりました。啻に人が尊び拜むばかりでなく、人を愛して、人と生れ給うたその神樣が、人に代つて尊び拜んで下さると云ふ樣になつたのであります。祈禱も今迄の如く腐つた心より迸るのではなく、清い汚れのない口を以て神樣の御前に捧げられる。祭壇に供へられる犧牲は、今迄の如く拙らない牛や羊ではなく、實に神の御子であり、神の尊い御身であると云ふやうな鹽梅で、夫だけ人々は次第に惡を離れて善に就き、罪に遠ざかつて德に親み、爲に世の中の狀態はがらりと一變して、僅か百年か二百年の中に、五千年、一萬年の間よりも一層善く神樣を禮拜み、尊崇ぶに至つたのであります。天使等が「最と高き所には神に光榮」と歌つたのは、實によく當つて居ると言はなければなりませぬ。

(2)—次に天使等は「地には御好意の人々に平安」と歌ひました。「御好意の人々」とは神の御意に適ふ人々を意味するのであります。その人々の上に天使等が平安を願つたのは何の爲でせう、當時天下は太平で、戰爭は何處にもありませんでした。世界の國々は羅馬に征服され、羅馬は亦皇帝アウグスツスの支配の下に、安かな平和を樂んで居ました。それに何うして「地には御好意の人々に平安」と天使等は歌つたのでせう。なるほど其頃、天下は太平で、矢玉の響も聞えねば、腥い血汐の流れる事もなかつたのですが、然し戰はやはり有りました。先づ人と神との間に、次に人と人との間に、終に各の身の中に始終激しい戰があつたのでございますから、世界の大王にて在すキリスト樣は、その御國にお這入り遊ばすに當つて、平安を引出物として、其臣民にお分ちになつたのであります。

(3)—先づキリスト樣は「神と人との間に平安を齎し給うた」、そも〳〵平安とは何ぞやと云ふに、平安は秩序が整然として、すべての物が夫れ〴〵定つた位置に安んずることを言ふのであります。即ち下たるものはよく其上に從ひ、上たるものはまた其下を率ひてよく神樣に從つてこそ、始めて秩序が整ひ、平安が生ずる譯で、一たびこの秩序が破壞れた日には、茲に即ち戰爭がおつぱじまるのであります。

所で罪と云ふものは、天主樣のお定めになつたこの秩序を亂すのである。從はねばならぬはずの人間が神樣に從はずに、却つて之に反抗ふのである、却つて之に謀叛するのである、却つて之に戰爭を仕向けるのであります。御存じの通り、我々人間は、アダムの罪の結果として原罪の汚れに染り、始めから神樣の敵となつて生れるのですから、決して平安を有つて居ません。然るに救世主キリスト樣は

何をして下さいましたか。御自ら神様と人間との間に立つて仲裁をして下さいました。双方を和解さして下さいました。罪の爲に破壞され了つた秩序を回復して、元々通りにして下さつたのであります。人間は罪を犯して神様に侮辱を加へましたから、是非ともそれ相當の謝罪をしなければならぬのでしたけれども、悲しい哉、夫れが人間の力では出來兼ねる。人間の力には限りがある。而かも其身は罪に汚れて居る。神様は無限絶對である。隨つてその神様に加へた侮辱も同じく無限であらねばならぬ。有限、有罪の人間が何を何うしたからとて、無限の罪を償ふことは出來るはずはありますまい。そこでキリスト様は全能全智の神の身を持ちながら、淺ましい人間となり、汚らはしい馬屋に生れ、果ては十字架に磔けられて、鮮血を滴らし、我々に代つて神様に謝罪をして下さつた。斯くの如くして我々の勘當は赦され、神様は再び我々に取つて慈愛深き父となり、我々はその愛子となるを得ました。即ち神様と人間との間に平安が成立したのである。和睦が取結ばれたのであります。

でございますから如何なる罪人でも、神様の前に謙つて赦を願ふ氣にさへなりますならば、この救主キリスト様の功德によつて、何時でもその罪は赦される。平安はかち得られる、「地には御好意の人々に平安」がある譯ですから、何方もこの大祝日に當つて、少しでも神様と不仲になつて居る所がない樣、もし不幸にして、そんな事になつて居るならば、一刻も早く痛悔の胸を打つて、和解を祈り求める樣に致さなければなりません。

(4)—「人と人との間に平安を齎し給うた」、キリスト様はたゞ神と人との間に平安を齎し給うたのみならず、亦人と人との間を和睦さして下さいました。アダムが罪を犯してより、人は始終傲慢、貪慾、嫉妬等の爲に相爭ひ、相戰ふ樣になり、世界は茲に慘憺たる修羅の巷と化し去りました。博く人を愛するとは云ふことは夢にも思ひませんで、たゞ自分の利害のみを考へ、自分さへ善ければ、人は倒れようと、轉ばうと、少しも構はないと云ふ樣な利己一天張となりました。たゞに國と國とが相戰ふのみならず、また家と家、人と人とが同じく傲慢の爲め、貪慾の爲め、嫉妬の爲に睨み合ふ、睚み合ふ摑み合ふと云ふ樣になつたのであります。

然るに「平和の神」と稱され給ふキリスト様は何うなさいましたか。言を以て、行を以て、人に博愛の道を敎へなさいました。世の人々が皆神様を父とせる兄弟となり、相親み相愛する樣に敎へなさいました「我は新らしき掟を汝等に與ふ、即ち汝等相愛すべし」(ヨハ一三三四)だの、「我が汝等を愛せし如く、汝等も相愛すべし」(上)だの、「もし汝の兄弟、汝に罪を犯さば之を諫めよ、若し改心せば之を赦せ、一日に七度罪を犯して、一日に七度改心すと云ひつゝ、汝に立返らば之を宥せ…」(ルカ一七三)だのと敎へて、人々の心を和げ、互に親密となして下さいました。

特にキリスト様は自ら鑑となつて、すべての爭ひ、すべての不和の基たる傲慢だとか、財寶や、快樂やを貪る心だとか、嫉妬だとか、そんなものを根絶やさうとして下さいました。神の御子が馬屋に

生れ、寒さに慄へ、泣きに泣いていらせられる憫れな光景に眼を注ぎなさい。その寢かされ給へる馬槽こそ、「謙遜せよ、名譽を貪るな、貧困に安んぜよ、身の安樂を希ふな、人の幸福を羨むな」と敎へ給ふ敎壇ではありませんか。

自分は帝王の宮殿に生れ、光り眩き玉の臺に臥して、數多の侍臣にかしづかれることも出來たのに、却て貧困も貧困、實に乞食の夫れよりも哀れな貧困の中に生れて、世の財寶は財寶こするに足るものでない。肉體の快樂は決して人を幸福ならしむるものでない、人の身分を羨む代りに、却て嬰兒の如く、柔和にして謙遜なるべし、とお諭し下さつたのであります。

初代敎會の信者等はよくこの御敎を守り、この御鑑に則りまして、皆が同心同意になり、財產までも共同にして暮したもので厶いました。聖パウロの如きも斯う言つて居ます、「異邦人もユデア人も、割禮も無割禮も、夷もシタ人も、奴隷も自由の身もあることなく、たゞ萬民の中に萬事こなり給へるキリストの在せるのみ」(コロサイ三)こ。然うなつた日には國と國との間に戰爭の起らう筈もなければ、家と家との間、人と人との間に不和の生ずる憂もない譯で厶いませう。

我々は只今この美しい御手本を眼前に眺めて居るのですから、務めて之に則り、傲慢や、貪慾や、嫉妬や等を戒め、我身を忘れて人を愛し、家庭にあつては、親子、兄弟相親み、外に出ては隣近所とも仲睦くして、折角キリスト樣が御降誕の折に齎し下さいました平安の寶を戴くことが出來ます樣、心掛けたいものであります。取分け聖體を拜領する時は、謂はゞ同じ食卓に就き、同じ食物を同じ父の手から分けて戴く樣なものですから、少しでも互に不滿があつたり、遺恨がましい事があつたりしない樣、務めなければなりません。

(5)—「各の身の上に平安を齎し給うた」、然です、キリスト樣は我々一人宛の上にも平安を齎し下さいました。何方も御承知の所でせうが、我々の身の中には二人の人がある。即ち肉體と靈魂、情慾と正理こがありまして、始終相反し、相爭つて居る。一方で善を望めば、他の一方では惡を搜ねる、一方の嫌ふ所を、他の一方は血眼になつて探し求めるといふ鹽梅であります。神樣が始めて人をお造りになつた時は、決してそんなものではなかつたのです。情慾はよく正理に從ひ、肉體はよく靈魂に從ひ、靈魂はよく神樣に從ひまして、秩序がきちんと立つて居ました。然るに人が一朝、罪を犯すや、情慾は正理を驅逐してやたらに我儘を働き、靈魂に隷屬すべき筈の肉體は、倒に靈魂を抑へつけて之を己が奴隷たらしめると云ふ樣になり、秩序は茲に破壞れ、平安は全く失はれて了ひました。

そこでキリスト樣の御降誕なさいましたのは、この我儘を働いて居る情慾を制へて正理に勝を占めさせ、この靈魂を奴隷にして居る肉體を征服して、靈魂を主人公こなし、肉體を奴隷たらしめる爲で厶いました。今御降誕の馬屋を覗いて御覽なさい。情慾を滿足させる品が一つこして見付かりますか。

何處に肉體を樂ませるものが一つとして備はつてありますか。その御宿は汚らはしき馬屋、その臥床は硬い冷たい少しの藁屑、その産衣は粗つぽい布片、たゞ夫ばかりではありませんか。心の平安を得たいと思ふ御方は是非とも之を鑑とせねばなりません。情慾の欲する儘に、肉體の冀ふ通りに從ひましては、決して平安は得られません。さうでせう、眞正の平安は戰ひ勝つて、然る後始めて樂まれるものです。正理を情慾の上に立たせ、靈魂に肉體を驅り使はしてこそ、即ち惡に遠ざかり、善に親み、德を研いてこそ始めて心は安堵して、ゆつくり平安を樂むことが出來るのであります。實に或人が申しました如く「平安と云ふものは、德の妹でありますから、姉たる德を逐出して妹だけを引止めようとした所で、到底止まるものではありません。」

之を要するにキリスト樣が御降誕になると共に、神樣は大なる光榮を得られました。我々も今から特別の熱心を以て、いよ〳〵神樣の御光榮を揚げ奉る樣、心掛けませう。

次にキリスト樣は我々に引出物として、平安を齎し給うた。我々は之を大切に保存せねばならぬ。未だ神樣と和睦が出來てない人は、一日も早くその和睦を成立させる樣、既に和睦して居られる御方は、決してその平安を失ひ、再び不和とならない樣、人と人との間は勿論、殊更ら各自の心の中にその有難い平安を保つて行くやうに、お務め下さらんことを、偏にお勸め致して置きます。

（十）御降誕（其四）

「嬰兒我等の爲に生れたり、一人の子供我等に與へられたり」とはイザヤの豫言であるが、實に世の始より約束されし救主、人類が待ちに待つて待ち焦れて居た救主は終にお生れになりました。而も憐れなる嬰兒となり、宿るべき家さへ持たないで、ベトレヘムの町外れのむさくろしい馬屋に御降誕遊ばしたのであります。身は天地の大君、萬物の御主、全能全智の神にて在すと云ふのに、寒い風のひゆう〳〵と吹き渡る冬の夜半、焚火もなく、燈明もない洞穴の中、硬い、冷い藁屑の上に臥かされ給ふとは抑も何の爲でムいませうか。

思ふに救主の現世にお生れ遊ばしたのは、我々を救ふ爲ではムいましたが、それにはたゞ罪惡の病に特効ある藥をお與へ下さるのみでは足りません。我々がその藥の苦さに怖れて、之を口にしないやうでは折角の靈藥も何等の効を奏することも出來ない譯ですから、先づ御自分で夫を飲んで見せねばならぬ。で御主は口を開いて御教を說く前に、自ら感ずべき御手本をお示し下さつたのであります。

(1)—抑もすべての罪惡の根元は何であるかと云へば、肉の樂、金錢の慾、傲慢、この三つでございまして、この三つの根を切つて棄てない限り、何うしても罪惡の枝葉を枯すこと出來るものではありません。そこで救主は生れると直ぐから、甚い難儀な目にお遭ひなさつて、我々に肉の樂を抑

へるやうにお勸め下さいました。そのお生れ遊ばした馬屋を一目眺めて御覽なさい。頃は十二月の末つ方、何ぼ暖かいユデアとは云へ、夜なぞは隨分冷えもしたでせうと思はれますが、救主は冷い、火の氣すら無い洞穴に生れ、硬い藁の上に臥かされて、寒さにふるひ上つて泣いて居らつしやるぢやありませんか。之を眺め見ては、何うして快樂を求めたいの、一生安樂に、我儘氣儘に暮したいのと云ふ氣が起されますでせうか。救主は全能の神様、天地萬物の御主様でありながら、あれほどの難儀苦勞を見て、未だ口を開いて御敎をお說きにならぬ前から、既にその御手本を以て「福なる哉、悲む人！」と敎へ給ふのに、罪深い我々が、何うして徒らに快樂の後を追ひ廻し、少しの艱難苦勞に出遭しても、直ぐ天主様を怨んだり、人を咎めたりされる譯がムいますでせうか。

(二)——金錢を輕んぜよ、と敎へて下さいました。世の人は金錢の光に眼を眩まされて、一心不亂に之を求め歩いて、天國のことなど思ひ出しもせぬ、少しのお金が手に入るならば、靈魂なぞ投げ出しても厭はない、と云ふ鹽梅である。イエズス様はこの病を癒すが爲に、淸貧の藥をお與へ下さいました。もしお望みでしたら、金銀の光眩き宮殿に、皇后を母として生れ、榮華の有りだけを極めることもお出來になつたのですが、さう致しなさいましたら、我々に金錢の慾を切つて棄てさせることは出來ないのみか、却て益々その慾を蔓らせる、却て益々金錢を欲しがらせる、榮華を望ませる、靈魂を投棄て、天國を投棄て、天主様を投棄て、も構はないと云ふ氣にならせるのみでムいましたでせう。

だからその反對に、金錢の慾に縛られるのは危險だ、金を神様にして拜むのは罪深い業だ、と云ふことを覺らせるが爲に、態々斯う云ふ慘な貧賤の中にお生れ遊ばしたのである。皆さん、眼を睜つて馬屋の中なる救主を御覽なさい。神の御子と云ふ貴い御身を持ちながら、貧しい母より生れ、宿るべき家さへ持たずに、汚らはしい馬屋に、冷い窮屈な馬槽の中に、粗末な布片に卷まつて臥かされ給ふその憫れな光景をつくぐ〜と打眺めなさい。山に棲む獸には暖い毛衣を纏はせ、空飛ぶ鳥には見事な羽毛を着けさせ、野の百合には彼の榮華を極めしサロモンでさへ着ること出來なかつたほど美しい裝飾をさせ給ふ天主様である。夫れに以つて來て、斯れほどまで甚い〳〵貧乏をなさいました……實際、現世に生れ出で給うた其日から、既にその馬槽の中から、未だ物も言へない其前から、金錢を足下に踏みにぢつて見せられました。その美しい御手本を以て、世の財寶の空しいことをお諭し下さいました。

「福なる哉、貧しき人！」とお叫びになつたのであります。

重荷を背負へば勢ひ下へ俯向きます。お金は靈魂の重荷です、之を背負つて居ると、勢ひ靈魂は下ばかりを眺めるやうになる。お金がある爲に、人に崇められるので、自然傲慢に流れたり、恥べき邪慾の快樂を求めたりする。一度も天を眺め得ないので、つひ〳〵救靈までも失ふの危險に陷るのであります。之に反して貧乏な人は、此世に快樂がないから、責めては天國を望むやうになる、天主様に賴り縋るやうになつて來る。そこでイエズス様は態々貧乏の中に生れて、金滿家には其金の光に

眼を眩まされないで、むしろ之を輕んぜよと敎へ、貧乏人には、クヨ〳〵言はないで、善く其貧苦を耐へ忍べ、たゞへ人に輕んぜられても、現世では樂がされないでも、自分が友になつてやる、天國で十二分に報いてやるぞ、とお諭し下さるのであります。

(3)―傲慢を輕んぜよと敎へて下さる。終にイエズス樣は我々の傲慢に對して驚くべき謙遜の藥をお與へ下さいました。一國の帝王に世嗣の君が生れ給うたと云ふ時は、國民は擧つて躍り喜び、祝杯を擧げ、歌ひつ舞ひつするものですが、天の大王、世の救主の君が生れ給うても、知る人すらない、一夜の宿さへも借して呉れるものはないと云ふ位……神の御稜威は其弱々しい嬰兒の體の中に包み、其光榮の輝きはむさくろしい馬槽、みじめな布片の蔭に隱して、少しも之を外に顯はしなさらぬのでした…人に顯はれよう、金の光を輝かさう、才能を誇らう、身を飾つて人目を驚かさうと思ふ御方は、來つて此馬屋の前に立ちなさい。この隱れて輕んぜられて、賤められて居られる天主樣を打眺めつゝ、自分に何の誇るべき點があるかと少しく我身を顧みて御覽なさい。人は無い所までも有るが如く見せかけて誇らうとしますが、この天主樣は有る所までも包んで、無きが如くして居られます。人は自分のことばかり語りたがる、他の人に始終注目され、讃め囃されたい、と望むものですが、この天主樣は弱々しい赤ん坊に生れて一口の物すら仰有らない。天地萬物の御主にて在すと云ふのに、斯う云ふ慾めな態をしてお生れ遊ばしたのである。之を思つては、人に對して大きな顏をしたり、人を輕蔑したりされたものでせうか。寧ろこのイエズス樣の感ずべき御手本に倣つて、自分も出來得る限り謙遜すべきではありませんでせうか。「今日ダウイドの町に於て、汝等の爲に救主生れ給へり」、天使は斯う云つて牧者等に告げました。實に救主は我々皆んなの爲にお生れ下さつたのであります。金滿家の爲にも、貧困者の爲にも、貴人の爲にも、賤民の爲にも、矢張り救主としてお生れ下さつたのであります。誰も彼も來つて馬屋の前に拜跪きなさい、金滿家は跪いて、つく〴〵と救主の貧困の態をお眺めなさい。主の御目には富の光も、身の榮華も誇とするに足りない、たゞ清い罪のない心こそ、その最も喜び給ふ所であると云ふことが、はつきりと讀まれるじやありませんか。

貧困に泣いて居る人は猶更らこの馬屋の前に跪きなさい、救主は皆さんを慰めるが爲に、皆さんの如くなつて下さいました。生れると間もなく、貧賤な牧者等をお招きになりました。貧苦も之を善く耐へ忍んだら、如何に天主樣の御心を喜ばせ奉るのであるかと云ふことを、お諭し下さつたのじやありませんか。

終に笑つて居る人は來つてその御涙を見、泣く道を學びなさい。泣いて居る人はその御涙の中にも晴々しい御姿を見て、喜ぶ道を學びなさい。善人は來つてその謙遜、柔和、清淨の德を學びなさい。罪人は來つて希望を起しなさい。主が嬰兒となり給うたのは人を罰する爲ではない、憐れむ爲である。嬰兒は怒ることさへ出來ないものだと思つて、希望を起し、深く信賴しなさい。

（十一）御降誕の意義

「今日ダウイドの町に於て、汝等の爲に救主生れ給へり」（ルカ二ノ一一）

是は御降誕の當夜、天使がベトレヘムの牧者等に、この喜ぶべき出來事を告げた時の言であります。然り、救主は我々の爲にお生れ下さいました。(1)我々を天主様に接近かしめる爲め、(2)我々の惱みを和げるが爲め、(3)我々の心の病を癒すが爲め、斯うしてお生れ下さつたのであります。

(1)—身は全能全智の神、天地萬物の御主にて在しながら、宿るべき家すら持たないで、汚らはしい馬屋に生れ、僅に布片に包まれ、柔い御躰を硬い馬槽の上に寢かされ給うたのは、固より我々を救ふ爲ではあつたが、然しその救を全うし易からしめんが爲、先づ我々を天主様に接近して下さつたのであります。

抑も人類はアダムの罪の爲め、如何に深い墮落の底に沈んだものでせうか。天主様の愛子として造られ、天主様と親しく交はり、何の恐怖もなく何の遠慮もなく、恰度無邪氣な子供がその父母に親むが如くして居た人類も、一たび罪に汚れて神に詛はれ、その勘當を蒙つてからと云ふものは、今迄の親愛の情は忽ち恐怖の念に變り、自分と天主様との間が遠くかけ離れて、連りに天主様を恐がる樣になりました。イスラエル人は天主様の選民でありながら、その御聲を聞くのを恐れ、モイゼに向ひ、「貴方が代つてお話して下さい、天主様の御聲を聞くと、死んで了つてはなりませんから」と願ひ出ました。イザヤ豫言者ですら「あゝ我は禍なる哉…萬軍の主なる神を視奉れり」（イザヤ六ノ五）と氣遣つた位であります。何故こんなに常ならぬ現象が起つたのでせう。何故こんなに甚く天主様を恐がる樣になつて來たのでせう。罪の爲め天主様に突離され、天主様の御怒を招き、その詛を蒙る樣になつた結果ではないでせうか。でイエズス様は我々と天主様との隔りを埋めんが爲め、態々現世にお生れ下さいました。我々が天主様の御威光を恐れ、敢へて近づき奉らうともしないから、その恐怖の念を去つて、元々通り天主様と隔てのない父子となり、親密に交つて行ける樣に、自ら我々と等しい人間にお生れ下さいました。もう今迄の如く天主様は遠い〳〵天の彼方に、その恐ろしい御威光を輝かして鎭まりますかの如く思ふには及ばない。自ら「エムマヌエル、即ち我等と共に在す神」となり、我々の中にお住ひ下さる、しかも可愛い嬰兒となつて、お住ひ下さるのである、何の恐ろしい所もない、怒ることも、罰することも出來ない、たゞ清い罪のない、美しい、如何にも愛くるしい御姿を仰せるばかりの嬰兒となつて、お住ひ下さるのであります。「我れ人民一般に及ぶべき大なる喜悅の福音を汝等に告ぐるなり」（ルカ二ノ一〇）と、その御降誕に當つて、天使は牧者等に申しました。して見ると、誰しもこの救主に近づくのを怖れる譯はない。幾ら罪人でも、雷の如き大聲で怒鳴り付けられる氣遣ひは全くない。主がその御威光を晦まし、その御光榮を隱して、たゞもう愛くるしい、飛付きたい

ばかりの嬰兒に生れさせ給うたのも、自分は恐れてもらひたくない、むしろ愛してもらひたい、遠ざかつて貰ひたくない、なるべく近づいてもらひたい、と云ふ切なる御志をばお見せになる爲ではなかつたでせうか。されば義人は近づいてこの救主を愛して下さい。聖母の如く、聖ヨゼフの如く、天使等の如く、いよ〳〵この救主を愛し、自分の爲め、かゝる慘めな姿をしてお生れ下さつた御惠み感謝しなければなりません。世の多くの人々が一向尊びもせず、愛しもせず、認めもしないから、その人々に代つて益々之を尊び、之を愛し、之を深く識り、人にも識らしめ奉る樣、務めて欲しいものであります。

「罪人はまたこの救主の柔和で、愛くるしくて、怒ることも、罰することもかなひ給はぬその幼な姿を見て、厚い〳〵信頼心を起して近きなさい。「我が來りしは義人を招く爲にあらず、罪人を招きて改心せしめん爲なり」(五ノ三二)と、早や馬槽の中から叫び給ふのじやありませんか。路傍の戸締りもない、開つ放しの洞穴にお生れになりましたのは、誰でも遠慮なく近づかれる樣に、門前に立つて案内を請ふ必要すらない樣にと云ふ思召からではありませんでせうか。

(2)—イエズス樣は我々を慰める爲に、弱々しい人間にお生れになりました。實に主が天地萬物の神の尊きを以て、身動きすら出來ない嬰兒に生れ、粗末な布片に包まれなさつたのは、人間に生れると共に、人間の弱さをも引受けたよ、と云ふ意を表す爲ではありますまいか。即ちイエズス樣は御降誕の其當時から、寒さを感じ、饑渴を覺え、疲勞も痛も苦も、すべて人間の身の上に起るべき難儀苦勞を嘗めさせ給うたのであります。「我等が有せる大司祭は、我等の弱點を勞はり得給はざる者に非ずして、罪を除くの外、萬事に於て我等と同じく試みられ給へり」(ヘブレオ四ノ一五)と聖パウロは曰つて居る。斯くて我々と同じく難儀に遭ひ、我々と同じく饑渴を感じ、我々と同じく寒さに、貧しさに苦み、我々と同じく種々の試みに遭ひ、以て我々を慰め勞はり下さつたのであります。

病に罹つた人でなければ病の辛さは分るものでない。貧に泣いた人でなければ、貧の悲しさは悟れるものでない。自分が嘗て遭遇した樣な災難に惱んで居る人を見ると、殊更ら同情の念に堪へ難く思ふのは人情である。固よりイエズス樣は我々を罪の中より救ひ取つて、天國へ案内するが爲めお生れ下さつたのだけれども、然し現世は何處までも涙の谷である。喜び笑ひつゝ現世を渡つて行く人は極く少數で、多くは泣きの涙で月日を送つて居ると云ふ鹽梅ですから、救主は我々を救ふと共に、また我々の艱難を勞はり、辛苦を慰めたいと思召され、隨つて我々を慰める爲に、我々と苦勞を共にして下さいました。「自ら苦みて試みられ給ひたれば、試みらるゝ人々をも助くるを得給ふ也」(ヘブレオ二ノ一八)。我々を慰める爲に態々苦んで下さつた、試みられて下さつたのだから、身體の苦みに泣いて居る人、精神の惱みに悶えて居る人、貧しい人、捨てられた人、迫害され、虐待されて居る人も、すべてこのイエズス樣に近づき、その馬屋の貧しさ、見すぼらしさを覗いて視なさい。その柔かい御肌を寒い風に晒

され、硬い藁に刺され給へる御姿を打眺めなさい。自分ばかり貧乏すると思つて、溢してはなりません。イエズス様もまた貧乏していらつしやいます。自分ばかり痛い目を見、苦しい目に遭つて居ると不平を鳴らしてはなりません。イエズス様はもつと〳〵痛い目を見、苦しい目に遭はされなさいました。自分ばかり人に捨てられて、虐待され、讒謗されて居ると云つて、腹立たしく思つてはなりません。イエズス様も人に捨てられ、賤められ、悪口され給うたのであります。

(3)—イエズス様は我々の病を癒す爲に貧困の中にお生れになりました。我々が天國を指して進むのに最も妨げとなるものは何かと云へば、僞の寶である、僞の譽である、僞の樂である。それにも拘らず、この寶なり、譽なり、樂なりを以て眞の幸福となし、是にすべての希望を置き、仰いで天を眺めよう、天國の幸福を求めようともしない人は夥しいものであります。

イエズス様は人類の改革者として現世にお生れ遊ばしたのですから、先づ我々に迷妄の眠を醒さして、眞の禍は何であり、眞の禍は何であるかと云ふことを知らしめ、以て我々の病を癒さうとして下さいました。そのお生れ遊ばした馬屋、その寢かされ給へる馬槽、その硬い疎な藁屑、その粗末な布片を一目見たならば、誰にしても御志の在る所を察すること出來ないはずはありますまい。

若し現世の寶や樂や譽やが我々の追求すべき眞の幸福であるとするならば、イエズス様は先づ之を我身にお取りになつたはずである。先づ之をその愛する御母、その尊ぶ養父にお與へになつた筈である。さはなくして御覽の通り、初からみじめ極まる貧困の中にお生れになりました。現世の寶でも、現世の樂、譽、位でも、そんなものは、神の子たる自分や、自分の弟子には不似合だ、もつと大きな寶、もつと大きな譽、もつと大きな樂を手に入れる爲にこそ現世には生れ出たものである、と云ふことをお見せ下さつたのぢやないでせうか。

斯の如くイエズス様はお生れのその當時から、早くも現世の僞りの寶や、僞りの譽、僞りの樂を排斥なさいました。生れるのに家すら持ち給はぬ、神の御子がお生れなさつたのに、之を知るものとては、僅にその御母マリア様と養父のヨゼフ様だけで、御前に召されて來たものも貧しい幾名かの牧者等でした。貧の尊さを説き、金錢の慾に縛られないやう、人に教へ給はねばならぬのでしたから、先づその御手本を示されました。そのお生れになつた馬屋すら、我有ではなかつた、と云ふ位であります。

なほ弟子たるものは、十字架を擔いで自分の後から進まねばならぬ、天國の道は嶮しい、荊棘が生えまくつて居る、と云ふことを諭さんが爲め、我身は生れると直ぐから、十字架を擔いで見せられた。その柔かい御體を休める臥床は臭い馬槽、硬い藁屑でした。我々も御跡に從ひませう。「汝等賴母しかれ、我は世に勝てり」(ヨハ一六一三三)と仰しやるのを聽くと思ひ、御手本に則り、其弟子となり、他日その光榮を共にすべく務めなければなりません。

終に世の光榮を冀ひ、名譽の奴隷となり、爲に靈魂を滅すの馬鹿〳〵しさを示すが爲め、身は〳〵

地萬物の大王にて在しながら、牛馬の宿る洞穴に生れ、荒ぼい布片に包まれ、藁の上に臥かされて、虚榮心を踏みつけて見せ、謙遜の美しい御鑑をお示し下さいました……。才能を誇り、學識を見せびらかし、金の光を輝かし、人に顯はれ、世に時めきたいと云ふのが、世間一般の通弊であるから、夫を癒すが爲に態々斯う云ふみじめな姿をして、お生れ下さつたのであります。誰しもこの隱れて、輕んじられて、賤められたまへる天主様を打眺めつゝ、自分に何の誇るべき點があるかと顧みて下さい。我々は無い所まで有るが如く見せかけて誇らうとするのに、この天主様は有る所まで包んで、無きが如く裝つて居られる。我々は自分の事ばかりを吹聽したがる、人に注目されたい、噂されたいと望むのに、この天主様は弱々しい嬰兒に生れて、一口の物さへ仰有らぬのであります。皆さんどうぞ、この有難い御教訓を深く心に刻みつけ、馬屋の前に跪く毎に之を思ひ出し、主の御鑑に則つて、清貧、忍耐、謙遜を實行すべくお務め下さいます様、特にお勸め申す次第であります。

（十二）馬屋に來れ

信者間に行はれる信心の務は一にして足らずであるが、御降誕節には馬屋の御子様を尊ぶと云ふ習慣になつて居ます。やがて新年となりますが、一年の嬰兒とも云はれるお正月に當つて嬰兒のイエズス様を敬愛するのは最も適當なことでありまして、このお正月中は、皆さんの眼前に馬屋の模樣が見せられてありますから、皆さんは始終其前に拜跪いて、御子様のお示し下さる有難い御手本を打眺め、そのお與へ下さる祝福を忝うするやう、お務め下さらねばなりません。

(1)—馬屋に參詣して祈らねばならぬものは第一に兒を持つた母親である。母親は兒を抱いて馬屋の前に拜跪きなさると、兒は物珍らしげに御子様を見詰め、聖母マリア、聖ヨゼフ、牧童等を打眺めて、その愛らしさに見とれ、イエズス様を抱つこしたい氣にもなりますでムいませう。「罪を犯しては可けません、惡いことをするものではありませんよ、惡いことをすると、彼の可愛い御子様を打つのですよ、踏むのですよ、泣かすのですよ」と聽かされては「いゝえ、お母ちやん、もう惡いことはしません、御子様を泣かしません、打ちも、踏みもしません」と云ふでムいませう。母親もまた兒の爲め一心にイエズス様に祈り、主がその兒を祝福し給ひ、之を守りて罪を犯さしめず、御自分の御手本に倣つて、親には善く從ひ、年と共に智慧も進み、天主様にも人にも可愛がられる樣な兒になりますやうお願ひなさるでございませう。

(2)—青年の方々もこの馬屋に驅け付けて、馬槽の中に臥かされ給へるイエズス様の無邪氣な姿、清淨潔白な御有様をつぐ〳〵と打眺めて、イエズス様の御氣に適ふには、何うしても惡に遠ざからねばならぬ、心を清淨潔白に保たねばならぬ、無邪氣にならねばならぬと云ふことをお覺りなさい。主を眺めるにつけて、主のことを思ふにつけて、心は自づと聖寵を感ぜずには居られない。自分の靈

魂の上に、一層よく注意の眼を睜つて、輕々しい考へ、良からぬ思ひ、不潔な想像などを拂ひ退けねばならぬと云ふことを覺つて來る。目を愼んで危いものを見ないやう、耳を愼んで惡い語を入れないやう、口を愼んで汚はしい話などをしないやう、すべて人から後指さゝれる、惡い噂を立てられる因ともなるべき行動は、斷然之を改めるやうにせねばならぬ必要を感じて來るでムいませう。

そして皆さんに淸淨潔白の鑑を垂れ給ふイエズス樣は、亦之を守るに要する聖寵をも惠み給ふのですから、皆さんはこの馬屋の前に拜跪く毎に、殊更ら熱心に祈りて、不潔な誘ひ、世間の誹しに打克たして下さるやう、罪と云ふ罪は見たばかりでも怖れて顏を背けると云ふほどになして下さるやう、聖寵をお願ひなさい。

(3)—人に賤められ、貧乏に苦められ、辛い勞働に泣いて居る人も馬屋の前にお出なさい。イエズス樣は皆さんの地位にまで身を卑下めて、皆さんに難有い敎訓を垂れると共に、少からず皆さんの氣を引立て、居られるじやありませんか。實に天地萬物の御主と云ふ貴い御身を有ちながら、非常な困苦缺乏の中にお生れ遊ばした。貧しい職人の妻を母として、寒い風のひう〳〵と吹き荒む洞穴の中に生れ、極く粗末な荒くれた布片に卷まれ、馬槽の中に硬い藁を褥として臥かされ給ひ、最先きに騙けつけて拜みに參つたものは、ベトレヘム郊外の貧しい牧者等でした。御成長の後も、貧乏は相變らず御身を離れません。貧しい職人の徒弟として、毎日〳〵額に汗を流して働き、纔に其日〳〵の露の命を繋ぐと云ふほどの暮をなさいました。

身は全能の天主の御子にて在せば、榮耀を極め、榮華を爲盡して、世を渡ることも叶ひ給うたのに、態々斯うした憐れむべき貧乏の中にお生れ遊ばしたのは、何の爲でムいましたでせう。是れ貧乏が多くの功を積むの機となるものぞ、と云ふことを我々に敎へる爲ではありませんでしたらうか。實に貧乏は苦しいものである。然し天主樣に對し、ぢつと目を瞑つてその苦しい所を堪へ忍ぶならば、罪の償ひとなり、大なる功ともなるのみならず、亦德を修めるにも助となる。貧乏な人は現世の財寶に心を繫がれないから、容易に眼を天に注ぎ、天の財寶を望むことが出來る。慾に縛られるのは餘つぽど危險であるが、貧乏だと、そんな危險が少いから却て安全である、得る所も多いのであります。そこで皆さんがもし豊な生活をして居られぬ、時としては衣食にさへ困ることがある、毎日〳〵額に汗して働かなければ、御飯が食べられない、と云ふほどでムいましても、決して天主樣を怨んだり、人を咎めたりせずに、却て「自分は是で御子樣に似て來たのだ」と思つて氣を取直さねばなりません。自分の家族が豊でない、自分の住宅がむさくろしいとしても、然し天主の御子はベトレヘムの馬屋にさへお生れ遊ばした、その馬槽の中から我々の救贖に取掛りなさつたのである、と云ふことを思ひ出しなさいましたら、何んな貧乏でも快く堪へ忍んで行くことが出來ないはずはありますまい。

(4)—身分は貴く、生活は豊に、財産は有り餘るほど持つて居る御方も、何うぞ馬屋の前に入らして

下さい。イエズス様は皆さんにも仰しやることがあります。何かの考へを起させよう、決心を勸めようと望んで居られるのであります。

もし皆さんが現世の財寶に心を眩惑はされ、非常な熱心を以て、傍目も振らずに之を搜し求め、之を以て自分の何よりの幸福でもあるかの樣に考へていらつしやるならば、何うぞこの馬屋の中の御子樣をつく〴〵とお眺め下さい。御子樣は人々の熱心に搜し求める財寶を輕んじて、こんな甚い貧乏の中に生れ、以て人々の財寶熱を冷し、迷ひの夢を破らうとして下さるのであります。

もし實際財寶を溢らして居られるならば、この馬屋のイエズス樣の御手本を打眺め、自分も財寶に心を奪はれないやう、其財寶に供ひ來る儚い名譽や、良からぬ快樂に引かれないやうにし、財寶も快樂もほんの一瞬間のもので、決して人を幸福ならしめる所以のものではない、と云ふことを覺らなければなりません。馬槽の中に斯う云ふ憐れな態をしてお生れになつたイエズス樣をよく〳〵打眺めて、心を財寶より引離すと共に、身は天地萬物の御主にて在しながら、我々の爲に斯くまで貧乏して下さつたイエズス樣のことを思つて、自分も貧乏な人を愛し、出來るだけ之を憐み助けるやうにせねばなりません。

約めて申しますると、老人も靑年も、富者も貧民も、義者も罪人も殘らず來りて、この馬屋の前に拜跪き、その幼いお體の中に包まれ給へる神の御稜威を禮拜し、我々の爲に斯くまで淺ましい御姿になつてお生れ下さつた有難い御芳志を謝し、腹の底からその驚くべき愛に感心して、一心にお愛し申すやうにせねばなりません。

聖ベルナルドが御降誕の夜半にミサを執行つて居られますと、丁度聖體奉擧の時、パンの形色が割れて、その中に幼きイエズス樣の御姿が顯はれました。ベルナルドは非常に感動し、ダウイドが「主は大にして非常に恐るべく在す」と云つた語を倒にして、「主は小くならせ給ひて、非常に愛すべく在す」と叫ばれた。然らば何方も今からこの一ケ月の間は、毎日の如く馬屋の前に御參詣なすつて下さい。もし職務の都合上、毎日參詣すること出來なければ、切めては自分の心だけなりとも馬屋の方へ馳せて、イエズス樣を伏拜み、其日〳〵の祈禱や勞働や苦痛やをば、守護の天使に賴んでイエズス樣の御足下に獻げることに致しなさい。さすれば、イエズス樣もまた必ず皆さんに豐な祝福を與へ、聖寵を惠み給ふに相違ありません。

新年

（一）歲の暮

今年も餘す所僅かに三日、いよ〳〵越し方を思ひ廻らし、來年の爲に新しい計畫を立つべき時とな

りました。越し方を思ひ廻らして、我々の頭に浮べねばならないのは、

(1)—此一年間に天主様から戴いた數々の聖恩であります— 商人が年の暮に棚おろし勘定をやる時は、利益は一錢の利益でも、損害はまた一錢の損害までも殘らず計算に載せる様に、我々も此一ケ年間に天主様から戴いた聖恩は大にせよ、小にせよ、殘らず勘定して見なければなりません。

今日まで無事に生存へて來たのが先づ何よりの聖恩であります。春の花、夏の雨、秋の實、冬の雪、日が照る、月が冴える、鳥が鳴くなど、すべて目に樂しく、耳に嬉しく、心に愉快なものを今年も相變らず天主様から戴きました。朋友の親切、優しい語、愛情の籠つた書面なども、やはり天主様の御惠でありました。家庭にあつては夫の情、妻の愛、親兄弟の慈愛、子女の孝行、是また天主様の聖恩ではなかつたでせうか。

もしそれ病氣を全快さして戴いた、危難に臨んだ時不思議にも遁れることが出來た、長らく願つて居た所を與へられたと云ふが如きは、猶更ら大きな聖恩であります。

其他、今年中に天主様の御招きを蒙つた御方もありませう、惡い習癖を有つて居たのに、夫を改めるやうに、危い關係を結んで居たのに、夫を斷つやうに、情慾に曳かされ、罪惡の奴隷となつて居たのに、其綱を切つて棄てるやうに、御招きを蒙つた御方、舊くからの罪を振り棄て、心を悛めて、久しく遠かつて居た告白場に拜跪き、長らく死んで居た靈魂に氣息を吹き返さすやうに、御招きを蒙つた御方も澤山ございませう。默想會の御蔭で、說教を聽いた序に、婚姻を結んだ折に、惡魔を捨て、天主様の方に立戻り、從來の不熱心の態度を改めて、敬虔の道に分け入ることになつたとか、洗禮を受け、初聖體を領け、堅振を授かつて、一方ならぬ聖寵を蒙つたとか云ふやうな御方もあるでありませう。何ぞ其等の聖恩を一々思ひ出して戴きたい、思ひ出したばかりでは足りません。其等の聖恩は皆天主様の慈愛深い御手によつて與へられたのですから、思ひ出しては、篤く〳〵感謝しなければなりません。

今一つ忘れてならないことは、此一年中に試煉に遭はされたことであります。軍人は年老いてからでも、自分が戰場で勇戰奮鬪したことを始終物語りたがるものであります。水夫は荒い海を渡り、山のやうな浪と戰ひ、猛り狂ふ大風と戰ひ、篠つく雨と戰つたことを何時になつても忘れず、よく物語つて居ます。然らば皆さんもイエズス様の兵士として惡魔と戰ひ、浮世の海を航海する水夫として、隨分様々な誘惑の嵐とも戰はれたでございませうから、夫を思ひ出して下さい。それを思ひ出すに付けて、自分は果して勇ましく戰ひましたか、おめ〳〵と敵に背を見せて逃げ出したことはないでせうか。誘に遭ひ、病に取付かれ、災難に遭ひ、人に侮られ、世に棄てられ、悲しい涙を零した時に、力を落さず、若情を言はず、十字架を打眺め、ぢつと唇を嚙み締めても堪へ忍びましたでせうか。或は又戰を恐れ、誘惑に打負け、災難に悲哀に力を落して、自分の務までも怠るやうなことはありませんでし

たか。思ひ出して、夫れ〴〵に感謝すべきは感謝し、胸を打つて赦を願ふべきは赦を願ふやうにせねばなりません。

終に思ひ出すにも思ひ出し難い、氣持の惡い、顏を赤めねばならぬ罪、その罪のことも忘れてはなりません。怠りて、懶けて自分の務を盡さなかつたことや、天主樣の御掟を破つたことや、內に入つては柔和を失ひ、勘忍を破り、愛を缺かしたこか、外に出ては、世を憚り恐れた、嘘を付いた、人を誹つた、惡言を吐いたとか、我身に就いては、祈禱を怠りた、ミサ聖祭に參與らなかつた、告白や聖體に遠かつた、邪淫を犯した、傲慢を出したこか、其等の罪を思ひ起して、深くイエズス樣の尊前に謙遜り、胸を打つて赦を請はねばなりません。

斯の如く過ぎ去つた一ケ年に對しましては、受けたる聖恩を思ひ出して之を感謝すると共に、犯したる罪を思ひ浮べて、天主樣の御憐を願はなければなりませんが、今度來るべき、

(2)—**新年に對しては如何なる心掛であらねばなりますまいか**—「一日の計は晨にあり、一年の計は元日にあり」と云ふことですから、年の始めに當つて、ちやんと志を定めて置くのは大切なこことであります。

子供が生れた時、先づ父母の頭に浮ぶのは「此兒が何んなものになるだらうか、偉い人物になるであらうか、人並の人間で畢るのだらうか、父の喜びとなるであらうか、母の肝燒こなりはすまいか、聖人こなつて天に樂むことであらうか、惡人となつて地獄に苦むのではあるまいか」こ云ふ思ひであります。然しその將來は何とも判斷がつきませんから、親たるものは自分の力の及ぶ限り、善い兒になるように仕付けやうといたします。

今、此の新に生れ出づべき年の始めに當りましても夫れと同じで、將來が如何にも氣にかゝります。果して幸福な年であらうか、不運極まる年ではあるまいか、何を我々に持つて來て與れるだらうか、健康であらうか、病氣ではあるまいか、成功であらうか、失敗ではあるまいか、歡喜であらうか、悲哀ではあるまいか、それは全く天主樣の思召次第で、我々にはさつぱり分りませんが、然し我々の方で出來るだけの力を盡し、幸不幸の運命を掌にし給ふ天主樣に縋つて、成るべく幸なる運命を與へて下さるやう、お願ひせねばなりません。然しながら天主樣から幸なる運命を與へて戴くが爲には、天主樣の聖意に適ふやうに努めなければなりません。天主樣の聖意にさへ適つて居るならば、きつと靈魂上は勿論、肉身上にまでも幸福を與へられます。然らば何うして天主樣の聖意に適ふここが出來ますでせうか。イエズス樣は仰しやいました、「汝等先づ神の國と其義とを求めよ」こ。ですから先づ靈魂の上に眼を注ぎ、天主樣のここを思ひ、天國を思ひ、靈魂を汚さないやう、天主樣の御胸を痛めないやう、天國を取失はないやうに力めましたならば、肉身の上にも、靈魂の上にも、必ず豐なる祝福を添うすることが出來ます……。そこで何人に致しましても、何はさて措き、靈魂の世話を第一にすると云ふ氣になつて下さらねばなりません。

取分け今日の世智辛い世の中を渡つて行くが爲に、夜を日に繼いで、いそ〳〵と立働いて居られる御方には、月日の經つのが矢のやうに速い、昨日こそお正月を祝つたやうであつたが、今日はもうお雜煮を食べなければならぬかと思はれるほどでありませう。して一年〳〵と年月の經てば經つほど墓に近接いて居るのですけれども、毎日の生計に追はれて、夫れには些しも氣が付かないのであります。何うぞ舊年の暮れ、新年の曉に自分の生命の次第に縮まつて來て居ることを思つて、浮世の事物に捲き込まれないやう、肉身を靈魂よりも、現世を天國よりも、今の生命を永遠の生命よりも、妻子を天主樣よりも大事にするやうなことがないやうに、篤と決心なさらねばなりません。

何の不自由もなく、金はあり、人には敬はれ、面白く樂しく暮して居る人が爲いますならば、何うぞイエズス樣が茨を冠り、十字架を擔いで世を渡り、天に昇つて始めて大なる光榮を享けられたことを思つて下さい。我身に不自由がなければ、切めては人の不自由を救つてやり、我身に樂が蒙らるれば、責めては食べも得ず、飲みも得ずに居る哀れな人を助け、慈善業を以て天國の光榮を求めるやう、お努め下さらねばなりません。

終に、貧乏の爲に、病氣の爲に、何かの災難の爲に此の一年中を泣き明し、泣き暮して來たお方になりますと、來年は何うであらう、此の貧乏、此病氣、此災難を遁れること出來れば結構であるが、却つて一層甚い目に遭ひはしないだらうかと、一方ならず心配して居られますでせう。然れども忘れてはなりません、我々の爲に何よりも恐るべきものは罪である、罪を以て天主樣に離れることである、天主樣に離れて地獄へ墮落することであります。現世の災禍の如きは、却つて天主樣に近づく原因となり、功を立てる機ともなり、未來の幸福の種子ともなるのであります。そこで此の舊年の暮、新年の初に當りまして、成るべくならば、そんな禍を遁して戴くやうにお願ひするのは可いが、然し思召ならば、一層勇を振つて之を堪へ忍ぶ、と云ふ決心になつて欲しいものであります。

（二）新年所感

明けましてお芽出度うゴいます。世界に祝福を與へんが爲め、態々御降誕あそばしたイエズス樣が、この新年の初めに當りまして、皆さんに潤澤な祝福を雨らし下さらんことを、私は偏に希望いたす次第であります。さて、

(1)—過ぎ去つた一年間を振り顧つて見ますと、第一に我々の胸に浮び出るのは感謝の情であります。天主樣が日々數限りもなき御惠を與へ、情篤き御手を伸ばして、始終我々を保護して下さいましたことを思ひましては、之を感謝せずに居られません。恩を受けて感謝するのは人の人たる道であります。其上「舊恩を感謝するのは新恩を蒙る道」ですから、我々もそれによつて大に得る所がある譯であります。無論、我々は毎日〳〵淺からぬ御惠を浴びて居るのですから、また毎日〳〵感謝して

居なければならぬのですけれども、今日の如く、舊年を送り新年を迎へた際には、いよ〳〵腹の底から感謝の意を述べるのは、理の當然でムいませう。

實に信仰の眼をクワッと見開いて御覽なさい。新に年を重ねると云ふのは、今まで戴いた數々の御恩に更に新な御惠を加へることではムいませんか。去る一年中、天主樣は靈魂上にも肉身上にも幾れほどの御惠をお與へ下さいましたか。誰かその御惠の數を一々計算し得るものがムいませう。一年三百六十五日、一日として、否な一分間として、御惠を戴かない時がありましたでせうか。

(2)—先づ肉體上に忝うした御惠を數へて見ませう、若し天主樣が時々刻々我々の生命を存へさして下さいませんでしたら、到底この新年を見ることは出來なかつたでムいませう。唯今斯うして生きて居るのは、唯今斯うして呼吸して居るのは、唯今斯うして何の差障もなく、至極壯健に存へて居るのは、全く天主樣の御惠に由るのぢやムいませんか。誰でも斯んな御惠を忝うした譯ではありません。昨年の元旦を迎へた人、我々と同じ年輩、否、我々よりも若い、健な人で、早や歸らぬ旅に就いたお方も寡くはありますまい。たとへ生存へては居ても、病に罹つたり、憂苦に沈んだり、事業に失敗し、親に死なれ、子供に先立たれたりした人も幾人あるでムいませうか。我々こそ天主樣の御罰を蒙るべき筈の身でありながら、そんな辛い目に遭ひませんでした。體は壯健で、風一つ引いた事がない、妻子の身にも、親兄弟の上にも何の差障もありませんでした。商業も可なり繁昌しました。お金も何うやら斯うやら儲かりました。計畫した事業は甘く運びました。一口に申しますと、何一つ禍らしい禍には遭はないで、むしろ色々の幸福を蒙りました。是は運の廻り合せが良かつたからでもなければ、自分が賢く立廻はつたからでもない、人から親切に世話して戴いた爲めでもありません。全く天主樣の有難い御計らひによつて然るのでありまして、十分に感謝しなければならぬ所であります。

若しや災難に罹つたお方があると致しても、身は病に惱まされ、事業は失敗し、親を失ひ、子に先立たれたと云ふお方があると致しても、夫れだけでは不幸とは申されません。天主樣は些しも私の爲を計つて下さらない等と夢にも思はず、却つて天主樣が其等の十字架を自分にお與へになる時、其時の有難い御志を思つて、やはり感謝しなければなりません。我々の益を思ひ給へばこそ、そんな災難にも遭はして下さつたのですから、寧ろ中心より感謝するが當然でございませう。

一体肉身と靈魂と、過ぎ易き現世と、永遠窮まりなき後世とは、到底比べられたものではありません。して天主樣は、現世の謂ゆる幸福なり、禍殃なりを、我々にお遣しになるに付けて、第一に思ひ給ふのは靈魂の上、後の世の救靈であります。所で肉身上の幸福だとか、現世の財寶だとかは、度々靈魂の救、後世の幸福に百の害はあつても一の益も無いことがあります。で時としては其んなものを剝ぎ取つて、病に罹らしたり、失敗を招かしたり、貧乏に取り付かれさしたりしなさる事がありますが、夫れは我々を深く愛し給ふ所から、そんなに御計らひ下さるのであります。つまり夫によつて、

我々に心を改めさせ、惡の道より立歸らせ、犯したる罪を償はせ、ますゝ〳〵德を研かせて、他日天國に於て、大なる幸福を蒙らせたいと云ふ有難い思召から、そんなにお計らひ下さるので、苦情を陳べる所か、寧ろ大に感謝しなければならぬのであります。

(3)—斯の如く、肉身上を見ても、澤山の恩惠を戴いて居ますが、靈魂上はなほ更です。この一ケ年の中に一の大罪も犯さないで、忠實に天主樣にお事へ申して來たさするならば、それは何よりの幸福で、十分人に羨まれても可い譯でムいますが、然し夫れこそ全く天主樣の御蔭、天主樣がその全能を以て幾多の危險の中に保護して下さつたお蔭、或は種々の災難を降して、御自分に遠からない樣にして下さつた御蔭と申すより外はありますまい。若し一寸でも御手を引き給ふ樣なことでもありましたならば、幾度躓いて倒れたか分らぬのであります。でムいますから、聖アウグスチヌスと共に、「惡いことをしなかつたのは、天主樣の御惠だ」と思ひまして、篤く感謝しなければなりません。

猶この一年中に罪を犯しは犯したが、然し痛悔して赦を蒙ることが出來た人は、實に言ふべからざる御惠を忝うした譯であります。罪惡の巷に彷徨つたまゝ、見棄てられる人は多いのに、自分だけはそれを免れた、天主樣は自分が地獄の穴に片足をさし込んで居る時に、死なして下さらないで、反對に情をお掛け下さいました。罪惡と手を切つて、立派に告白をして、救靈の道に後戻らして下さいました。實に我々が誠意より罪を痛悔する氣になつたのは、邪慾に打克つこと出來たのは、長くからの惡い辯を取つて棄てることと出來たのは、全く天主樣の御惠ではムいませんか。其爲に天主樣から賜はつた數々の靈光、御勸め、良心の責などを思つて見なさい。自分が飽まで罪に嚙り付き、目を閉ぢ、耳を塞いで聽き入れないと見て、天主樣は災難をお送り下さいました。病苦をお與へ下さいました。失敗にも遭はして下さいました。斯くして塞がつて居た耳を開き、眠つて居た目を醒さして下さつたのであります。若しそんな災難に遭はなかつたら、死ぬ時までも相變らず罪惡の中に高鼾をかいて居るかも計られぬのであります。何れにせよ、天主樣の御蔭で、善の道へ立歸ることが出來たのですから、一心に御禮を申上げねばなりはせん。

不幸にして今なほ罪の中に沈んで居るとすれば、夫れこそ天主樣の限りなき御憐を蒙つて居るのですから、いよ〳〵以て感謝しなければなりません。天主樣の仇敵であるのに、まだ活かして置いて下さる。早く片付けて了ひなさるが當然ですのに、未だ活かして置いて下さる。もう疾くに地獄へ突き込まれる筈である、惡魔は始終天主樣に向つて、「何時此者を地獄へ引張り込みませうか。未だですか、もう可ささうなものではありませんか」と叫んで止まないけれども、天主樣はお許しにならない。未だ〳〵堪忍して立歸るのを竢つて居て下さる。「神は汝等を憐む爲に竢ち給ふ」(五〇ノ一八)、如何にも有難い御惠である。一日も早く其罪の中を拔け出て、この大なる御惠に應ずるやうに務めねばならぬぢやありませんか。

(4)—斯の如く靈魂上、肉身上、幸福を忝うしたにせよ、禍殃を蒙つたにせよ、罪を犯したにせよ、善に止ることが出來たにせよ、何れにしても天主樣の厚い〳〵御惠を蒙つて居ることだけは間違ひないのですから、一心に感謝しなければならぬ。然し一方からは、その有難い御惠に對して、如何なる不都合を數重ねたかと思ひ、痛悔の胸を打つて赦を願はねばなりません。天主樣は恩に恩を加へ、惠に惠を重ねて、我々の心を引付け、腹の底から愛されたい、忠實に奉仕へて貰ひたいと思召し給うたのに、我々は始終反對に善に酬ゆるに惡を以てしました、德に報ずるに仇を以てしました。この一年間の怠慢を、不忠實を、忘恩の沙汰を數へて見なさい、身體が健全だから、財產が豊富だから、生命が延びたからとて、夫れを徒らに費したぢやありませんか。倒に惡い事をし、天主樣に背く爲に使つたぢやありませんか。有難い救靈の方法を踏み倒し、大切な得がたい聖寵を輕んじて、投棄て、了つたことも幾何でムいましたでせう。天主樣の御慈愛と、我々の惡意とを双方突き合せて見たならば、誰か顏を赤めずに居られませう。深く耻ぢ、大に悲んで、偏に赦を願はずに居られますでせうか。

(5)—然し過去の失敗を詫びると共に、亦來年の計もして置かねばなりません。我々がこの新年を見ること出來ましたのは、夫ればかりでも天主樣の大なる御惠である、何うにかして我々の心を御自分に從はせよう、罪を離れさせ、善に親しませよう、と云ふ天主樣の有難い思召から賜はつた一方ならぬ御惠であります。で之を善く利用して、過去に失つた所を償ひ、前途に迫つて來る危險を豫防し、以て永遠の滅亡を避けるだけの工夫を廻して置く、と云ふ堅い決心にならなければなりません。生命の短くして、而かも賴にされないことを思つたら、そんな決心になるのも決して困難ではありますまい。

(6)—何方も自分の生命の短いことを思つて見なさい、「お芽出度う！お芽出度う！」と祝つたお正月は昨日の樣でしたが、早や今日は再びそのお芽出度うを繰り返さねばならぬ樣になりました。「光陰は矢の如し」と申しますけれども、なか〳〵矢どころの話ではありません。一年、十二月、三百六十五日、年の初めに立つて向ふを遙に眺める時は、隨分長い樣にありますが、然し月日と云ふものは、夜となく晝となく、一分間の淀みもなしに、絕えず流れ〳〵て居るのですから、その長い月日も何時の間にか流れ去つて了ひます。して月日が經てば經つほど、我々の生命も長く延びるのならば結構ですけれども、實は倒に短くなつて來るのです、謂はゞ我々は日々死んで行つて居るのであります。過ぎ去つた年月だけは、もう死んで了ひました。是れからも毎日〳〵死んで行く、決して後へ引返す樣なことはない。だから年毎に、月毎に、日毎に前へ進んで居る、生きて行くと思つては、大きな大間違ひで、實は死んで行くのだ、一年は一年と、一ケ月は一ケ月と、一日は一日と、生きる時日が少くなる、我々の生命が縮まる、死が近づいて來る、墓が迫つて來る、然うです、最期の時になつてから、辛つと死がやつて來るのではなく、此方から進んで行つた生命と、向ふから近づいて來た死とが、

途中でばつたり行遇ひ、生命の歩みが止つた、死に途を譲つた、と申した方が正確であります。

是迄の日日が矢よりも早く飛び去りました如く、後に殘つた生命もやはり同樣に飛び去るのであります。然るに多くの人は將來にまだ長い〳〵年月でも殘つて居るかの樣に安心して、一向後の用意を致さうとはしません。でも終點に到着してから、背後を振り返つて見ると、その過ぎ去つた生命はほんの陰影の如く、風の如きものだと云ふことが感付かれるで御座いませう。聖アウグスチヌスも申しました。「未だ過ぎない中は、この短い生命でも隨分と長い樣に見えるものだが、過ぎ去つて了つてから之を眺めると、それは如何にも短いものである」と。

然したゞ月日の過ぎるのが早いだけならば、何でもムいませんですけれども、その短くて瞬く間に過ぎ去る餘りの生命も、一向富にならないのですから堪りません。昨年のお正月に我々と共に「お芽出度う」と言換はしたが、もう本年は冷い墓の中に眠つて居る人も幾人ムいますか。然うでせう、朋友の中に、親戚の中に、死の手に攫ツ浚はれて、世界から消え失せた人は尠くありますまい。彼人等にしても、眞逆、昨年中に死なうとは思つて居なかつたでせうのに、やはり彼の樣な始末になりました。昨年中、彼の人等にあつた事が、本年中我々の身に遣つて來ないでせうか。未だ今日では夢にもそんな事を思つて居ますまいが、然し天主樣の方では、ちやんと本年を以て最終の年だとお定めになつて居給ふのではありますまいか。

(7)—「新年早々から、死ぬの何のと、其んな緣喜の惡いことは止して戴きませう」、と仰有るお方もムいませう。私だつて好んでこんな事を申上げるんぢやありません。皆さんが末長く鶴亀の齡を重ねられんことは、私の希望に堪へない所であります。然しながら當にならぬ事を當にして、安心して居ても仕方が無いぢやありませんか。惡魔が人祖を罪に誘うた時は、「いや決して死にはしませんよ」と巧に嘘を吐きました。人祖は天主樣の御言を信じないで、却つて惡魔の僞言を信じました。今日でも惡魔は同じ筆法を以て我々を欺さうとします、「なあに未だ死にはせぬ、改心はもつと年を取つて、事業に成功し、子供でも成人してから徐り出來るよ、そんなに狼狽へるに及ばぬ」と曰はれて見ると、なるほど未だ前途は遠い、二年や五年の中に死にさうにもない、で全く安心して了つて、一向悔い悛めようとも致しません、善を行はうとも思ひませんで、相變らず罪の中に溺れて居ると、突然死がやつて來る、千年までも萬年までも生き存へることが出來るかの如く思つて、何の準備もして居ないのに、突然死の手に取摑まれて、哀れな最期を遂げなければならぬ事になるのであります。

(7)—然らば如何なる決心を爲すべきでございませうか。歲月は天主樣の賜物である、天主樣は歲月の上に全權を握つて居て、聖意のまゝに、何時でも之を回收げ得給ふのです。その上、この歲月は靈魂の救を全うさせる爲にこそ我々にお與へ下さるのですから、是非とも之を有益に、天主樣の思召に從つて使用しなければならぬ。是まで無駄使をして居たならば、今年からは一層大切に之を使

用して、その失つた所を補はなければならぬ、今の生命と共に過ぎ去る所のものを輕んじ、何時までも過ぎ去る憂のない永遠の寶に注目する、死と云ふことを何時も忘れない、自分の現世に在るのは樂しい、愉快な月日を送る爲ではなく、幸福なる死を準備する爲だ、と云ふことを忘れない樣にせねばなりません。

(8)—若し我々が信仰を有つて居るならば、舊年の終つて新年の始まる今日に當つて、斯ふ云ふ眞面目な考が自づと浮み出るはずではムいませんか。左もなくして、相變らず冷淡、不熱心、罪惡の中に眠り込んで居て、突然死の使に呼び醒されてから、何んぼ狼狽へ騒いでも追つ付く話ではありますまい。

でムいますから、我々はこの年の始めに當つて、先づ天主樣の尊前に謙り、痛悔の胸を打ちつゝ、舊年中、天主樣に忝うした月日を惡く使ひ、その御恩に報ゆるに仇を以てし、數々の罪を犯し、忘恩の沙汰に出たことを深く悔い悲んで御赦を願ひませう。

次に我々の罪を今日まで忍耐し、むしろ惡に報ゆるに善を以てして下さつた天主樣の御憐を感謝しませう。そして何時までも恩に叛いてはなりませんから、この新年こそ或は最後の年であるかも知れぬと思ひ、年と共に改まつて新らしい生活を始めることに致しませう。我々の生き存へた歳月は皆天主樣の正義の帳簿に記入されてあり、夫に就て、一度は綿密な御糺を受けなければならぬ。のみならず、餘んの生命は全く天主樣の御手の中にあつて、我々の勝手になるのはたゞ今の短い、過ぎ易い時だけですから、務めて之を有益に利用しませう。急がなければ逃げて了ひます、飛び去つて了ひますから、油斷をしてはなりません。

終に天主樣から戴いた御惠を感謝すると共に、この新に迎へる年にも、我々を扶け守り、何處に於ても、我々を離れ給はずして、御自分の御光榮の爲、我々の救靈の爲に働かして下さいます樣、祈らなければなりません。

斯んな樣に元旦から天主樣に一身を献げるのは、早過ぎると思はれませうか。イエズス樣が今日我々にお與へ下さる御手本を思ひなさい。我々の爲に如何にも哀れな嬰兒とお生れ下さいました上に、八日目の今日には、早くも割禮を受け、鮮血を滴らし、さうした上で、イエズスと云ふ名を付けられなさいました。イエズスとは「救主」と云ふ意味で、今日から人を救ふ爲に苦しい目に遭つて下さつたのであります。斯うしてイエズス樣が早くも我々の爲にお苦み下さつたことを思ひ、我身はイエズス樣の爲、我が救靈の爲に何の辛いことをも堪へようとしないのを考へて見なさい。如何にも耻しい次第ではムいませんか。

皆さん、何うぞイエズス樣に祈りませう。我々の心を照らして、罪の憎むべく、善の愛すべきを悟らして下さいます樣、人類の救靈を思つて燃え立ち給へるその熱心を我々にも與へ、その我々の爲に御計畫になつて居られる所によく協力させ、冷淡、無關心をすばりと切り棄てさせ、いよ〳〵罪の途を去

つて、勇ましく德の坂を攀ぢ登らして下さいます樣、熱心こめて祈りませう。さう致しましたら、この新年は我々の爲に芽出度づくしの年、改心の年、救靈の年、永遠に祝すべき年ともなることは疑ひを容れないのであります。

（三）新年

千九百三十二年は過ぎ去つて新に千九百三十三年を迎へる事になりました。我々は今舊年と新年との境に立ちまして、暫く過ぎ去つた舊年を顧みると共に、亦來るべき新年をも打眺めることに致しませう。

(1)—過去—過ぎ去つた千九百三十二年は我々の爲に幸福な年でありましたか、不幸な年でありましたか……誰しも元旦に當りましては「何うぞ此年が芽出度い、幸福な年であつて欲しい」と願はぬ人はなかつたでせうが、果してその願ひ通りになりましたか。一體、芽出度いとか、芽出度くないとか、幸であるとか、不幸であるとか云ふのは、我々が望みを成げると成げないと、目的を達すると達しないとによつて定まるのである。隨つて金滿家になりたいと志して居た人ならば、お金をたんと儲けた年はそれこそ芽出度い年である、快樂を冀つて居た人ならば、思ふ存分に樂むことが出來た年は幸福な年である、永くからの病人の爲には、すつかり全快すること出來たらば、夫れこそ何よりも仕合せな年だつたと云ふでムいませう。たゞ善を修め德を磨いて天國へ昇りたいと志して居る我々基督信者の爲には、多く善を修め得た年、遠く天國の道を進み得た年こそ、眞に芽出度い年である、幸福な年である、と曰はなければなりません。

皆さんの中には、この一年間、身體は健かで、事業は思ひ通りに運び、十分金儲けも出來た、身代は見る〳〵善くなつて來た、何の失敗もしなかつた、悲い、苦い目に一度も遭はなかつたと云ふ御方もムいませう。それで芽出度い年でムいましたでせうか。或は然う思つて喜んでいらつしやる御方もあるでムいませうが、然し去る一年間に、前年よりも一層善い人になつた、一層德を修めた、功德を積んだと云ふ覺がないならば、幾ら身體の上に、財產の上に得る所があつたにしても、私は決してそれを幸福な年だとは思ひません。却つて瞬く間に過ぎ去るものだけを與へられて、永遠に殘るものは少しも與へられなかつたのを見ると、慶ぶよりは寧ろ悲むべきではあるまいかと考へます。

其反對にたとへこの一年間に親を喪ひ、夫を喪ひ、婦を失ひ、可愛い子に先立たれたにせよ、たとへ病に惱み、事業には失敗したにせよ、もし前年よりも天主樣に近づく事が出來たならば、一層信心になり、一層忍耐强くなり、一層謙遜になり、一層天主樣を愛し、人を愛する樣になりましたならば、それこそ幸福な年であつたのです、悲むよりはむしろ慶んで、天主樣に感謝するこそ然るべきでありませう。

なほこの一年間に、天主様から戴いた聖寵は數限りもなかつたのですが、さて夫れを何んなに使用しましたか。忠實に使用して益々熱心な、少しの申分もない信者になりましたか、却つて反對に無駄使をして、少しの進歩する所もなかつたのじやありませんか。進歩しないだけならば可いが、天主様を忘れ、御光榮の爲には何一つ爲さないで、天主様の思召よりも手前勝手を大切にし、邪な慾を天主様の御誡よりも重んじ、色々と罪を犯して、前よりも一層惡くなつたことはありますまいか。果してさうだとすれば、胸を打つて自分の不足を、怠慢を、罪を御詫びしなければなりません。

(2)—**新年**—千九百三十二年はこんな塩梅に過ぎ去りまして、今日から愈々千九百三十三年となりますが、さてこの新年は我々の爲に芽出度い、幸ひな年でありませうか、心配もない、悲哀もない、禍もない年でムいませうか……望ましいことですが、然し夫れは我々の勝手になることでない、我々は只今その初を見て居るが、その終を見ることは出來るや否や、夫れすら當になりません、昨年の新年に「めでたい〳〵」と祝ひ慶んだ人で、今日まで辿りつき得なかつた人も少くはありますまい……一年十二ケ月三百六十五日、長いやうで又短いものであります。「門松や冥土の旅の一里塚！」でムいますから、私が第一に皆さんに希ひたいのは、常に最期の準備をしてお出になることであります。善い最期を祈るのは、取りも直さず幸福を冀ふ譯でムいませう。

其次には何をお願ひしませうか。富をお願ひしませうか……然し富と云ふものは人に滿足を與へないで、倒に心配を増すのみであります……然らば名譽をお願ひしませうか。然し名譽は身の飾りと云はんよりは、却つて苦しい重荷であります……然らば快樂は何うでせう……快樂は禍の基です、眞の幸福を害しはしても、決して益するものでない……。然らば何をお願ひしませうか……私が皆さんの上にお願ひ致したいのは、聖寵の財寶、天主様から與へられる善の譽、德の樂であります。

固より皆さんの身體の上に、財産の上に、商業の上に天主様の祝福の豊ならんことを願はないのではない、然しながら現世よりも後世、身體よりも靈魂ですから、私は先づそれを皆さんの爲にお願ひ致したいのであります。イエズス様も仰有つたでせう、「汝等先づ神の國とその義とを求めよ、然らば是等の物、皆汝等に加へらるべし」(マテオ六ノ三三)、して見ると靈魂上の幸福を冀ふのは、また肉身の上、財産の上にも幸福を求める所以であります。天使等は救主の御降誕を祝して、天主様には「御光榮」を冀ひ、人間には「平安」を祈りましたでせう。そこで我々が天主様と平安を保ち、決して不和になるやうなことがないやうに、他人とは勿論、各自の胸の中にも平安を保ち、罪を犯して心が擾れ騒ぐやうなことがないやうにして居るならば、身はたとへ無一文であつても、百萬の富を、全世界の快樂を擅にして居るよりは、一層幸福ではありませんでせうか。

今日は吾主御割禮の祝日であります。イエズス様は我々の救ひの爲め、生れて八日目になると、モイゼの律法に從ひ、割禮を受け、その貴い御血をお流しになりました。救靈を全うするには、天主様

の掟を忠實に守り、如何なる苦勞艱難をも厭ふべきでないと、お諭し下さつたのでありました。皆さんが、年の初よりそんな覺悟におなりなさいましたら、たゞ本年を幸福の中に送れるのみならず、また夫によつて窮りなき幸福の永遠をも準備することが出來るのじやございますまいか。

（四）吾主の御割禮

(1)—今日は吾主御割禮の祝日であります。割禮とは、男子が生れて八日目になると、罪を赦され、アブラハムの子孫、神の選民の一人に加へられたと云ふ印に、體の一局部に刄物を當て、血を流す宗教上の儀式を呼んだものであります。割禮は自宅に於て、父親が之を行ひ、然る後之に名を付けることになつて居ました。つまり割禮は今の洗禮の代を爲したものでございますから、ユデア人は非常に之を重んじ、割禮を受けない者は、人にして人にあらず、と言つて居た程であります。然し割禮は、罪を赦されて、アブラハムの子孫、神の選民になつたと言ふ印に行ふものでしたのに、キリスト樣の如く、神の第二位、世の救主、一點の罪も汚もない御方が何の爲めその割禮を受け、身に屈辱的な印章をつけ給うたのでございませう。他ではありません。割禮はモイゼの律法中でも極めて重要なものでしたから、たとへ自分には之を守る必要がないにせよ、なほ之を几帳面に守つて、掟を守れ、如何に窮屈であらうと、人に笑はれようと、嘲けられようと、守るべき掟は几帳面に守れ、果すべき務は正確に果せ、有名無實の信者になるなと、お諭し下さる爲でございました。

我々は兎角、天主の十誡、聖會の制令を重んじない、何とかして之を潜らうとします。輕い小な掟は、さう格別意に掛けるにも足らずとし、重い大きな掟になると、色々と口實を設けて遁れられるだけは遁れようとする傾向を持つて居る。是では何うして主の御跡を履んで居るとは思はれませう。幸ひ今日は年の初であります。たとへ今迄はそんなに不眞面目な傾向を持つて居たにせよ、年が改まると共に、心をも改めて、以後は必ず主の御掟を守る、大小、輕重の別なく、忠實に之を守ると決心したいものであります。

(2)—次に主が割禮を受け給うたのは、我々に靈的割禮、聖パウロの謂ゆる「手にて爲せるものに非ずして、肉身を取除く所のキリストの割禮」（コロサイ一一）を敎へんが爲でした。靈的割禮とは己に克ち、肉を制し、邪慾を殺すことを意味する、言ひ換へれば制慾に外ならぬのであります。

我々は墮落せるアダムの子孫として、內には傲慢に流れ、我儘氣儘に振舞ひたがる邪慾を持つて居る、外にはまた目、耳、口、鼻を樂ませ、何とかして正しい道を踏み外させよう、肉慾の奴隷になさうと、働いて止まない世俗や惡魔が控へて居る。油斷も隙もあつたものではない。是非とも之に靈的割禮の刄を加へ、その慾を制し、その敵を擊破らねばならぬのであります。

主は割禮を受けて、然る後イエズスと呼ばれ給うた。天も地も地獄までも膝を屈めざるを得ないと

云ふ程の至聖なる御名を戴かれたのであります。我々も靈的割禮を身に施し、制慾の人となつてこそ主の眞の弟子、眞の基督信者の名を忝こうし得る譯ではありますまいか。何うせ戰は免れ難い、肉を制して靈に從はせ、邪慾を壓倒して善を修め、德を研き、天晴れの基督信者こなるが爲には、我身に暴力を加へ、靈的割禮を施すの外はないのであります。

今、年の始めに當り、主の御鑑を仰ぎ視て、深く決心する所があらねばなりません。主は生れて僅に八日、早くも我身に刀物を當てられ、御血を流して我等の救贖に着手されました。我々も年の始より我肉に制慾の刀物を當て、よく五官を制し、身を取締り、邪慾を壓倒して、清く美しく行ひすますべく、務めようではムいませんか。

（五）耶蘇の至聖なる御名

(1)—イエズスと云ふ名は人が附けた名でなく、天主様が御自分でお附けになつた聖名であります。大天使ガブリエルは聖母マリアに「汝一子を生まん、其名を耶蘇と名くべし」（ルカ一ノ三一）こ明かに告げて置きました。天主様から出たものであるこすれば、そればかりでも如何に立派な御名であるかと云ふことは推して知られませう。其上イエズスとは救主と云ふ義である。この御名を口にする時は、我々の爲に生れ、十字架にかゝり、血を流し、死んで下さつた救主を自づこ想ひ起さずには居られません、隨つてこのイエズスの聖名ほど尊い御名はない。聖パウロは言つて居ます。「彼は神の貌に在して、神こ並ぶ事を盗とは思ひ給はざりしも、己を無きものこして奴隷の貌を取り、人に似たるものこなり、自ら謙つて死に至るまで、而かも十字架上の死に至るまで從へる者こなり給ひしなり。是故に神も亦之を最上に擧げて、賜ふに一切の名に優れる名を以てし給へり。卽ち耶蘇の御名に對しては、天上のもの、地上のもの、地獄のもの悉く膝を屈むべし云々」（ピリピ二ノ六以下）

あゝ實に耶蘇の御名ほど尊敬すべきものがムいますでせうか。天上の天使、地上の人類、地獄の惡魔、惡人までが膝を屈めて拜伏すと云ふのでせう。然らば我々信者、この聖名を以て救はれた我々カトリック信者は、如何に之を尊んで然るべきでムいませうか。

(2)—次にこの御名の他の意味を調べて見るこ、啻に之を尊敬するばかりでなく、また非常に之を有難かり、之に信賴する心が起るのであります。聖書には主の御名を稱して「汝の名は注がれたる油なり」こ云ふ一句があります。聖ベルナルドは之を解釋して「油は光となり、食物こなり、藥こもなる—耶蘇の御名もちやうごその通りで、之を說き擴めるこ、世を照す光こなり、之を思ふこ、心を養ふ食物となり、之に呼び賴むこ、魂の痛を和げる藥こもなる」こ申されて居ます。

（イ）—耶蘇の御名は光である—この御名によつて世界は照されました。この御名を以て眞の敎は弘布められ、世は之によつて眞の神を知り、天に昇るの道を知り、人の人たるの道を知ることが出來まし

た。この御名に照されて居る人と、未だ之に照されない人、即ち信者と未信者とを双方突き合せて御覽なさい。その知識と云ひ、考へと云ひ、言行と言ひ、その間に如何なる相違が御座いますでせうか……。夫と云ふのも一方は赫々たるこの御名の光に照されて歩いて居るのに、一方はまだ暗い闇路をとぼ〳〵と辿つて居るからであります。然し一つ御注意なさらねばならないことは、暗い闇路を辿つて居る人は、悪いことをしても、間違つたことをやつても、辯解が出來ます、盲者だから仕方もないのですが、然し白晝、赫々たる光に照されながら、曲つたことをする、暗い所を辿つて居る人にも劣つたことをするやうでは、全く辯解の途がありますまい。幸ひ皆さんはこの御名に照された御力でムいますから、暗いことをしないやう、聖パウロも仰しやつた如く、「暗の業を棄て、光の鎧を着け」何人の前に持ち出しても、決して恥かしくないだけの業をなす樣、お務めなさらねばなりません。

（ロ）―耶蘇の御名は食物である―心にこの御名を思ひますと、忽ち言ひ知れぬ喜びを覺え、精神が何となく爽快になります。口に之を誦へると、蜜のやうに甘味を感じ、耳に之を聽くと、美妙の音樂でも聽くかのやうな氣持がします。何故かと申しますと、イエズスとは救主と云ふ義、我々の爲に、我々を救はんが爲に死んで下さつた、我々を慰めんが爲に、聖體の中に籠り在す限りもなく愛すべき救主と云ふ義でせう。この御名を思ふ毎に、この聖名を誦へる毎に、救主のお忍び下さつた御受難、その我々に對し給ふ驚くべき愛を思ひ出すのですから、自然と賴母しい心が起ります。悲い目を見る、煩悶に惱まされる、災難に出遭するにしても、決して失望する氣遣ひがない。却つて耶蘇樣の爲に苦を忍ぶこと出來るのを嬉しく思ふに至るのであります。殉教者等が非常に責められ、無理無法に苦められても、一たびこの御名を口にすると、自分はこの御名の爲に苦められて居るのだと思ふと、忽ち云ひ知れぬ樂を覺えられたのは、之が爲であります。

然らば我々も平生この御名を心に思ひ、この御名を口に誦へ、この御名を耳に響かせねばならぬ。嬉しい時もこの御名を誦へ、悲しい時もこの御名を誦へ、幸福を蒙つては、この御名によつて感謝し、災難に見舞はれては、この御名によつてぢつと堪へ忍び、お惠が欲しければ、この御名を以て之を願ひ出る、と云ふ樣にしなければならぬのであります。

（八）―耶蘇の御名は藥である―罪の創を癒し、我々の靈魂を强める藥である。使徒等は耶蘇の御名を以て惡魔を逐ひ出し、跛者を立たせ、盲者を明かし、啞者を癒されるのでありました。

我々もこの御名を以て惡魔を逐出しませう、惡魔に誘はれる時、不幸にしてその惡魔に取附かれた時にでも、心からこの御名を誦へますと、容易にその惡魔を取倒すことが出來る、たとへ心の中に這入られて了つても、痛悔の心を以て之を誦へたら、惡魔は恐れて逃げ失せるのであります。

舊約のダウイドは一本の杖を以てゴリアトと云ふ巨漢と戰ひました。其時ゴリアトはダウイドを嘲つて、「お前は杖を以て立向ふか、俺を犬とでも思つてるのか」と申しました。ダウイドはそれに答へ

て、「お前は鎧を着、冑を被り、太刀を振つて戰ふのだが、自分は神様の御名を以て汝に立向ふのだ」と曰ひ、石を投げてそのゴリアトを見事に打仆しました。我々も惡魔と戰ふには、この拜むべき耶蘇の御名に縋るの外はありません。「地獄のものも膝を屈むべし」と云ふ強い〳〵御名ですから、ぢんなに惡魔の誘惑が激しからうと、少しも恐れる譯はありません。それに就てこんな話があります。

昔しアンチオキアの町にユスチナと云ふ信仰篤き處女が居ました。或る男が何とかして彼女を自分に懐けたいと思ひましたが、何うしても望を遂げることが出來ないので、一日魔法遣ひのチプリアヌスを訪れて「何うか私の望を遂げさして下さい」と賴みました、「それは何よりもお易いことです」と云つて、其男を眞暗い洞穴に案内し、魔法の杖を取つて地に投げますと、一個の恐ろしい惡魔が顯はれて來て、「何の御用です」と尋ねました。「ユスチナの方へ往つて、彼女がこの青年の望に從ふやうに勸めて貰ひたい、力もない、經驗もない一處女だ、手間も暇も要るまい」と云ひました。惡魔は早速飛んで行きまして、ユスチナの心に邪慾の火を煽り立てました。然しユスチナが直に十字架の印をして「イエズス、イエズス」と三たび誦へますと、惡魔は恐れて逃げ歸りました。チプリアヌスは怒つて「貴樣は駄目だ、地獄に歸つて處罰を受けるんだ」と云ひ、更に杖を投げて前のに倍する恐ろしい惡魔を呼び出しました。然し其惡魔もユスチナが十字架の印をして、三たび耶蘇の御名を誦へると、恐れて逃げ歸りました。チプリアヌスは氣も狂はんばかりになりまして、惡魔の頭のサタンを呼び出しました。サタンは忽ち良家の處女に化け、甘いことを云つて、ユスチナを欺しにかゝりました。然しユスチナは直ぐそれと悟り、又十字架の印をして「イエズス、イエズス、イエズス」と誦へました。サタンの先生ワナ〳〵と顫へて逃げ歸り、「どうして〳〵彼のユスチナが誦へる名に勝てるものは誰も居ないよ」とチプリアヌスに自白しました。「何に？貴樣はイエズスの名に敵することが出來ない？然らば俺を欺して居つたな、俺は今まで貴樣の名より強いものはないと思つて居たのだ。馬鹿〳〵しい、耶蘇の名を聽いて逃げ出す位なら、俺は今から其名を拜むんだ、決して貴樣には從はないよ」チプリアヌスは斯う云つて、早速魔法の書物を燒棄て、基督信者となり、後で司教の位階に昇り、ユスチナと一緒に捕へられて天晴な殉教を遂げました。

耶蘇の御名は斯んなに力強い、惡魔の頭でも逃げ出さずには居れない位である。我々が今日まで惡魔に負けたのは、全くこの御名を誦へず、之に信賴まなかつたからではありますまいか。是れからは屢々熱心に之を誦へませう。たとへ惡魔の擒となつて了つたにせよ、之によつて惡魔を逐ひ拂ひ、その擒の綱を切斷ることが出來る。たとへ心が盲者になつて了ひ、もう天主樣のことも、靈魂のことも、天國も地獄も見えなくなつて居るにしても、信賴の心を以てこの御名を誦へますと、クワッとその眼が明きます。たとへ聾者になつて、親の勸め、司祭、傳道士の戒も聽えなくなつて居る人でも、たとへ足蹇になつて、救靈の途は一歩も行けなくなつて居る人でも、この御名を誦へ、心より之により

縋るこ、其足は健かになり、其耳は立派な、聞分のよい耳こなることが出來るのであります。

で厶いますから、今よりはこの御名を恭しく誦へませう。耶蘇聖名の連禱は特に熱心を以て誦へませう。若しか惡魔の誘ひにでも遭ひましたならば、早速この御名を誦へて、その惡魔を逐つ拂ふことに致さうでは厶いませんか。

吾主の御公現

（一）博士等の發足

(1)—今日は吾主御公現の祝日であります。公現こは公に現れると言ふ意味で、イエズス樣が始めて異邦人に現はれなすつた、ユデア人ならざる異邦人、モイゼの律法を知らざる異邦人より、御降誕後久しからずして救主と認められ、禮拜され給うたことを記念するので、ユデア人から見て異邦人たりし我々、その異邦人の中より特に選まれて信仰の賜を忝うしてゐる我々に取つて、今日は特に意義深長なる祝日なのであります。

さてイエズス樣が御降誕になりました時、東國に常ならぬ不思議な星が顯れました。然るにその地方で、天文に通じ、國王の顧問にも備はる階級の學者—福音書の所謂「博士」等はその見なれぬ星を見て不思議に思つて居ると、是は救主がユデアに御降誕になつたしるしの星だ、往つて禮拜せよ、と言ふ天主樣の御諭が心に響きました。彼等は早速その聲に應じ、幾百里もの遠路をも厭はず、途に上りました。

(2)—彼等のこの從順、天主樣の御聲に從ふことの迅速さ、是れこそ我々の爲に又なき美鑑ではありませんか。その路は遠く、人烟稀少い荒野を亘り、野越え山越え、幾多の危險を踏み、非常な困難を冒して進まなければならぬのでしたが、それでも彼等は躊躇しません。

家族や友人等もそれには屹度反對を唱へ、引止めようとしたに相違ありません。不思議な星が見えたこ言ふばかりで、果して何處に、何んな方が生れたか、確と分りもしないのに、家を出で、國を去り、容易ならぬ幾百里もの冒險旅行に上るこは、阿呆らしいじやないか、往つても見付からなかつたら何うする？……見付かつても、期待せる程のものでなかつたら、徒らに人の物笑ひとなるばかりではないか、斯う言つて引留めようこしたに相違ないが、彼等は少しもそれに耳を假しません。

彼等の爲に星は天主樣の御聲でした。彼等はその御聲を聞きました。天主樣が召し給ふのだ、この一念に力を得て、家族の反對、人々の愚弄、道中の危險、其等を物ともせず、さつさとユデアを指して出發したのであります。

(3)—我々も博士等の如く天主樣に召されて居る。天主樣の星が我々の心の底に輝いたことは幾度であるか知れません。幼年時代に星こなつて輝いたのはお母さんでした。それから神父樣、罪を避け、

善を修める樣、導いて下さつた神父樣も一個の有難い星でした。成長の後も友人の聲、隣人の美鑑、良心の咎め、方正にして清淨な基督敎的青年時代の思出、敎壇上から響く叫び、公敎要理、宗敎書、我身や他人の上に起りし不幸な出來事等、是等は天主樣が我々を麾き給ふ星であり、戒め給ひ、勵まし給ふ聲でありましたが、さて我々はその星に從ひましたか……如何ほど勇しく、身を惜まずに、その星の導きに從ひましたか。如何ほど順良に、忠實にその聲に耳を傾けましたか。往々頭を背けて、從はうともしなかつたのじやありませんか。その情慾こ手を切れ、その關係を斷て、その友の中を立去れ、その善業を果せ、その信心を勵め、こ勸められる時、早速手に唾して起ち上りましたか……躊躇したこはありませんか……愚圖〳〵して出發を肯ぜず、今なほ死の國に踏み止つて居ることはありませんか。

(4)—博士等はエルザレムに乘り込んで見ましたが、町の人々は、星の出現も、救主の御降誕も全く知らない樣子である。ヘロデ王は、「震耳に水」こ狼狽へ騷ぎ、司祭等の如きは、その救主こそベトレヘムに生れ給ふべきであると、舊約の豫言まで引張り出して敎へながら、自分等は往つて禮拜まうともしない。ユデア人でさへ、こんなに冷淡無關心を極め込んで居る位ならば、果してユデアの王、約束の救主が生れ給うたのであらうか、こ我々でしたら少からず躓かされたでありませう。然し博士等はそんなに氣の弱い人ではない、むしろ非常に熱烈な信仰の持主でした。ヘロデが何んな態度を執りませうと、ユデア人が如何に無關心を極め込みませうこ、自分等は確に星を見た、天主樣の御聲を聽いた、飽までそれに從はねばならぬ、こ固く信じて疑はず、ヘロデの許を辭し、ベトレヘム指して路を續けました。

是も我々の爲に立派な手本じやないでせうか。我々は折角罪の路を去つて、德の坂を攀ぢようと決心し、二三歩踏み出しは踏み出しましても、少しの困難に出遭する、多少の試練に打突かると、忽ち氣を挫かれ、勇を失ひ、阿女〳〵こ後を顧み、其のまゝ、へたばつて了ふか、再び罪の路に後戻るかして了ふのであります。何こ言ふ意氣地なしでせう。天主樣は我等の一歩〳〵に奇蹟を行ひ給はねばならぬのでせうか。むしろ我々の信仰を試すが爲め、困難に見舞はれ、途方に暮れる樣な目に遭はせるのを可しとし給ふのじやありませんか、「終まで堪へ忍ぶ人は救はるべし」(マテ一〇ノ二二)で、たこへ勇しく着手しても、根氣强くそれを續けなくては何にもならぬ、誘惑が打つ突つて來ても、戰ひが避け難くなつても、如何なる難關が横つて居ても、たこへ人に愚弄されようこ、裏切られようこ、たとへ冷淡、不熱心に構へ、信仰の道を進まない似而非信者を見聞しようと、決して失望しない、躓かされたり、後を振り向いたり、信者の務を怠り、德の途を踏み外したりする樣なことをしない、飽まで前進を續けて行くべきであります。

(5)—彼の博士等はやがてその堅忍不拔の精神に酬いられました。エルザレムを出るや、東國で視た星が再び天に輝き、しかも自分等を案內して南へ南へと進み、ベトレヘムの唯ある家の上に止りまし

た。内に這入つて、幼兒と御母マリア樣とを見當りました。今こそ、その長い〳〵旅行の目的を達した彼等、心は如何なる喜びに躍るのを覺えたでございませうか。

我々も同じくさうで、信仰の敎へ、天主樣の召し給ふ御聲に從ひ、何がごうあらうと、一たび踏み入つた途を續けさへしたら、終には目的の彼岸に到達するのです。この世に於てイエズス樣、マリア樣を見當り、その祝福を浴せられ、言ひ知れぬ平和を樂むことが出來、後、天國に於ては、永遠窮りなき幸福に躍るに至るべきは、言ふ迄もない所であります。

（二）博士等禮物を献ぐ

(1)—博士等は星に導かれてベトレヘムに辿り着きました。中へ這入つて憐れな幼兒と貧しい母とを見ても、是が果してユデアの王樣でせうか、世の救主でせうかとも思はず、直ぐ御前に平伏して禮拜し、やがて寶盒を開き、黃金、乳香、沒藥を献げました。

彼等は空手でイエズス樣の御前に罷り出ないで、各々其國に產する寶物を献げました。內に燃え立つ信仰があると、自然それが外に顯れるのは當然でございまして、博士等のこの遣り口は、我々の宜しく手本とせねばならぬ所であります。

博士等の献げた禮物は、それ〴〵に深い意味を有つて居るのでありました。黃金は貢として王樣に献げるもので、イエズス樣が天地萬物の王にて在すことを示し、乳香は燒いて神樣に奉つるもので、イエズス樣が眞の神にて在すことを表し、沒藥は死體に塗る爲の苦い藥で、イエズス樣が眞の人にて在すことを意味するのでありました。

(2)—我々も博士等の如く、黃金を献げませう。黃金と云つても山吹色に輝く金貨ですと、富豪でない限り献げ得ませんが、私の云ふ黃金はそれではありません。一体黃金と云ふものは金屬の中で一番貴い、一番價値あるもので、德の中に一番優れて貴い愛德を象るのであります。隨つて熱く天主樣を愛し又天主樣の爲に人をも愛するならば、それこそ光眩き黃金をイエズス樣に献げる譯であります。天主樣を愛してその御誡を善く守り、決して罪なぞ犯してはならぬ、天主樣を愛して、始終天主樣のことを忘れず、寢ては夢み、起きては思ひ、あゝしては天主樣の御氣に障りはしまいか、斯う言つては天主樣がお喜びにならぬではあるまいかと注意して、何事もやつて行くやうにします。又天主樣を愛するよりして人をも愛する、天主樣がお嫌ひになるから人と仲を惡くしない、天主樣がお嫌ひになるから、無暗な小競合などしない、却て天主樣を喜ばせ奉つる爲に人を助ける、仇敵に赦す、慈善業の爲に喜んで寄附する樣に致しますのは、それこそ御主に黃金を献げる所以ではありませんでせうか。

次に博士等の如く乳香を献げませう。乳香と云ふものは、御承知の通り極めて香の高いもので、立派に祈を象るのであります。默示錄にも「聖人等の祈なる香の充ちたる香爐」（默示錄五ノ八）とか、「天使金の香爐

を持來り、多くの香を授けられしが、是れ諸聖人の祈に加へて、神の玉座の前なる金の香壇の上に献げん爲なり」（全八／三）とか錄してあります。我々は祈を誦へる時、朝夕の祈は勿論、コンタスを爪繰る、ミサを拜聽する、聖體を拜領する時、天主樣に乳香を献げるのであります。然しその祈禱は側見をせず、他念に流れず、熱心に誦へなければならぬ、均しく煙であるが、乳香を燒く煙と、牛柴を燻べる煙とは大變の違でありませう。祈禱も夫れと同じで、熱心な祈禱ならば、乳香の煙の樣に天主樣が喜んでお受け下さるのですが、不熱心な祈禱になると、全く生柴の煙です、天主樣も煙たく覺え、厭に感じ給ふに相違ありません。

終に博士等の如く沒藥を献げませう。沒藥と云ふものは死體に塗つて腐敗を止めるもので、頗る苦いものださうであります。我々は死體見たやうに、それは極めて腐敗し易い、內にはその腐敗の因たる情慾を有つて居る、外からは惡魔だの、惡人だのが、我々を腐らさう〳〵にかゝつて居ますから、始終苦い沒藥を塗つて置かなければ、何時の間にか腐つて了ふ憂があります。危いから見たくても見ない、害になるから聽きたくても聽かない、過ぎると惡いから飲みたいお酒も控へる、罪の機會があるから行きたい所へも行かない、交際したい人までも避けるやうにする、さうして遊んで廻る代りに却て祈をする、面白い浮世談をする代りに却て宗教書の一枚も讀む、寒い朝にも早く起きてミサを拜聽し、冷い晩にも辛抱してお說教を聽きに行く、それはなるほど辛い、殊に今迄の惡い癖を止めて、正反對の德、嘗て行つたこともない德を實行しようと云ふのですから、夫れは如何にも辛い、沒藥見たやうに苦いは苦いに相違ないが、然し已を得ない、然うしないと我身は腐敗して了ふ、救靈が危くなる、終なく地獄の中に滅びるの外はない。斯る不幸に陷らない爲、我身を戒め、苦い沒藥を我心に塗り、我目にも、我耳にも、我口に、我手足に、我全身に塗る樣に心掛けねばなりません。

もし我々が謹んでこの三つの禮物を献げましたら、平素より一に酬いるに百を以てし給ふイエズス樣のことですから、また必ず黃金の代りに世を輕ずる銳智の賜を、乳香の代りに信心の熱、祈禱の精神を、沒藥の代りに、身の苦みを甘じて堪へ忍び、否、勇み進んで十字架を擔ぐ力をも惠み給ふに相違ありません。

(3)—こゝに一つ注意すべきは、博士等はその禮物をイエズス樣に献げたのですが、然しそれを受け取つたのは聖母マリアでした。聖母は實に人類とイエズス樣との仲介者である。この聖母の仲介によつて、我々はイエズス樣に近くことも、イエズス樣を受け奉つることも出來るのです。聖母の仲介によつてイエズス樣を認め愛する道を學ぶのです。だから博士等に倣ひ、聖母の仲介によつて我々の祈禱を献げませう。犧牲を献げませう。愛德の黃金、祈禱の乳香、制慾の沒藥を献げませう。たとへ我々の禮物は如何にも小い、粗末な、取るにも足らぬ物であるにせよ、イエズス樣は聖母にたいして、必ず喜んで夫をお受け下さるのであります。

（三）博士等の歸國

(1)—博士等がエルザレムに立寄りました時、ヘロデは早くも胸に恐ろしい惡計を運らし、彼等を召入れて、星の顯はれた時期を問ひ質しました。それから彼等をベトレヘムへ遣はし「往つて孩兒のことを詳しく尋ねて見るが可い、見當つたら自分にも知らして貰ひたい、禮拜みに行く積だから」と言ひ添へて置きました。

博士等はベトレヘムに辿りつき、救主を見當つて、目的を達し、いよ〳〵歸國の途に就かうと云ふ段になりました。ヘロデとの約束もあることだし、エルザレムからダマスコ方面へ出るのが順路でもあるし、其方を指して發足しようと考へて居ますと、「ヘロデの方へ歸るな」、と云ふ天の告を夢の中に蒙りましたので、別の路より歸國いたしました。

(2)—この點についても、我々は博士等に則る所があらねばならぬ。イエズスを眞の神と認めて、洗禮を授かりましてから、イエズス樣の御前に平伏して、罪を痛悔しましてから、其御聖體を拜領いたしましてからは、別路より歸國しなければなりません。我々は傲慢を出し、神樣の御掟に從はず、浮世の快樂を追ひ廻はし、矢鱈に飲食を貪る等して、故鄕の天國に遠かつたのでありますから、之に歸るには何うしても別路を取らなければならぬ。今まで笑ひ興じた代りに寧ろ泣き悲み、今まで傲慢を出した代りに寧ろ謙遜し、今まで御掟に從はなかつた代りに寧ろ善く從ひ、今まで浮世の快樂を追ひ廻した代りに、むしろ之を輕じ、矢鱈に飲食を貪つた代りに、むしろ之を差控へるやうにして、天の故鄕へ歸るより外はない。兎に角肉身を樂ましして、天國の幸福を失つたのですから、今からは肉身を苦め、泣いて、嘆いて、天國へ歸り行くこそ至當でございませう。仰いで天主樣の御裁きの嚴しさを思ひ、俯して我罪の重くて數限りもないのを打眺めて、深く之を怖れ、決して再び罪の途に戻らない、決して再び氣隨氣儘の道を辿らない、決して再びヘロデの方へ歸らない樣にせねばならぬ。彼はイエズス樣を殺さうとして居る。告白をして罪を赦され、イエズス樣から心に生れて戴いても、ヘロデの方へ歸りましたら、惡魔の方へ、罪の機會となる人、罪の機會となる場所、罪の機會となる觀物や讀物の方へ歸りましたら、折角お生れになつて下さつたそのイエズス樣を、取殺されて了ふに極つて居ます。

(3)—然し何人しも眞實に心を改めて、天國へ歸らうと思ふならば、たゞ罪を思ひ切つたばかりでは足りません。罪への愛着心までも綺麗さつぱりと切つて棄てなければなりません。

昔イスラエル人はエジプトを出て、約束の地へ向つて進發しました。然し心はやはりエジプトに殘して居まして、荒野を旅行する際、水や食物が缺乏して來ると、直ぐモイゼスに喰つてかゝり「あゝエジプトに居つたら可かつた、肉鍋のそばに坐つて、味い肉をたらふく食べられたのに！なぜ我々をこんな荒野に連れ出して來たのです」と云ふのでありました。今日でもそんな人が少くありません。

罪の中を出ることは出たが、やはり未練を殘して居る。汚はしい樂を棄てるのが如何にも殘り惜しい。之を譬へると病の爲に飲酒を禁じられた酒豪の樣なもので、飲んだら間違ひなく死ぬ、と云はれて、流石の上戸も杯を手にし得ないが、然し夫れがなか〳〵辛い、片時も酒の事は忘れられぬ、酒の話ばかりして居る、何とかして飲むことは出來まいか、せめて酒の香なりと嗅ぎたいものだ、思ふ存分酒の飲める人は結構ぢや、羨ましいな、と云つて居る……罪を告白して、心を悔めたと云ふ人でも、罪と手を切り、罪の機會に遠かるのを辛しとし、「あゝ、地獄がないものなら、この罪を犯して樂みたいものだけれども……信者は何うも窮屈で堪らぬ、せめて罪の香なりと嗅ぎたいものだ」なぞゝ思つて居る人は、それこそエジプトに心を殘して居る人です。ヘロデの方へ歸りたい人です。それでは到底眞實に改心したとは思はれません。それではイスラエル人も同樣、到底故郷の天國へ無事到着するこゝ出來るはずがありません。

(4)—今なぜ罪を思ひ切り得ないかと云ふに、それは罪を嫌ふ心が足りないからであります。人を嫌ふにしても、僅かしか嫌つて居ない時は、表面だけは何うにか斯うにか交際して行きますでせう。然し甚く心底から嫌ふ樣になると、其人の言ふこと爲ることが一から十まで厭らしくなる、顏を見た計りでも胸を惡くする、「坊主が憎けりや袈裟まで憎い」、其人の親兄弟までも、朋友までも憎々しくなつて來る。それと同じく、罪を嫌ふことの足りない人は、今現に罪を犯す氣はないが、心はやはりそれに愛着して居る……然し心底から之を厭ひ嫌つて來ると、罪への愛着、其罪の機會までが厭らしくなる。其罪の名を聞いたばかりで身ぶるひするものです。さうなつたら、決して前の罪へ逆戻りするやうな氣遣ひはありますまい。

要するに、博士等の如く、救主を見當り、之を禮拜し、一生涯之に仕へ奉つると約束した以上は、また博士等の如く、別路より歸國する、今迄とは違つた別路、たとへ險岨であらうと、幾多の難關が横つて居ようと、その別路より天の故郷へ歸國する覺悟にならなければなりません。

聖家族

(一) 理想的家族

ナザレトの聖家族、イエズス、マリア、ヨゼフが三十年の間も明し暮し給うたナザレトの聖家族は、基督教的家族の又なき美鑑であります。

(1)—ナザレトの聖家族には貞潔の德が美しい光を放つて居ました—實際イエズス樣より貞潔な子供マリア樣より貞潔な母、ヨゼフ樣より貞潔な夫が何處に居ましたでせう。その胸中に溢れて居る感情も貞潔を匂はして居ました。その言も貞潔を匂はして居ました。その目付も、その服裝も、その立振

舞も何から何まで貞潔を匂はして居たのであります。

今イエズス、マリア、ヨゼフ樣が我々の家族を御覽になる時、何をお認めになりますでせう？。愧しくて基督信者の口に言ひ出されない樣なことが、我々の屋根の下に喋り散され、行はれつゝあるのに驚いて、目を背け給ふ樣なことがないでせうか。

(2)—ナザレトの聖家族には愛德が輝いて居ました—三人とも皆同心同意で、その胸中にも、その言語、動作にも柔かい愛が漲つて居たものであります。人を誹る、口汚く罵る、荒々しく叱りつける、癇癪玉を破裂させる、と言ふ樣なことは、藥にしたくも見付らぬのでありました。

我々の家族は果して愛の家族でせうか。夫婦相爭ひ、親子兄弟相罵り、平氣で他人を非難、讒謗すると云ふ鹽梅ではないでせうか。

ナザレトの聖家族に於て、力と云ひ、德と云ひ、最も勝れて居られたのは、神の御子イエズス樣で、その次は原罪の汚れなくやごされ給ひし聖母マリア、又その次は聖ヨゼフでムいました。然し聖ヨゼフは、一家の主人公、天主樣の權威を代表していらしたので、イエズス樣にせよ、聖母マリアにせよ、謹んでその命令に從はれました。權威の行はれる所には秩序があります。爭ひも亂も騷もあらうはずがムいません。我々の家族がナザレトのそれの如く愛の家族たり得ないのは、天主樣を代表する父、その父の權威を尊重しないのに職さして之れ由るのではないでせうか。

(3)—ナザレトの聖家族には勞働が尊ばれたものでした—聖ヨゼフはよく勞働し、額に汗をたらして一家の爲に日々のパンを求められました。聖母マリアも亦よく勞働し、家事萬端を切り廻はして行かれましたので、家は貧しくとも、清潔で、小さつぱりとして、隅から隅まで、きちんと整頓がつきまして、如何にも住心地の良い家でございました。イエズス樣もまたよく勞働されました。三十年と云ふ長い間、父母に從ひ、身を惜まず、力を盡して、父母の勞働を助け給ふのでありました……我々の家族も勞働の家族でありたいものです。人は勞働する爲に造られました。アダムが樂園に置かれたのも勞働する爲でした。罪を犯してからは、苦しい勞働に從事して、之が償をする樣に命ぜられました。隨つて勞働は止むに止まれぬ我々の義務であります。勞働をすると、日の長きに苦しむ憂がない、況んや身体は健になり、心にも邪念を萠す隙がなく、無益な話や、無益な讀物に耽つて胸を騷がせ、德を傷け、救靈を危くする氣遣ひもないのであります。

要するに我々の家族にもナザレトの聖家族に於けるが如く、貞潔、愛、勞働が輝いて居るならば、またナザレトの聖家族の如く、天主樣に祝せられ、人にも愛され、この世ながらに天國に居るかの如き平和を樂むことが出來るに相違ないのであります。

（二）聖家族（親の務）

(1)—聖家族の祝日の定められたのは、最近のことであります。昨今信者の信仰はだん〳〵衰へ、家庭にあつても、親は親たらず、子女も子女たらずして、我儘勝手な振舞ひばかりする樣になつて參りましたから、敎皇樣に於かせられましては、イエズス、マリア、ヨゼフの聖家族をばカトリック敎的家庭の模範たらしめたいものと思召しになつて、この祝日を定め、親は聖マリア、聖ヨゼフ樣を鑑として、よくその責任を果し、子女はイエズス樣を御手本として、その義務を全うするやうにとお勸め下さつたのであります。で、今日は先づ親の責任に就て、一言申上げることに致します。

イエズス樣は全能全智の神にて在したから、親から監督され、注意され、敎育され給ふ必要はなかつた筈であります。然しながら聖母マリアでも、聖ヨゼフでも、決して御子の上からお目を離し給はぬのでありました。エルザレムの神殿からの歸りがけに、御子を見失ひなすつた時の如きは、非常に心配して、三日の間と云ふものは、泣きの涙でその行方を搜し廻り、漸く搜し出すや、「何故あなたは斯んなことをなさいました？、私等はどんなに心配して搜ね廻つたものですか」と申されました。

この一事を以ても御兩人が御子の上に如何なる注意の目を睜つて居られたかゞ察せられるでムいませう。親たるものは誰にしても、是位の心懸はあつて欲しいものであります。抑も子女の敎育と云ふものは一年や二年間で濟むことではありませんで、之を大きく三期に分けることが出來ます。第一期は胎內から懷の上まで、第二期は初聖体から堅振を授かる時まで、第三期は青年となり、社會に踏み出す頃であります。

(2)—**第一期の胎敎**— 子女の敎育は胎內から始めねばならぬ、「良き樹は良き實を生じ、惡き樹は惡き實を結ぶ」、子女が善くなり惡くなるのは、たゞ生れてからの敎育如何にのみ由るのではなく、親の性質の善惡にも大に關係するものであります。親が下司根性を持つて居る、御轉婆である、嫉妬心が强い、怒つぽい、不信仰だとするならば、それが何うして子女の心に傳はらないですみませう。その反對に信仰は强く、同情は深く、親切であり、よく身を愼み、行を正しくするならば、その影響は必ず子女の上に及びまして、子女も亦信仰の强い、品行の方正な、天主樣を愛し、人を愛する、立派な人物となるに極つて居ます。だから善い子女が欲しければ、先づ自ら善良な人たるべく務める、先づ自ら熱心となる、先づ自ら德を修め、善に進み、行を磨いて、子女に善い種子を蒔きつけるだけの下地を拵へなければなりません。聖母マリアが原罪の汚なくやどされ給ひ、聖ヨゼフも夙に童貞を守り、身も心も淸淨無垢に保つて行かれたのを以ても、知られるじやありませんか。

既に子女が生れました上は、未だ懷に抱いて居る時から、もう天主樣のこと、イエズス樣、マリア樣のこと、天國のこと、罪の憎むべく、地獄の恐るべく、その罰の永遠たること等を敎へねばなり

ません。その當時、子女の頭に刻み附けられた信仰の痕跡は、何時まで經つても消失せるものではありません。「三歲兒の魂は百まで」とよく曰ふでムいませう。

宗敎と云ふものは、相當に子女の智慧が開け、物事の辨別も付く樣になつた時を竢つて之に注ぎ込むべきものだ、と思つては大きな間違で、まだ懷に入れて居る時、膝に抱へて居る時から、早くも子女の心を養成して、之に信心を植付けてやる必要があるのであります。即ち親たるものは其子の傾向を調べ、其性質を視分け、善い傾向は益々之を奬勵してその根を深くさせ、惡い傾向はそろ〳〵之を抑へ、面白からぬ性質は之を根絶やす樣にせねばなりません。尤も乳兒のことですから、そんなに大して善いこともなければ、大して惡いこともないでせうけれども、決して油斷をしてはならぬ、「汝子女を有するか、善く之を養ひ育て、幼少の頃より之を狂げよ」と聖靈は曰うて居ます。イエス樣は「幼兒の我に來るを許せ」と抑せられました。聖アウグスチヌスも「自分は乳と共に耶蘇樣を飲んで居たから、青年期に入つて、罪惡に耽つて居る間にも、イエズス樣のことは忘れ得なかつた」と曰はれたじやありませんか。

親が斯う云ふ樣に、幼い時より子女の心を天主樣の方へ向はせるならば、その子女は必ず立派な人物となるのでありますが、悲い哉、そんな親は極めて少い、我子を打棄て、少しも顧みない親、天主樣のことも、天國、地獄のことも知らしてくれぬ、祈禱の一つも敎へないで、七つ八つ迄も放つたらかして居る親すら少くはありませんん。何でも敎へます、何んな話でも聞かせるのですが、たゞ天主樣のことだけを話さない、たゞ信心の事だけを知らしてくれない、斯の如くして、幼い時から危い目に遭はせ、罪の中に棄て置きましたならば、後で如何なりませう。イエズス樣が彼のユダに就て仰しやつた如く、「生れずに居れば可かつた」とか、「拽臼を首に括つて、海の深みに沈められたが優しだつた」とか、言はれるやうにならないでせうか。

(3)—初聖體から堅振頃まで—子女の智慧がだん〳〵開けて、事物の辨別が付くやうになりましたら、學校にも出さねばならぬ、公敎要理も學ばさねばならぬ、即ち人の手にかけて敎育してもらふことになるのであります。もしキリスト敎國に於けるが如く、學校で宗敎上の敎育を施してくれるならば、言ふべき所はありませんが、今日の我國では、それが全く出來ない。學校は單に文字を敎へる場、學問を授ける處たるに過ぎないから、是非とも學校を退いた後で、別に公敎要理を授けるより外はない。してその公敎要理を敎へる傳道士、傳道婦の務は並大抵のことではないのですから、親たるものは、其人に對して心からなる感謝の念を持たなければならぬ。子女にも、また尊敬と從順と精勤の念を抱かせる樣にして欲しいものであります。

そこで先づ公敎要理の稽古に出して下さらねばなりません。何日と何日とは公敎要理の日で、何時から始まると云ふ位のことは確めて置いて、必ず其日と其時間には出すやうにし、又稽古が濟んだら

道草を喰はないで、早く歸宅するやうに、命じて置かなければなりません。

教へるばかりでは足りない。教へた所は片ッ端から行はせねばならぬ。それには親たるものが立派な亀鑑を示すに限る。朝夕の祈禱にせよ、ミサ拜聽にせよ、公教要理にせよ、説教、告白、聖體拜領にせよ、親が先きに立つて行ひましたならば、子女は知らず〳〵の中に之に見倣ふものであります。聖母マリア、聖ヨゼフが、イエズス樣を伴つて何十里と言ふ遠路をも厭はず、エルザレムへ御參詣になつたことを考へて見なさい、親たる者の爲すべきことが、ちやんと立派に描き出されてあるじやムいませんか。

(4)—**社會に踏み出す**—堅振を終ると、子供は夫れ〴〵上級の學校に進むか、職業に就くかせねばなりません。親の傍にばかり留め置く譯には行きません。が此時分は最も危際な時であります。男兒にしても、女兒にしても、年の十五六歳になつた頃は、それこそ一番迷ひ易い、一番腐敗し易い時、隨つて親たるものが一番注意を深くすべき時であります。その平生出入する所は何處であるか、その平生往來する朋友は如何なる人物であるか、かね〴〵何んな書を讀み、何んなことを語り、何んな物を觀たがつて居るか、よく〳〵注意せねばならぬ。夜も晝も注意せねばなりません。

次に子女には夙くから勞働の趣味を覺えさせる必要がある。何んにもさせずに遊ばして置くより危險なことはない。暇があると、よく邪念が起る、出て遊び廻りたくなる、さうして色々と惡の道に踏み込むに至るものである。天主樣が我々をお造りになつたのは、決してブラリ〳〵と遊び暮させる爲ではなく、働かせる爲でした。聖母マリアでも、聖ヨゼフでも、イエズス樣でも、毎日〳〵熱心に働かれたではありませんか。日曜日の如く、身体を働かさぬ時は心を働かす、祈禱をし、宗教書を讀み、公教要理を復習し、慈善業を爲すと云ふ樣にして、片時でも無意義に過さしてはなりません。

(5)—終に幾ら注意しても、善いことを教へても、戒めても、猶且つ惡の道に踏み迷ふ子女が出來ないにも限りません。さうなつた時も決して失望してはならぬ。まだ親の身には祈禱と涙と云ふ二つの武器が遺ります。泣きの涙で天主樣に其改心を祈ることが出來ます。マリア樣とヨゼフ樣が、三日の間も泣いて御子をお搜しになりました如く、親等も天主樣に泣き縋つて、子供の改心を祈らねばなりません。聖アウグスチヌスが罪惡に彷徨つて居る頃、母のモニカは連りに泣いて祈り、或る司教樣に自分の苦しい心底を訴へますと、その司教樣が之を慰めて「こんな涙の子が滅びるはずはない、御安心なさい」と曰はれたさうであります。「涙の子」、皆樣の迷ひ子も涙の子となして下さい、必ず改心の惠を忝うすることが出來ます。

(三) ナザレトの聖家族（子女の務）

親がその子を教育するにつけては、マリア樣とヨゼフ樣を鑑として行かねばならぬことを申上げま

したが、子女もまたイエズス様を御手本として、天主様にたいし、親にたいし、己にたいして、何を爲ねばなりませんか、といふことを一口申上げさして戴きませう。

(1)—**天主様に對してイエズス様は如何なさいました**— イエズス様は十二歳の時から兩親に伴はれて、エルザレムへ御參詣になりました。ナザレトからエルザレム迄は二三十里もあるのでムいますが、十二三歳の子供の時から、そんなに遠い旅行をなさつたのであります。神殿に參詣しては、如何なる熱心を以て祈禱をし、聖祭に與り、説教をお聽きになりましたでせう。三日の間、御自分ひとり神殿に居残りなさいました時も、「彼等に聞き、且つ問ひ居給へり」と福音書には記してあります。神の御身でありながら、謹んで學者等の説明を聽いたり、彼等に尋ねたりし給ふのでした。是こそ子女たるもの、立派な手本ではありませんか。子女は幼少の頃より熱心に朝夕の祈禱を誦へ、ミサ聖祭に與り、説教を聽き、公教要理を學ばなければなりません。さもないと、將來が案じられます。天主様を入れて居ない心には、必ず惡魔が這入つて來ます。惡魔から這入られたら、幼少の頃より惡魔を心に宿して居たら、後では何んな人物になりますでせうか。

(2)—**親に對しては如何なさいましか**—「耶蘇兩親と共にナザレトに至りて、彼等に從ひ居給へり」と福音書には記して有りませう。誰が誰に從はれたのですか。天主様が人間に、造物主が被造物に、天地萬物の大君が賤しい臣僕に從はれました。しかも何事であらうと從はれました、どんなに困難な命令にも喜んで從はれました。どんな賤しい仕事でも喜んで之を果されました。「是はいやだ、自分には不似合だ」等とは決して仰有つたことがありません。マリア様や、ヨゼフ様は、聖人でこそありましたが、やはり人間でした。却てイエズス様は全能全智の神様、仕事をするにも、斯うするよりか、彼した方が可い、斯うすれば斯うなつて不便だ等と、ちやんと判つて居られたから、御自分でマリア様や、ヨゼフ様にお指圖なさるが當然でしたけれども、さうは致しなさらぬ、おとなしく親に從はれました、決して親の上を走らうとは致しなさらぬでした。

今日の青少年は如何でせう、「親は舊い頭の持主だ、自分は昭和の新教育を受け、何から何までちやんと分つて居る」と云はんばかりの顔付をして、親に從ふ所か、却て親を從はせようとして居る、却て親に指圖しよう、却て親をやり込めようとして居るのであります。そんな青少年は何うぞイエズス様をお眺め下さい。「お父さん、是は何うしませう?」、「お母さん、是は斯うして可いでせうか」と一々尋ねた上で仕事にお取懸りになるその愛らしさ、何んなに辛い、賤しい仕事でも、飛び立つて之を果し、少しなりとも親を休ませう、幾分でも親の心を慰めよう、安心させようとしなさる、その心掛けの美はしさを眺めなさい。それも一年か二年かの間ではない、實に三十年もの長い間のことではありませんでしたか。

(3)—**自己に就ては如何なさいました**—「イエズスは智も齡も、神と人とに於ける寵愛も次第に彌増し給

へり」とありませう。即ち年の長けるに從ひ、智慧が增して來た、天主樣からも人々からも可愛がられなさるのであつた、と云ふ意味であります。それはイエズス樣が年の長けるに從ひ、今まで知らなかつたことを多く知つて來られた、今まで有たなかつた德を、だん〳〵其身に行ひなすつたと云ふ意味ではありません。太陽は東天に現はれた時も、日中頭の上に來た時も同じ太陽ですが、然しその光にせよ、熱にせよ、中天に昇れば昇る程、强く大きく輝かしくなつて來るかのやうに見えるものです。イエズス樣もそれと同じく、年の長けるに從つて、その智慧なり、德なりを益々人目に顯しなさつた、と云ふだけに過ぎないのであります。尤も神樣として知り給ふことを、事に當り物に觸れて經驗し、その經驗的知識を新に加へ給うたのだと云ふ意味に、右の一句をカトリックの學者等は解釋して居ますが、何れにしても、青少年たるもの、立派な鑑ではありませんか……さうです。誰しも、たゞ年を取るばかりでは足りません。たゞ學校に出て學問を修め、世の中の事を識るばかりでは足りません。年と共に益々天主樣を知らなければならぬ、益々聖敎の道を分つて來なければならぬ。分つた上では片端から之を行ひ、德を積み、天主樣にも人にも可愛がられるやうに務めなければならぬのであります。

(4)—人は年が長けるに隨つて情慾も成長します。美しいものを見たい、面白いことを聞きたい、柔かいものに觸れたい、味いものを食べたい、遊びたい、樂みたい、と云ふ慾は何人にでもあり、年と共にいよ〳〵增長するものですが、夫れを制へなければ、善を修め、德を積むことは出來ません。其處に戰があり、困難がありますが、その困難を切り拔け、その戰を經てこそ、始めて善の花が咲き、德の實も熟するのであります。

北風のヒユウ〳〵と吹き渡る寒い冬には、草木も成長することは出來ませんが、春になつて、暖かい日がポカ〳〵と照り出しますと、麥でも豆でも青々と繁つて來る。然し夫れと共に雜草も非常な勢を以て蔓つて參りますから、始終油斷をせずに其雜草を除去らなければ、良い麥、立派な豆を收穫ることは出來ません。人間も同じく然うで、年が老いて、冬枯れの時代になると、惡いことも出來ないと代りに、とんだ善いことも出來るものではない。却て未だ胸には赤い血が沸つて居ると云ふ青春時代には、隨分善くもなれるが、またなか〳〵惡くもなれるのであります。

今皆さんは果して善德と情慾と、何れを成長さして居られます?。心の畑には、善德が盛に繁茂して居ますか、かへつて情慾の草がます〳〵蔓つて居ることはありませんか。イエズス樣は年と共に智慧にも德にもいよ〳〵御成長なさいましたが、皆さんは年と共に奸智に、罪惡に、醜い行に成長して居ることはありませんか。

聖母の潔の式（二月二日）

聖母の勇壯なる犧牲心

(1)—今日は聖母マリアが御子の御降誕後、四十日目に、エルザレム神殿へ參詣して、潔の式を受け、御子を天主様にお献げになつたことを記念する爲の祝日であります。抑もモイゼの律法に由りますと、婦人は兒を生むと汚れを受ける、よつてその兒が男兒ならば四十日目に、女兒ならば七十日目に神殿へ參詣して潔の式を受け、その汚を潔めて戴かねばならぬ、しかもその生兒が男で家兒でしたら、一應之を天主様に献げ、然る後、五六圓ぐらゐのお金を出して、之を贖ひ戻すことになつて居たのであります。聖母マリアはこの日に右二つの掟を忠實に守られたのですが、それに就て我々に示された御手本は、如何に美しい、感ずべきの至りでありましたでせうか。

(2)—先づ聖母は最愛の御子を犧牲とされました。御子は聖母に取つて掛換のない一粒種でした。世のすべての母の愛を悉く集めても、遙に及ばないほどの愛を傾けて、愛し給ふ掌中の玉でした。然るに律法は、この最愛の御子をエルザレム神殿に於て、御父に献げよと命ずるのであります。成るほどその奉献は普通の人には一個の形式に過ぎない、定つた丈けのお金を出せば、之を再び我手に取り戻すことが出來るのでありました。然し聖母とイエズス様の爲には、決して通り一遍の形式ではない。より深い意義を有し、その影響する所もより重大でありました。實にこの日の奉献は、他日カルワリオに於て全うせらるべき犧牲の下準備、その序幕であつたのであります。聖母でもイエズス様でも、それを明に御承知の上で、行ひ給うたのですから、其處に勇ましい、英雄的な、天主様の爲には何一つ物惜みをしないと云ふ感心な御心掛が見られるのであります。

天主様に奉仕するにつけて、我々に課せられる犧牲は、この聖母の犧牲と比較され得るほど苦しいものでせうか。聖母は神の御子、無限の寶をば潔く献げられたのですが、我々の犧牲にしなければならないものは、神の御子ほどの價値を有するのでせうか。儚い樂み、煙の如き譽、少しのお金、たゞそれだけではありませんか。

(1)—次に聖母は己が心の喜びを犧牲とされました。御子をエルザレム神殿に携へ行くのは、如何に堪へ難い犧牲を献げる譯になるか、如何なる悲みに御胸を破られねばならぬことになるか、それを聖母は御存知なさらなかつたでせうか。シメオンの豫言をまだ耳にしない中から、既に豫感して居られなかつたでせうか……自分の爲にも、御子の爲にも、受難の幕が切つて落されるのだと云ふことは、早くもお察しになつて居られたらうことは、當らずと雖も遠からずでありますが、然し何が何うあつても律法は嚴重に守らなければならぬと思ひ、足取り勇ましく神殿さして進み行かれるのでありました。

我々も天主樣に仕へ奉るにつけて、心の歡び、身の樂みを犧牲に供せねばならぬことが往々あります。たゞ我々に要求される犧牲は、空しい、世俗的な歡び、氣を散らし、心を亂す危險な樂みで、之を犧牲に供へ得ないでは、救靈が氣遣はしくなつて來る樣なそれであります。然しそんなに歡喜を拋つ、氣慰めを斷つ、一切の樂を犧牲にすると云ふ日になると、折角人間に生れた甲斐が何處に在る？世は全く暗い、陰氣な、物悲しい灰色の谷となつて了ふではないか、と思はれぬものでもないが、それは決して然うした譯のものではありません。私は夢にもそんなことを申したのではありません。歡びもしなさい、笑ひもしなさい、樂みなさい。天主樣の禁じ給ふのは、犧牲に獻げよ、と命じ給ふのは、たゞ十誡に禁めてある歡び、德を危くし、救靈を難破せしめる危險な樂みに過ぎないのであります。

(一)—終に聖母はその名譽をも犧牲ことされました、潔の式は、我身の汚れ果て居ることを表白す爲のもので、常の婦人にでも少からぬ侮辱となるものでした。況して一點の汚もなく御子をやどし、その童貞美すらも傷けずして、御子を生み給うた聖母に取つては、是れほど屈辱的な掟はなかつたのであります。固よりその汚と云ふは、自由意志に基ける道德上の缺點ではなく、たゞ律法上より來り、外觀だけに止るのではありましたが、然し單に汚れて居ると見做されるだけでも、至聖、至潔なる聖母の爲には一方ならぬ不面目ではなかつたでせうか。

實際この掟に服するのは、つまりアダムの子孫に共通な詛ひ、その詛ひに自分も卷き込まれて居る、言ひ換へれば原罪の汚點に染つて居ると認める所以ではありませんでしたか。原罪なくやどされ、塵ほどの罪も汚點もなき聖母でありながら、それでも猶ほ忠實にその掟を守られました。この掟を守るが爲に、自分の名譽を犧牲にするのもお厭ひなさいませんでした。

我々は掟を守るにつけ、それほどの屈辱を蒙る樣なことがない、我々はたゞありの儘の我身を見せるのみに過ぎない、天主樣の絶對主權に服從しなければならぬはずの身である以上、御前に奉仕して、その無上の御稜威を崇敬し奉る樣、罪人としては苦行をなし、罪を償ふ樣にする、と云ふだけに過ぎないのであります。それにも拘らず、それを厭ふのです。罪人でありながら、罪人と見られるのを嫌がるのです、好んで義人陶をしたがるのです。餘りの傲慢と云ふものではありませんでせうか。

結論—我々の眞の幸福は服從と犧牲とに在る。骨を惜まずして天主樣に仕へ奉る人は、大なる平和、言ひ知れぬ愉快、清い〳〵喜悅を味ふことが出來る、苦痛の中にすら少からぬ慰めを覺えるものであると云ふことを、聖母の御鑑によつて學びませう。

（一）日本二十六聖殉教者（二月五日）

(1)—本日は日本二十六聖殉教者の祝日であります。この二十六聖殉教者は、我國の數多き殉教者中

にも、特に聖人の位階に進められた御方でムいまして、我々日本信者たるものが、心を合せ力を盡して尊敬もし、愛慕もしなければならぬ御方々であります。

何方も御存じの通り、聖フランシスコ、ザベリオが鹿兒島に御上陸になつたのは、千五百四十九年八月十五日、聖母被昇天の祝日の事で、爾來四十年許りの間と云ふものは、日本教會は日を追つて盛大に赴く一方で、信者は何時しか三十萬の多きに達したと云ふ位であります。然るに一五八七年、豊臣秀吉は突然宣教師追放令を發し、それから九年を經た千五百九十六年には、京都と大阪に於て、フランシスコ會の修道士六名、日本信者十五名、別に耶蘇會の修道士三名、都合二十四名を捕へしめ、之を京都一條の監獄に打込ませました。其中には十二歳になるルイ茨木、十三歳になるアントニオ、十五歳になるトマス小崎と云ふ少年さへ數へられるのでありました。さてこの二十四人は翌年一月三日に監獄より引出され、左の耳を斬り落され、血塗になつた儘「見せしめ」の爲にとて、京都から伏見、大阪、堺なぞを引廻され、徒歩で長崎まで送られました。途中で二人の信者が、是非とも殉教者になりたいと役人に願つて、一行に加はりましたから、都合二十六名となりました。

堺を立つたのは一月五日でありましたが、この嚴寒に、着の身、着のまゝ、雨が降らうと、雪が飛うと、徒歩で二百里許りもの旅行をなさつたのですから、途中の艱難苦勞と云つたら、夫れは〳〵想像も何も及ぶ所ではなかつたのであります。それでも少しの不平すら溢さず、喜んでその艱難苦勞を堪へ忍び、終に二月五日、時津から浦上を經て長崎の刑場に御到着なさいました。

早速二十六本の十字架に手と足を縛り附けられ、右左から二本の槍で十文字に胸を突き透され、皆一齊に「ゼズス、マリア」と唱へて、めでたく殉教を遂げられました。是が日本二十六聖殉教談の概略でムいますが、之に就て我々は如何なる感情を起すべきでムいませうか。

(2)—先づ二十六聖殉教者は我々の祖先であります。由來我國の人は非常に祖先を尊んだもので、「我家の祖先はこんな偉い人であつた、自分は何某の子孫である、この祖先に對して恥しい事はされない。生命は投棄てゝも、我家の名を恥しめてはならぬ。人は一代、名は末代」と平生から心掛けて居たものであります。所で二十六聖殉教者は、僅に六名の外國宣教師を除けば、他は殘らず生粋の日本人、信仰の初花として主に獻げられた日本人、我々の名譽ある祖先、世界の何處に持出しても恥しくない立派な祖先であります。我々は平生この祖先を仰ぎ尊び、この祖先の花も實もある御鑑に則り、世界の何處へ持出されても恥しくない、流石は二十六聖殉教者の子孫だけあつて感心だ、と譽めはやされる所はあつても、あの立派な祖先にも似合はぬ、何とまあ拙らない子孫だらう、と笑はれる樣な事がないやう心掛けねばならぬのであります。然るに實際は如何でせう。

祖先は寒さを惧れず、身の痛さを惧れず、人の輕侮、凌辱を惧れず、二百里からの遠路を冬の眞直中に引廻され、二つとなき生命までも喜んで神に獻げられました。然るに子孫たる我々には夫しきの

勇氣があるでせうか。僅かの寒さにもびく〳〵し、少しの辛さでも堪へ得ない、一口の嘲弄にも怖氣を出して、自分の大切な義務すら怠りて居ることはないでせうか。

(3)—二十六聖殉教者は我々の祖先であります。一切の物を潔く抛棄て、神への奉仕を執守つて動かなかつた感ずべき祖先であります。中にもルイ茨木の如きは今年取つて僅に十二歳、敎を棄てたら、生命を助けて、偉い人物に取立し、やる、と護送の役人に勸められ、も、直に頭を横に振りました。「此世の榮華は水の上の泡、たゞ何時までも窮りなきは天國の快樂のみであります」と答へて、役人を驚かしたと云ふことである。我々の祖先は斯んな樣に、榮華の光を見せびらかされても、快樂に手招きされても、決して夫れに迷はされないで、飽まで天主樣の誠を守り、天晴な殉敎の冠を得られたのであります。

然るに我々は如何、朝も晩も夜も晝も何を考へ、何を望んで居ますか？たゞ〳〵偉い學者にならう、高く昇らう、大に儲けよう、人に譽められよう、身を樂まさうと、たゞ夫ればかりを冀つて居ないでせうか、信心をしよう、主の御目に偉い人とならう、善德の金滿家にならうとは、一向考へたこともないと云ふ鹽梅ではありませんか。夫れでは何うして殉敎者を祖先に持つて居る信者だ、等と威張られたものでせうか。

(4)—二十六聖殉敎者は我々の祖先であります。この二十六聖中には六十歳以上の老人もあれば、亦ルイ茨木やアントニオの如き十二、十三歳の小兒もありました。パウロ三木の如き士族もあれば、ヨハネ喜左衛門の如き商人もあると云ふ樣に、年齡から、身分から、職業から一々違つて居たのですが、何れも篤く聖敎を信じ、爲にその二つとなき生命までも喜んで投棄てたのであります。是も我々の立派な模範ではないでせうか。主に仕へ奉つるには年齡が何らの、身分職業が斯うの、と云ふことは少しもありません。老人であらうと、小兒であらうと、裕福な人だらうと、其日暮しの貧しい身であらうと、神への奉仕に妨となるものではない。そんな點を口實にして、信者の務を怠る樣なことがあつてはならぬのであります。

聖アントニオは時に年甫めて十三、可愛い盛であつたものですから、途中に出迎へた父親は、恩愛の情に絆され、「お前はまだ年が若い、大きくなつてから殉敎しても晩くはあるまい」と云つて、その殉敎を妨けようとしました。然しアントニオは斷然その勸めを退け、「天主に生命を獻けるのに、年の長幼はありません。彼の罪なき嬰兒は牛れて間もなく、キリスト樣の爲に殺されたじやありませんか」と答へて、びくともしませんでした。

惡魔はなか〳〵口說き上手です。德を修めるにつけても、年齡や仕事や暮向を口實にして、一日一日と延期させ、死んで墓に入るまでも延期させようとするのだから、ゆめ〳〵その手を喰つてはなりません。我々は殉敎者の子孫である。殉敎者の如く、年が若からうと、老ぼれて居ようと、そんな

ことはどうでもよし、たゞ生きて居る間は、一日も、片時も、主の爲に生きて居る、主の爲に使用して行くと云ふ樣に務めなければなりません。今日の祝日に當つて、是非ともこの決心になりたいものであります。

（二）日本二十六聖殉教者（聖堂の擁護者として）

(1)—二十六聖殉教者の祝日は、日本全國の大祝日でありますが、この聖堂の擁護者としては、取分け當教會の大祝日でありますから、此序を以て教會と云ふものは如何なるもので、信者たるものは自分の教會に對して、如何なる義務を負はねばならぬか、と云ふことを一言申上げたいのであります。

抑も教會なるものは一個の團體である。人が生れると之に洗禮を授けて靈名を附けるが如く、教會と云ふ團體にも、聖堂が出來て、教會の形が備はると、之に聖人の名を附けて、その聖人に聖堂の擁護を托すると共に、その教會をも保護していたゞくのであります。

然らば此處に聖堂が出來、この教會の設置せられたのは何時であるかと云へば、今より幾十年前、即ち千八百何十年のことで、某主任司祭は之に二十六聖殉教者の名を附け、その御保護を賴むことに定められたのであります。して見ると、この教會は可なり古い教會、年齢から云へば幾十歳、もう隨分善い年齢ではありませんか。然らば餘程成長して居るだらうと思はれますが、悲しい哉、年齢は幾十になつて居ながら、體を見ると、まだほんの子供であります。

(2)—抑も教會と云ふ團體が成長するには、内と外と双方に發展して行く必要があります。内は益々信仰熱を温め、忠實に神の掟を守り、務めて善業を勵む信者が多くなると共に、外は未信者の改宗して來るものが、日にその數を加へなければなりません。

然るに當教會は何方から觀ましても、年齢に釣合つて成長して居ると思はれません。先づ未信者の改宗によつて外に擴がると云ふことは極めて少い。夫れは皆さんの責任でないかも知れぬが、然し布教は司祭や傳道士のみの擔當に屬し、信者は全く與り知らぬ、信者はたゞ天主の十誡、聖會の制定を型の如く守りさへすれば澤山だと考へて居ては、大きな大間違ひであります。天主の十誡は之を大別すると、神の愛と人の愛との二つに約まるのでせう。して未信者、路に迷つて居る彼の哀な未信者を、眞の道へ案内すべく務めないでは、神を愛すると共に、人を愛すると申されますでせうか。

内は如何に成長して居ますか。信仰は暖まり、善業は盛に行はれ、聖堂に出入するもの、ミサ聖祭に與るもの、眞の信心を以て御聖體を拜領するものが、年と共に多くなつて居ますか、青年は罪の巷に走らずして、益々身を清淨に保ち、信心の路に進みつゝありますか。親はいよ〳〵注意して子供の教育に力を盡して居ますか……私は當地へ參りました頃、「あまり嚴格過ぎる」だの、「今少し易くして欲しい」だのと云ふやうな注文を承つたこともありました。それこそ「あまり成長しては困る、

成長すれば自分で働いて食べねばならぬから、何時迄も子供にして置いて貰ひたい、何時迄も親の膝の上に抱へられて、乳ばかり飲まして置いて戴きたい」と云ふのも同樣でせう。顏だけはもう善い加減に皺枯れて居ながら、胴體は何時までも幼少年であるとは、醜い不具者ではありませんか。考へても見なさい、我長崎教區の各教會は皆舊信者の教會、八代も十代も前から信仰を續けて來て居る信者の教會で、當然他の新しい教會の模範と仰がれねばならぬ。「某教會を見なさい。天主の誡を守り、聖會の制令に從ふにしても、信心の務を果すにしても、祈を誦へるにしても、彼の教會の如くにあらねばならぬ。流石は舊信者の教會ほどあつて違つたものだ」と感心される位にならなければならぬじやありませんか。

所で殘念なことには、なか〳〵其處まで行つて居ない。それは固より土地の所爲でもありませう、皆さんの身分職業にも原因しませう、皆さんを教導して居るこの司祭が拙らないからでもありませうけれども一つは皆さんの奮發心が足りないからではないでせうか。自分の教會は舊信者の教會、日本諸教會の總領であり、隨つてまた模範であらねばならぬと云ふ考へが足りないからではありますまいか。自分の教會を愛すると云ふ觀念が乏しい、是非ともこの何々教會を立派になしたい、この教會より罪惡の草を根絶やして、反對に善德の花を咲かせたい、內にも外にも大に成長發展させたいと、大に奮發して下さるお方が誠に少い、自分の教會は如何なる聖人を擁護者に戴いて居るか、その聖人はどんな偉い御方で、どんなに立派な御鑑をお遺しになつたか、と云ふことさへ一度も考へたことのないお方が少からぬ爲ではありますまいか。せめて今日この祝日に當つて、二十六聖殉教者とは如何なる御方であるか、それだけなりとも考へて戴きたいものであります。

(3)—二十六聖殉教者等は、慶長元年十二月(一五九六年)太閤秀吉の命によつて、京都、大阪地方で捕へられ、翌年一月三日に耳の先を削がれて京都を引廻され、それから大阪、堺等を經て、徒步で長崎へ送られなさいました。その二十六人の中に六名だけが外國人で、他は皆我々同樣日本人でありました。其中には六十歲以上の老人もあれば、僅に十二歲、十三歲になる子供もありました。親の腹から信者であつたお方ものりますが、最近洗禮を授かつたばかりの人もありました。それにも拘らず、年中の一番寒い一月から二月にかけて、二百里以上も引廻され、漸く二月五日に長崎に到着されました。其間の艱難苦勞と來ては、それこそ心も言もなか〳〵以て及ぶ所ではなかつたでせうが、然し殉教者等は些も悲む色さへなく、むしろ喜び勇んで設けの刑場へと走せ登られました。我家を捨て、親兄弟に離れ、妻子と別れて、云ふにも云はれぬ艱難苦勞を嘗め盡した上で、終にその生命までも潔く天主樣に獻げて十字架に縛りつけられ、槍を以て左右より十文字に胸を突き通されて天晴な殉教を遂げられたのであります。

立派な御手本ではありませんか。是は外國にあつたことでない、我日本にあつた事で、而も我長崎

にあつた出來事であります。當教會は斯んな偉大なる聖人等を擁護者に戴いて居るのであります、斯んな勇壯なる聖人等を鑑として仰いで居るのでありますが、さて皆さんの上を顧みて御覽なさい。彼の殉教者等に對して、ちと恥しい所がありませんでせうか。彼の殉教者等は「信仰を棄てよ、棄てないと殺すぞ」と云はれて、「そんなら殺して下さい、何んなことがあつても、信仰だけは棄てません」と云つて殺されました。今皆さんには、「教を守れ、信仰を重ぜよ」と天主樣は勿論、親も兄弟も、司祭も政府までが云つてくれませんか。「信仰を守れば殺すぞ」ではなくして「守らなくちや罪になるぞ」と云つてくれるのですが、それにも拘らず、何うかするとその教を守るまい、棄て置かうと致しませんか。彼の殉教者等は家を捨て、親兄弟を離れ、妻子に別れ、生命までも抛つて天主樣に仕へました。皆さんは天主樣に仕へ奉つるのに、そんなに苦しい犧牲を拂はなければなりませんでせうか……彼の殉教者等は、こんな寒い時分に二百里以上の遠い途を歩かされなさいました。皆さんは如何でせう?……少し寒くなると、一町か二町の道を歩いてミサに參與つたり、說教を聽いたりするのでも太儀に思ひ、動もすると、怠り勝ちではありませんか……それでは何うして殉教者の血統を引いて居るのだ、忝くも聖人等の子孫だと威張られたものでせうか、夫れでは何うして殉教者を擁護者として居る教會の信者と云はれ得ますでせうか。

何うか皆さん、是れからは自分の教會の擁護者は何んな偉い聖人であるか、天主樣の爲にどんな辛い目を見、苦い目にお遭ひなさつたかと云ふことを考へて、自分も聊か其聖人等に倣ひ、天主樣の爲には少し位の寒さ、少し位の辛さを堪へて、信心の務を勵み、日本諸教會の總領たる我長崎教區に、その名を知られて居る當教會が、顏も胴體も相當に發達し、よく釣合の取れた恰好となる樣、お勵み下さい。さうしましたならば、たとへ血を流さなくとも、生命は棄てなくても、天主樣の爲に寒さや辛さを厭はずして、盡しました所は、殉教するのと同樣の價値があるのですから、立派に殉教者等の仲間入をして、彼等と同じ御褒美を戴くことが出來るのは疑を容れない所であります。

(三) 日本二十六聖殉教者

(1)—この殉教者の中には、萬里の波濤を凌いで我國に渡來し、聖教の宣傳に從事せし外國宣教師があり、我皇國に生れ、初めて聖教の光に浴し、眞の道に歸依せし我等の同胞、不、祖先もありました。何れも時の非運に遭ひ、佛僧等に讒訴せられ、覇主太閤秀吉の逆鱗に觸れて、劈頭第一聖教の爲に膏血を絞り、榮ある殉教者となつて、歸天せられたのであります。我々はこの慶い記念日に當りまして、滿腔の熱血を濺ぎ、以て殉教者等の光榮を讃美すると共に、またその美しい御鑑に則るべく務めなければなりません。

聖書に「我等は聖者の裔なり」と曰つてあります。不肖ながらも我々は殉教者等の後裔と生れ、文

物隆興の聖代に遭ひ、易々と祖先の信仰を續けること出來るのは、何といふ幸福でございませう。宜しく之を天主樣に感謝し、併せて祖先たる殉敎者等の如く、內は忠實に信仰を守り、外は大膽に熱心に、堅忍不拔の精神を以て、聖敎の宣傳に當るとか、それに手傳ひするとかして、彼の祖先に恥しからぬ良信者になりたいものではムいませんか。

(2)—凡そ一家の名譽を揚げ、一身の利達を謀ると云ふは、人間自然の情であります。然るに殉敎者等は、世の富貴榮華を顧みず、その身の安樂も掛換のない生命までも拋ち、罪なくして屠場に曳かれ、あらゆる辛酸を嘗め、從容として十字架上に眠られました。是れ畢竟するに一時の苦痛を堪へ忍んで、永遠の福樂に入り、地上の儚い榮華を棄てゝ天國の窮りなき褒賞をかち得たいと云ふ天晴な志を抱いて居られたからであります。彼等がこの犧牲の精神は今こそ十二分に報いられ、キリストの玉座近く侍り、殉敎者の榮冠を戴き、無窮の福祉を樂んで居られるのであります。犧牲の精神！殉敎者に尊ぶべき所、その又なき眞鑑と仰ぐべき所は、實にこの犧牲の精神ではありませんか。彼等はその信仰を全うせんが爲め、自己の信ずる眞理を一人にでも多く傳へんが爲めに、一切を犧牲に供したのでありました。その懷しい親兄弟も、その可愛い妻子も、その所持せる財產も、世の富貴榮華も、否、二つとなき生命までも拋つて惜まないのでありました。

我々も信ずる通りに實行し、花も實もある良信者となるには、否、進んで自分の信ずる所を一人にでも多く傳へるには、時間や、金錢を惜まず、一身の安樂を拋ち、時としては不名譽を買ひ、冷笑はれ、陰に陽に迫害され、除け者にされる樣なことがあるべきは、覺悟の前でなければなりません。

然しそんな目に出遭しても、猶且つ信仰を固執して動かず、我身がキリストの弟子である、カトリック信者である、と云ふのを何よりの名譽とし、その名譽を他にも頒つべく奔走してこそ、初めて日本帝國のカトリック信者である、榮ある二十六聖殉敎者の後裔である、他日天國に於て、殉敎者等の輝かして居られる榮冠を戴き、彼の殉敎者等の如く、永遠無窮の福祉を擅にすることが出來るのじやありませんでせうか。

ルルドに於ける聖母の御出現　（二月十一日）

(1)—聖母マリアは、救主耶蘇基督の御母たるべく天主樣に選まれなさいましたから、アダムの子孫でありながら、原罪の汚に染まずして、母の胎內におやどりになつたことは、皆さんの御存知の所であります。昔からカトリック信者は皆然う信じて居たのですけれども、聖會ではまだそれを信仰個條に加へて居ないのでありました。

然るに千八百五十四年、時の敎皇ピオ九世は、全世界の司敎、信者等の切なる願により、聖母マリアが原罪の汚なくやどされ給うたことは、天啓に基ける眞理で、信者たるものは必ず之を信じなけれ

ば、救靈を得られないとお決定になりました。

(2)—夫れから四年を經て、千八百五十八年二月十一日、聖母マリアは、フランスの南方ルヽドに於て、ベルナデッタと云ふ十四歳の少女にお顯れになつたことは皆さんの御存じの所でありませう。

ベルナデッタの家は極く貧乏で、晝飯を用意する薪さへなかつたものですから、このベルナデッタは妹のマリア、同じ年頃の友達と三人連れ立つて、ガヴと云ふ溪流の岸に薪を拾ひに行きました。然るに川の向に聳えて居るマスサビエルと云ふ大きな岩、その岩に突然大風のやうな響がしましたから、驚いて四邊を眺めましても、樹葉一つ動いて居ません。ベルナデッタは不思議に思ひ、頭を上げますと、愈々以てびつくり仰天しました。

岩には楕圓形をなした天然の洞穴がありましたが、その洞穴の中に、一人の貴婦人、それは〳〵靈妙な光明に包まれた、云ふにも云はれぬほど美しい貴婦人が、この方を向つて立つて居ます。其衣は眞白に照り輝き、頭に被つて居る白い被布は肩の邊まで垂れ下り、帶は空色の如く蒼く、足は素足で、輕く岩を踏まへ、各々一個の金色に輝いた薔薇の花を以て飾られ、兩手を恭しく合せ、ロザリオを腕にかけて居ました。是が聖母マリアであることは後に至つて知られたのであります。

この時より聖母は引續いて都合十八回、お現れになりました。四回目の御出現の時、聖母はベルナデッタに、「私は其方を幸福にして上げませうが、然し此世に於てゞはありません」と仰せになりました。

二月十四日の御出現の時、聖母はベルナデッタに、「泉に行つて水を飲み、顏を洗ひなさい」とお命じになりました。ベルナデッタは、「泉」と云ふ聲を聞いて、四邊を見廻はしても、別に泉らしいものは見つかりません。よつて聖母を眺めながら、ガヴ河の方へ往きかけますと、聖母は身振で以て之を止め、「其處に行くのではない、私はガヴの水を飲めとは言ひません。泉に行きなさい、それ此處に在るのです」と云つて、洞穴の左方を指示しなさいました。そこでベルナデッタはその指示された處を指の尖で堀りますと、不思議にも水が滴一滴と湧き出ました、其水も初めは泥土が混り、濁つて居ましたが、終には水晶の如く立派な清水となりました。此水こそルヽドでは勿論、世界到る處に送られて、今にも無數の病人を癒しつゝあるのであります。二月二十六日にお現れになつた時、聖母は、ベルナデッタに「司祭の許に行つて、此處に聖堂を建てるやうに……、私は信者が行列をして此處に祈るのを望むと告げなさい」と仰せになりました。

三月二十五日御告の祝日にベルナデッタは御名を尋ねました。最初二度までは、たゞにつこと微笑んで、何ともお答へになりませんでしたが、三度目には熱心に兩手を合せ、天を眺めつゝ、「私は原罪の汚なきやどりです」とお答へになりました。是は第十六回目のお現れでありまして、第十八回目、即ち最後の御出現は七月十六日のことでございました。それから久しからずして、ルヽドには大きな聖堂が建ち、世界の四方より毎年〳〵馳せ集る參詣人は何萬人と數へられ、醫者にも見捨てられた病人が、

其ルヽドの水で忽ち平快するものも實に夥しく、ルヽドは世界に又なき有名な靈地となりました。

(3)—今私はベルナデツタにお顯れになつた聖母の御姿に就て、少し申上げたいと思ひます。聖母は兩手を交み合せ、少しく天を仰いで居られました。天が我々の故郷であるぞ、この世は旅の空、旅の空には難儀苦勞があるのは當然のことで、此世で樂をしよう、愉快を極めよう、樂しまうと夢にも思つてはならぬ、と敎へ給うたものではないでせうか。だからベルナデツタにも「私は其方を幸福にして上げませうが、然し此世に於てではありません」と仰しやつたでせう。我々にも聖母がさう仰しやつて下さるものと思ひ、此世よりも天國を、此世の福樂よりも、天國の福樂を俟ち望むやうに務めなければなりません。

次に聖母は頭に白い被布を被り、身には、白い服を着流して居られました。この白い被布と白い服、其こそ聖母が身も心も清淨潔白で、罪の汚れ一つないことを表したものではありませんか、實に聖母はたゞ口で「私は原罪の汚なきやごりです」と仰有つたばかりでない。また實際、頭には少しの汚らはしい思、望でも浮べ給うたことなく、御體も爪の垢程の罪にすら汚し給うたことなかつたのであります。そして始終この白い被布と白い服とを以て、「心を清淨にせよ、身を潔白に保て」と御注意になつて下さるのであります。なるほど我々は原罪の汚を以て生れたものですから、隨つて罪に傾き易い、少しも汚れないと云ふことは、到底出來ないのでありますが、然し聖母の御助に縋りましたならば、少くも知りつゝ身や心を汚さないことだけは、決して出來ないものではありません。

(4)—蒼色の帶は何の象徴であつたのでせうか。帶は衣服を締めくゝるもので、身を取締れ、邪慾氣慾に流れるな、世の快樂に耽つてはならぬぞよ、と敎へたものではありませんか。ベルナデツタにも「償ひ、償ひ、償ひ」と三度もお叫びになつたことがあります。そんなに身を取り締つて行つては、何處に愉快があるか、人間に生れた甲斐もないではないか、と云ふ人がよくありますが、決してそんなものではありません。かへつて身を取締り、苦を堪へ忍び、我慾を制し、痛悔をし、苦行を果してこそ、始めて眞正な愉快が味はれるものだ、と敎へんが爲に、其帶は蒼色をして居ました。蒼色は喜悅の象徴である。我々も身をよく取り締り、勝手な振舞をせず、何處までも清淨潔白を保つてこそ、始めて眞正な幸福、極りない喜悅を味ふことが出來るのであります。是は誰しも經驗する所でありまして、心が清淨で、一點の汚もない時と、罪の爲に汚れ果てゝ居る時と、どちらが身に愉快を覺えますか。心に罪の曇が掛つて居る時は、甘い酒を飲んでも、苦く感ずるものではありませんか。

(5)—兩手を合せて居られますのは、祈禱の必要を敎へる爲である。ベルナデツタはそれを見て思はず知らず跪いて祈をしました。聖母御自身もベルナデツタに「人々が此處に集つて祈るのを望む」と申されました。すると忽ち其聲に應じて、世界の四方より參詣人は雲の如く集り、祈の聲は夜も晝も絶える間もないと云ふ鹽梅であります。

其祈の中にも、特にロザリオを熱心に誦へよと、勸めんが爲め、御腕にはロザリオを掛けて居られました。

我々もこの聖母の御勸に從ひ、務めて熱心に祈りませう。「汝等がこの聖堂に參つて、熱心に祈ることを望む、悲しい時は此處に祈つて慰を求めよ、嬉しい時も此處に來て感謝せよ、心が冷えかゝつたと見るや、此處に來て、暖めて戴け、吾親の爲にも此處に祈り、吾子の爲にも此處に祈り、我夫の爲め、我妻の爲にこゝに祈るのです」と、聖母はお命じになります。我々はその御聲を聽き流しにしてはなりません。祈の聲の聽える處には、惡魔は近附き得ないのです。祈の聲の響く處には、必ず天主樣の聖寵が雨降らされるのです。祈を誦へながら地獄に落ちる人は決してありません。特にロザリオは最も聖母の聖心に適ふ祈であります。謂はゞロザリオは聖母マリアに獻げる愛情の接吻です、聖母の御頭を飾る美しき薔薇の花冠です。我々が「慶し聖寵……」と誦へる時、天使聖人等は喜んで聖母の御前に拜伏しなさるのであります。ベルナデツタはロザリオの外に何の祈も知らなかつたのですが、それでもあんなに大きな御惠を戴くこと出來たじやありませんか。

(6)—ルヽドの洞穴には泉が湧き、其泉の水で無數の病人が全快するのであります。然し靈的泉は何處の聖堂内にも、同じく湧いて居ます。目にこそ見えないでも、聖寵の泉は渾々として我々の聖堂内に、殊に聖母の御像の下に流れて居るのであります。盲者は此處に祈つて、その暗んだ目を明けて戴くことが出來る、聾者は此處に祈つて、その塞づた耳を開けて戴くことが出來る。罪の癩病に腐り爛れて居る者も、この聖堂の告白場に入ると、忽ち雪の如く眞綺麗にして戴けます。死んだものでさへ蘇生へることが出來るのであります。しかもルヽドでは、すべての病人が全快すると云ふ譯のものではない、癒えるものは百人に一人か、千人に二人かに過ぎませんが、この聖堂内ではどんな重病者でも、心さへあれば癒えないものと云ふのは一人もありません。

斯樣な次第でございますから、この祝日に當つて、聖母の御出現の次第、その衣服や、御態度、御言葉によつて敎へられる所をよく〳〵汲み取り、我々も聖母の如く淸淨潔白な人、天に憧憬れる人、祈禱の人、殊にロザリオに熱心な人となり、靈魂を淸められ、然る上に、人の靈魂までも之を淸める樣に務めたいものであります。

灰の式の意義

灰の水曜日は四旬節の始であります、昔は四旬節も七週間、八週間、九週間と云ふ樣にその期間が一定して居ないのでしたが、多くは六週間づゝ行つたものであります。然し四旬節中と雖も日曜日には斷食を致さないのですから、六週間では斷食の日數が三十六日しかありません。よつて希臘敎會の人々がラテン敎會に向つて四十日間の斷食を行はないと非難して止まないものですから、無益な爭

をして、不和を醸さない様、四日ほど早めて水曜日から四旬節を始める事にしたのであります。

此日に用ゐる灰は、前年枝の主日に祝した枝を燒いて作つたものであらねばなりません。彼の枝は凱旋の象徴でありました、その凱旋の象徴たる枝を燒いて作つた灰を四旬節の始に信者の頭に被せるのは、つまり謙遜の情を起さしめると共に、天國に凱旋して、その言ふべからざる光榮を樂むと云ふ希望を起さしめる爲でもあります。

古代にあつて灰は喪を表し、哀傷を示したものでした、ダビドはその悲みの大なる事を形容して「灰をパンと共に食せり」と言ひ、ゼレミアもナブコドノソルの怒を免れんが爲に灰を被れ、とエルザレムの人々に勸めました。ニニヴの町人は荒い衣を着け、灰を被つて痛悔をなし、以て天主樣の嚴罰を免されました。實に灰は謙遜、痛悔の情を最もよく表はすもので、我身が塵埃である、やがて塵埃に歸るべきものだ、と云ふことを思ひ出させるのに誂向きでありますから、聖會も舊約時代の習慣を棄てないで、之を其典禮中に取り入れました。毎年四旬節の初に司教は部下の聖職者を從へて聖堂の門に立ち、公の償をなすべき人々の頭に灰を被せ、罪の爲に死すべきはずになつて居ると云ふことを思ひ出さしめ、その式が終るや、彼等を聖堂から出して一定の期間内は聖堂へ這入るのを許さぬのであります。

十一世紀頃からすべての信者に、灰を被せる習慣が行はれるやうになり、後で公の償は廢止されましたけれども、灰を被せる式だけは今日まで遺つて居るのであります。

司祭は灰を頭に被せる時、昔し天主樣が第一の犯罪者たるアダムに「汝は塵埃にして又塵埃に歸るべきものたることを覺えよ」と仰しやつた聖言を其儘くりかへします。そして各人に死の免るべからざること、而かも此身は何時しか死んで腐つて塵埃に歸るべきことを思ひ出させて、傲慢を挫け、快樂に溺れるなと戒めるのであります。帝王の身も乞食の体も本は同じ土から出たもので、一度は必ず元の土に歸らねばならぬ、幾ら肉體を撫で擦つて可愛がつても、時としては其爲に大切な靈魂までも拋棄て顧みない程に可愛がつて見た所で、死ねば忽ち一抹の塵埃と化し去るのである、我身すらでの通り儚いものである。況して我身に附屬せる金錢や名譽や快樂やと云ふやうなものが、我身と共に朽ち果て、了はないはずがあらうか、して見ると現世ほど儚い恃み難いものはないのであるのに、我々は始終こんなものに執着して、爲に馬鹿〳〵しい罪を犯すのですから、聖會は四旬節の初め、罪の償を勸めるに際して、先づ世物の如何に恃み難いものであるかと云ふ所を見せて、之を解脱させようと務めるのであります。

猶又この世に於ける我々の生命と云ふものは、生命と云はんよりか寧ろ死の連續とも云つて可い位である。それに我々はこの涙の谷、逐謫の塲を頻りに戀ひ慕つて、千年も萬年も此處に生存へたいと思ひ、一向眼を擧げて天を眺めようともせず、天國の終なき生命を戀ひ慕はふとはしません。そこで聖

會は死の象徴たる灰を各人の頭に被せて、「人よ、汝は塵埃にして、又塵埃に歸るべきことを思へ」と云つて死を思ひ出させ、何時迄も此世に生き存へようと云ふ馬鹿らしい考へを持つよりか、むしろ安心して死なれる覺悟をするのが肝要だ、と敎へるのであります。我々は聖會の思召の在る所を汲み取り、死の遠からざることを忘れず、世物の恃み難きを思つて罪を痛悔する樣、心掛けたいものであります。

四旬節の心得

聖會は四旬節第一主日に當つて、吾主の斷食に就ての福音を讀むことにして居ます。是こそ四旬節が我々信者の爲に祈禱の時である、償の時である、行を改め、德を研くべき時である、と云ふことを敎へ諭したい老婆心から、さうするものではありませんでせうか。實に

(1)—四旬節は祈禱の時である。「常に祈りて止まざるべし」(ルカ一八ノ一)と云ふのは主の聖訓であるが、然し四旬節は特に屢々又熱心に祈らなければならぬ時であります。先づ耶蘇樣が四十日間祈りつゞけて、我々にその御鑑をお示し下さいました。次に聖會が四旬節の初から、こんな福音を讀み聞かせることにして居るのも、我々に祈禱の必要を思はせる爲ではありませんでせうか。終に四旬節は、信者の爲に最も大切な毎年一度の勤を果さなければならぬ時である。毎年一度の勤とは、手ッ取り早く言ふと罪を告白し、聖體を拜領することでありますが、唯この兩秘蹟を授かるばかりで、その勤が全うせられる譯ではありません。眞實に自分の罪を悲み嫌つて、再び之を犯さないと云ふ堅い決心の上より告白をなし、淸い心になつて聖體を拜領しなければならぬ。卽ち今まで邪路に迷つて居た者は正しい途に引返し、今まで眠つて居た者は、その目を醒し、今まで不熱心であつた者は熱心に、熱心であつたものは益々熱心になり、信者らしい信者、花も實もある信者となる必要があるのであります。然しそれは容易からぬことで、我々の敵なる惡魔は恐ろしい力の持主である。その卷きつけた罪の綱はさう易々と切れるものではない。長くの間身に染み込んで居る惡い癖を洗ひ去ると云ふのも、並大抵のことではない。大に天主樣の聖寵が必要である、してその聖寵は祈る人にしか與へられないのであります。

でございますから四旬節中は熱心に祈らなければならぬ。心を改め得る樣、罪の機會に遠かり得る樣、不足の中から、惡い癖の中から拔け出ること出來るやう、益々善良な、十分研きをかけられた、何處から見ても申分のない基督信者となれる樣、誠心こめて祈らなければなりません。自分の爲ばかりでなく、また他人の爲にも祈る必要があります、惡にこびりついて殆んど信者の心を失つて了つた人が斯の狹い敎會內にすら少くありません。冷淡不熱心に流れ、やつと信者の勤を果して行く位の人はザラにあります。熱心な人と云ふ中にも天主樣の誡を破り、聖會の制定に背き、耶蘇樣の聖心を悲ませ奉つる樣な人が、皆さんの隣近所に、或は親族朋友の中にも見付からないでせうか。兎に角、皆さんは自分の爲に祈ると共に、また他人のこともお忘れにならない樣、況んや自分の親しく往來して居る人

の中に、迷つた方がありますならば、殊更ら其人の爲に祈つて上げる樣に致して下さい。朝夕の祈は勿論、平生に倍して熱心にミサに與り、十字架の道行をなし、コンタスを誦へると云ふ樣にして、自分の爲め人の爲め改心の惠をお祈り下さい。

(2)—四旬節は償の時である。世に罪のない人はありません。大なり小なり皆罪を犯して居る、罪を犯した以上は、必ずその償をしなければならぬ。然るに我々は犯した罪に就て平素如何なる償をして居ますでせうか。聖ペトロは三度耶蘇樣を否みましたが、その爲に一生涯涙の乾く間もないほど悲まれたと云ふことですが、我々は如何でせう。一度告白して赦を蒙つた罪に就ては全く安心して了ひ、償をする所か、まるきり思ひ出しもしない位ではありませんか。せめてこの四旬節に當つて、聖會の命ずる大齋や小齋やを正しく守り、少々辛くても口實を設けないで、罪の償だと考へ、立派に之を守ることに致したいものであります。然し大齋と言つても、たゞ金曜日一日だけで、小齋も水曜日と金曜日と二日に過ぎないのですから、夫ればかりでは何うしても足りません。成るべくは病氣や災難をヂッと耐忍ぶとか、家庭に隣近所に自分と氣心の合はない人があり、何か面白からぬことを言はれたり、爲れたりしても、小言を言はないで、それを堪へて行くとか、食物なり飲物なりも罪の償と思つて多少控目にして置くとか、或は又己が職分の勤、毎日〳〵遣つて行かねばならぬ仕事を罪の償と云ふ考で立派に果すとか云ふ風にしなければならぬ。罪の爲に蒙るべきであつた地獄や煉獄の罰を思ひなさい。この世の償、ホンの僅ばかりの償が果せないはずはありますまい。

(3)—四旬節は行を改むべき時である。既に罪を悲んで償をする位ならば、新に之を犯さない樣にし、斷然行を改めるこそ至當のことではありませんでせうか。然し行を改めるには是非とも罪の機會を避ける必要がある。罪の機會となる場所、罪の機會となる人に遠からないでは、到底罪を避けること出來るものではない。その他遺恨を含んで居る人、復讐をしたいと考へて居る人は、其遺恨を、其復讐の念を棄て快く敵に赦す、商業上、良からぬ事をし、不義な儲をして居る人は、直にその良からぬことを止め、返還すべきものは返還し、賠償ふべきものは潔く賠償ふ、と云ふ樣にしなければならぬ。猶又惡い癖の持主、賭博をやるだの、大酒を飲むだの、放蕩に耽けるだの、そんなことを爲さるお方は皆さんの中には一人でもあるまいと思ひますが、萬一たゞの一人でもありますならば、耶蘇樣の御受難に對しても、斷然それをお止め下さらねばなりません。たとへ左まで甚い癖でないにしても、「無くて七癖」とさへ申しますから、必ずお喋をするとか、腹立易いとか、人を誹るとか、懶けたがるとか、その他種々の癖を有たない方はありますまい。よつて其中の一つでもこの四旬節中に改める樣に工夫して下さいますならば、幾れほど主の御心を喜ばせ奉つるに至るでございませうか。

(4)—終に四旬節は德を研くべき時である。たゞ罪を痛悔したり、償をしたり、罪に遠かつたりした

ばかりではまだ足りない、務めて善を行ひ、德を研くやうにせねばならぬ。德と云ふものは「心を善に傾ける習慣である」から、一度や二度、善いことをしても、德とは申されません。幾度も〳〵その善いことを繰返して、もう易々とそれを行ひ得る樣になつた時、始めて德と云はれるのであります。だからこの四旬節中に惡い癖を取り除けると共に、また立派な習慣を養ふやう努めましたならば、夫れが後々迄も遺りまして、何時しか善良な基督信者となることが出來る譯であります。さればこの四旬節を機として屢々ミサを拜聽したり、熱心に說敎を聽いたり、信心の書を讀んだり、每朝少し宛でも默想をしたり、成るべく頻繁に告白もし聖體も拜領し、いよ〳〵謙遜に、忍耐强く、心より人を愛し、喜んで施をなし、親の務を立派に果して、子供の敎育に眼を注ぐ、と云ふ樣にして欲しいものであります。

我々は年々歲々四旬節を勤めながら、夢の樣にして之を過して了ひますから、何の益も蒙ることがない、行も改まらず、善業も行へず、何時まで經つても德の途に進出する所なく、常に同じ所をぐる〳〵と回轉して居る、誠に以て愧かしい次第である。何うか本年は是非とも大奮發をして、惡い癖はきれいさつぱりと切棄て、その反對に立派なカトリック的習慣を養ふことにしたいものであります。

聖ヨゼフ祝日（三月十九日）

（一）聖ヨゼフの權力の大なること

(1)—高い大きな幾十階ものビルヂングがあると致しなさい。その高さを知るが爲には、わざ〳〵頂上に登つて綱を當て見なくとも、其影を測りさへすれば澤山であります。今聖ヨゼフは聖母マリアの夫、イエズス、キリスト樣の養父とし、その位は貴く、その權力は勝れ、屹然として高く諸天使諸聖人の上に聳え、其大小高下は容易に知るべくもない、之を知る爲には何うしても其影を測つて見なければならぬ。影は舊約のヨゼフに在ります。ヨゼフは夢に日と月と十一の星とが自分の足下に平伏して敬禮するのを見ましたが、後果してエジプトの副王となり、位、人臣の榮を極め、菅に親、兄弟のみならず、全エジプト國民までが、其足下に拜伏すに至りました。影さへ斯の如くであれば、其形は如何許りでせう。考へても御覽なさい、聖ヨゼフは聖母マリアの夫、イエズス、キリスト樣の養父でした。天使と聖人の元后ご仰がれ給ふ聖母マリアが、夫として之を尊敬されました。天地萬物の君たるイエズス樣も父として孝養を盡し、父として服從されました。その位の高く、その權力の大なること、誰かよく之を測り知ること出來ませう。して聖ヨゼフは斯位、斯權力をば死後失ひ給うたと

は思はれません。シエナの聖ベルナルヂノは曰ひました、「イエズス様は現世に在す時、聖ヨゼフに對して尊敬、孝愛を怠り給はぬのでした。天にお上りになつてからも、之を怠り給はふとは信じ難い、否、一層厚く孝愛を盡し給ふことは疑ひを容れざる所であります」と。實に聖母マリアを除くと、天上天下聖ヨゼフより位の高い聖人、聖ヨゼフより權力の勝れた聖人は又とないのであります。

(2)—聖ヨゼフの位は斯くも高く、聖ヨゼフの權力は斯くも勝れて居ますから、我々は大に聖ヨゼフに信頼み、常にその御保護を祈らなければならぬ。聖テレジアは殊の外聖ヨゼフを敬愛し給ふのでした。人が聖ヨゼフに依り頼むのを見ると、大層之を喜び、「私は何事によらず必ず聖ヨゼフに頼みます。頼んで聽かれないことがありません」と曰つて居ました。又有名なゼルソンと云ふ學者は「夫が其妻に、父が其子に祈る時は、命令も同樣だ」と云つたことがあります。實に天國に在つて、他の聖人等は祈るのですが、聖ヨゼフは命令するのです。イエズス樣でもマリア樣でも、決してそれを拒絶し給ふはずがありません。

(3)—昔しエジプト王はヨゼフに一切を打托せ、人民が「麥を賣つて下さい」と願ひ出るや、「ヨゼフに往つて願へ」と答へ、何から何まで、ヨゼフの指圖通りにさして、自分は少しもそれに干渉しないのでした。今天主樣も「聖ヨゼフを立てゝ己が一家の主となし給ひ、その總ての所有物を宰らしめ給うた」のでした。「總の所有物」の中に最も勝れた所有物たるイエズス樣、マリア樣すらも、宰らしめ給うた位ですから、我々が何かの御恵を願ひ出ると、亦エジプト王の如く、「ヨゼフに往つて願へ」と仰有つて下さるに相違ありません。

聖ヨゼフはたゞ位が高く、權力が勝れて居られる、ばかりでなく、また心ばせは優しく、情もあつく在す上に、慈愛の神なるイエズス樣、憐の母なるマリア樣と多年寢食を共にし、大に其愛情の焰に燃え立つて居られました。御自分も貧賤窮乏の中に世を渡り、我々の疾苦をよく分つて居られますので、心から依り頼むものを決して却け給はぬ。屹と憐を垂れ情をかけて下さる。だから聖ヨゼフに往き、聖ヨゼフに縋るものは必ず聽き容れて戴く、期待を裏切られる樣な氣遣は斷じてありません。

だから聖龍が欲しければ、聖ヨゼフに往きなさい。病に苦む時、憂ひ悲みに沈んだ時、聖ヨゼフに往きなさい。惡魔に襲はれた時、不潔の思に攻められる時、傲慢の心、自己愛の念に取付かれた時、聖ヨゼフに往きなさい。寢るも、起くるも、學ぶにも、祈るにも、聖ヨゼフに往きなさい。聖ヨゼフは必ずお聽き容れ下さる。殊に聖ヨゼフはイエズス樣とマリア樣の手厚き看護を受けて御死去なさいました。されば安全、幸福な死を遂げたいと思はゞ必ず聖ヨゼフに往きなさい。「私は聖ヨゼフに頼んで聽かれないことがない」テレジアの御言は決して我を欺かないのであります。

終に聖ヨゼフはキリスト樣の心を以て己が心となし、基督樣の好み給ふ所は自分も之を好み、基督樣の嫌ひ給ふ所は自分も之を嫌ひました。基督樣の思は聖ヨゼフの思で、基督樣の言、行は聖ヨゼフ

の言、行でした。是れこそ基督信者の又なき美鑑ではありませんか。若し我々がこの美鑑に則るべく務めましたら、聖ヨゼフは特に喜んで我々の祈を傳達ぎ、何事に由らず我々の爲に周旋して下さるに相違ありません。

（二）ヨゼフの三大德

(1)—聖ヨゼフを尊敬し、聖ヨゼフに助けて戴くには、聖ヨゼフの御德に則る所があらねばならぬ。たゞ口でのみ聖ヨゼフを尊敬し、口でのみ聖ヨゼフに依り賴んでも、其行爲が聖ヨゼフの德に反對して居ては、聖ヨゼフも決してお喜びにならない、決して我々の祈をお聽き入れ下さらない。

福音書には聖ヨゼフを「義人」（マテオ一九）と呼んである。「義人」とは神の律法を忠實に守る人を謂ふのであります。聖ヨゼフは「義人」でした。律法を忠實に守れる義人でしたから、それだけ總ての德に秀でゝ居られました。然し其中に取り分け秀でゝ居られた德、又我々の取り分け則るべき德は謙遜、貞潔、從順の三つであります。

(2)—聖ヨゼフは謙遜に秀でゝ居られました。其族籍はと云へば、王者の後裔、其德行はと云へば「義人」、其位はと云へば、聖母マリアの夫、救主の養父、天下廣しと雖も、聖人君子多しと雖も、聖母マリアを除けば、誰か聖ヨゼフの右に出るものがありませう。けれども聖ヨゼフは深く自ら謙り、賤しい職業を營み、貧しき生活をなし、全くそれに滿足して居られました。富貴になりたい、樂に暮したい、榮華な眞似をして見たい等の欲望は夢にも有ち給はぬのでした。イエズス樣が三十年の間もナザレトに隱れ、その神たる事を人に知られ給はなかつたのは、聖ヨゼフの謙遜が之を掩ひ隱して居たからであります。そしてイエズス樣がいよ〳〵福音を說き、奇蹟を行ひ、人に尊敬せられ、先生と呼ばれ、救主と稱せられ、基督と仰がれ給ふ時は、聖ヨゼフはもう世に在さぬのでした。實に聖ヨゼフの謙遜ばかりは、感ずべきの至りじやありませんか。皆さんも聖ヨゼフに倣ひたいと思ひなさるならば、亦貧しい生活を厭つてはならぬ、賤しい職務を避けてはならぬ、衣食住の不自由を推し耐へなさい、自分の才能に誇らず、學藝を包み隱し、人に尊ばれ、先生と呼ばれ、人の上に立ち、人に號令したいと思ひなさいますな。

(3)—聖ヨゼフは貞潔に秀でゝ居られました。實に聖ヨゼフの貞潔は高く天使聖人等の上に抽んでゝ居ました。さもなくば天主樣が之に御獨子を托け給ふはずがなく、聖母マリアの童貞を保護せしめ給ふはずもありません。「福なる哉、心の淸き人、神を見奉つるべければなり」とは、聖ヨゼフの如き御方を謂つたものでムいませうか。我々も屢々主の御聖體を拜領し、聖母マリアとも始終相親み、その御保護を忝うして居る。否、キリスト信者として主の權利を擁護し、聖母の名譽を弘め奉つらねばならぬのですが、それには、どうしても、聖ヨゼフに倣ひ、其身〳〵に適當な貞潔を守らなければ

ならぬ。貞潔の人でなければ、到底それだけの務は果せないのであります。

(4)—聖ヨゼフは從順に秀で、居られました。我々は聖ヨゼフの從順を思ふ毎に腹の底から驚嘆せざるを得ません。「嬰兒と母とを携へてエジプトに遁れよ」と天使の命を承るや、一寸の猶豫もなく、直に母子を伴つて發足されました。住馴れた故郷を打棄て、言語も異なり、風俗も異なり、宗教も異る遠國異郷に赴くのは、人情の得て忍び難しとする所であります。たとへ聖ヨゼフは聖人であるとは云へ、故郷を懷しむ情に於て他の人と異るはずがありませうか。然し聖ヨゼフは天主様の御命令と聞くや、直様はね起きて發足されました。我々が聖ヨゼフでしたら、言に出さないでも、責めては心に何と思つたでせうか。エジプトへの道は荒野が幾十里と相連つて、人畑は稀に、盜賊は出沒し、危險この上なしである。如何しませう、天主様は御存知ないのでせうか、と思はなかつたでせうか。然し聖ヨゼフは決して然う思ひません。我々ならば、イエズス様は天地の大君である、百千のヘロデありとも何ぞ恐るゝに足らん。それに敵の手を遁れんとて、態々遠く外國に逃げ隱るゝの要あらんやと思つたでせう。然し聖ヨゼフは決して然う思ひません。エジプトに遁れるより、寧ろ東に走りて、博士等に賴つたら必ず手厚い待遇を受け、旅の憂目も忘れるであらう、エジプトは偶像教國だ、親戚もなく、知人もない、如何にして母子を養はうと思つたでせうが、然し聖ヨゼフは決してさう思ひません。冬は寒い、夜は更けて、用意も整はず、明日を竢つて行つても晩くはあるまい、と我々ならば思つたかも知れぬが、然し聖ヨゼフは決してさう思ひません、天主様の御命令と聞くや、取る物も取り敢へず、即夜途に上りました。誰か聖ヨゼフの從順を見て驚かないで居られませう。

今の人は何事に關らず、自由と云ひ、權利と云つて、一たび命令が出るや、內は心に問ひ、外は人と論じて、この命令は果して合理的だらうか、不合理的ではあるまいか、合理的命令には從はざるを得ないが、無理不法の命令は、彼も之を命ずる權利なく、我も之に從はざるの自由がある、盲從は大丈夫の恥とする所だ、等と唱へるものが多い。斯る人の目から見ると、聖ヨゼフの從順は卑屈極まるものでありましたでせう。然し天主様の御目には梅櫻の麗はしき花と映じたのであります。皆さん、鏡の前に立つと面の美醜が見える。聖人の前に立てば、德の善惡が瞭然と顯はれるものです。何うぞ聖ヨゼフを以て鑑となし、皆さんの日々の行爲、特に從順の德の如何をお察し下さい。

聖母への御告（三月二十五日）

（終生童貞に就て）

大天使ガブリエルは天主様に遣はされて、聖マリアの御前に現れ、神の御母たるべく選まれ給うた由を告げました。それを聞かれた聖マリアは、著く打驚き「我夫を知らざるに如何にしてかこの事あるべき」とお尋ねになりました。結婚さへしたら、子の母となるのは當然でありますのに、聖マリア

が餘程御心配なさつて、斯んなにお尋ねになりましたのは、豫てより童貞を誓ひ、飽まで之を守り通さうと決心して居られた證據ではありませんでせうか。抑も聖マリアが神の御母たると共に、また終生童貞にて在すといふことは、カトリック信仰個條の一でありますが、さてその所謂「終生童貞」とは果して何を意味するのでせうか。

(1)—終生童貞の意義。先づ聖マリアが御子をやどされたのは聖靈の働きに由るのでありまして、その爲に毫もその童貞美を傷けられ給はなかつたと云ふ意味である。カトリック教會では初からさう教へ、さう信じて居るのであります。次にイエズス・キリスト樣が御母の御胎を出て、世にお生れになります時も、譬へば太陽の光が透きわたつた水晶面を通過しながら、その水晶面に何等の傷をもつけないが如く、また後日キリスト樣が、御墓は蓋石をし、封印までしてあつたにも拘らず、御復活の朝、封印はそのまゝにして出で給うた如く、少しも御母の童貞を傷けずして生れ給うた、とカトリック教會では教へ、且つ信ずるのであります。

終に聖マリアは御子を生み給うた後も、同じく童貞を守り、決して他に子供を擧げ給うたことがない、たゞカルワリオに於て、御子の御遺言により、聖ヨハネを養子とし給うたのみであると云ふことを固く信じ、公に宣言するのであります。兎に角カトリック教會では、聖マリアが御子をおやどしになる時も、お生みになる時も、お生みになつた後も、依然童貞美を少しも傷けられ給ふことがなかつた、と固く信じて居るのであります。

(2)—聖マリアはその童貞を神に誓はれた。ユデア人の胸中に絶えず渦き、彼等をして世間獨特の民だと自惚さして居た思想が二つございました。一つは我こそ世界を支配すべき特殊の使命を帶びて居るのだと云ふ考へで、今一つは自分等の中より世界の大王たるメッシアが生れ給ふと云ふ希望でありました。父母は子女に幼少の頃よりこの二つの思想を吹き込むのでしたから、ユデアの若い婦人は結婚して子を擧げると云ふのを唯一の理想とし、童貞を守るなんて夢にも思ひ得ない、子が出來ないのは大きな恥、神に詛はれたしるしだと信じて居たものであります。

かゝる國民の中に生れ、かゝる雰圍氣内に育てられながら、聖マリアは夙に童貞の美しさを認め、幼少の頃より之を神に誓ひ、飽までこの童貞美を保つて行かうと決心されたのであります。是こそ聖靈のお勸めに出るのでありまして、神が童貞の德を如何ほどお喜びになるかと云ふことは、是を以ても察せられるでございませう。

(3)—童貞と神の御母。斯の如く聖マリアは夙に童貞を神に誓つて居られたのですから、大天使のお告を蒙られた時、「我夫を知らざるに如何にしてかこの事あるべき」と心配してお尋ねになつたのであります。救主がお降りになる、自分はその御母に選まれた、豫言者の告げ置きし救主の御母、ユデア人が寝ても起きても忘れ得ない、絶えずその憧憬の標として居る救主の御母に選まれたのであると悟つ

て、心は言ひ知れぬ喜びに躍り上らねばならぬのに、聖母は一方ならず狼狽へなさいました、自分の誓つて居る童貞は如何なることがあつても汚してはならぬのだが、神の御母となつても、この童貞美を傷ける様では、一向有難くない、と思はれたから、少からず心配して、大天使にお尋ねになつたのであります。そして大天使から、「それは御心配なさるには及ばない、聖靈の奇特によつて御母になられるのですから、決してその童貞を傷けられなさる様な憂はムいません」と言はれなすつた時、始めて安心し、「我は主の召使なり、仰の如く我になれかし」と言つて、御承諾の旨をお答へになりました。

(十)—救主の御母は是非童貞であらねばならなかつた。聖マリアは神の御母として聖三位と密接な關係の綱で結ばれ給はねばならぬのでありました。神人たるキリスト様を生み奉つるの光榮を御父と共に分ち給ふのですから、また御父の如く清淨無垢であるべきは當然のことであります。世の光にて在す御子を生み奉つる以上、また御子の如く清い〳〵德の光を放つて、四方を照さねばならぬはずでございました。聖靈によつて、神の御母となり奉つるからは、また聖靈の如く一點の汚もなき童貞であらねばならぬのは、言ふ迄もない所でございませう。

要するに神様が人にお生れになると云ふからは、童貞を母とし給ふが當然のことで、童貞が子を產むと云ふ以上、神様以外の子を生むこと出來るはずもないのであります。あゝ終生童貞なる聖マリア、童貞中の童貞なる聖マリア、童貞にしてまた神の御母なる聖マリア、我々は聖母の辱うせし特典、母にして童貞であり、童貞にしてまた母であると云ふ、この唯一無二の特典を聖母に祝賀いたしませう。して聖母が神の御母の御位よりも、一層童貞の清さを重じ給うたことを思つて、清淨の德を何よりも重じませう。靈魂にも肉身にも、あらゆる幸福を得せしめる清淨の德を殊更愛重し、未婚者でありませうと、既婚者でありませうと、其身〳〵に守れるだけの清淨を守つて之を失はない様に務め、その爲に要する聖寵をば、終生童貞なる聖マリアの御傳達によりて天主様に懇願いたしませう。

我主の御受難

(一) 内心の御苦み

四旬節がまゐりました。痛悔の時となりました。誰しも心靜かに我身の上を反省して、罪を嘆き、心を改め、行を立直さねばなりません。それには吾主の御受難、御死去を默想するに限ると思ひます。

(1)—抑も吾主の痛々しき御苦みの玄義は、「贖罪の大法」と云ふ方面から觀なければ、到底説明が出來ないのであります。主がお苦みになりましたのは、世の始から天主様の御要求になつた償を献げる爲でありました。この償は我々の罪と嚴密に比例を取つたもので、主の浴せられ給うた凌辱は、